

中 篇

ビサヤン諸島及ミンダナオ

内 海 航 行

呂宋の状況は先づざつと斯んなものである、是から南方内海を通つてセブ、ミンダナオへ渡り、モロ人種の本場ホロから、日本人の千三四百も農業に従事して居るダヴァオ州を一見することゝ致さう、恰度後から來られた大阪の脇阪君も同行を熱望せらるゝ、七月の二十日にはロミュルスと云ふ定期船が出る、是に乗つて出懸ることゝした、呂宋とミンダナオとの交通は未だ十分に開けず、二週一回の船便である、歐洲戦争の影響は船賃が最近五割方も騰貴し、サンボアングの港まで一等船賃六十二圓三十錢とは驚く、ロミュルスはマリチム會社の船で總噸數八百、今を距ること三十五年の昔蘇格蘭のエデンバラで建造された鐵船である、現今の汽船は皆鋼鐵船であるが此船は只の鐵船で有る、以て其古きを知るべしである、一等運轉士は誇て鋼鐵では兎ても斯う長い壽命は保て無いと言つた、自慢は何様にも出來る

ものと感心して聞いた、一等船室が近年改造されて上甲板に有るのは有難かつた、午後四時半バシツグを下つてマニラ灣に乗出した、北方から驟雨の來らんとする如き模様で、バタアの山々は雲の冠が蔽被さつて空は大半薄墨色をなし、廣き灣内少しく白波を立て、居た、



トシセは物人)瀧のスヨニバソロ
(婦叢看の院病ルーボ)

例の油畫式の夕日は
何度見ても美しい。
山青く海は
綠に夕立の
薄墨の空に
映る白波
此日の温度は八十
五度であつたが、甲
板の上で食事を取ら
せるので、忽にして陸上の暑熱を忘却した、午後八時には灣口のコレヒドル島の左方を通過する、太陽は既に没して夜色暗澹たる中に螢を散じたる如く島上に火光の輝やくは家屋の多

きを知るべく、要害堅固の好避暑地羨ましく思はれた。

七月二十三日早起欄に倚つて右方を眺むれば一大島嶼が横はる、是は呂宋の西南角に接近するミンドロ島であつて、廣さ三千八百方哩長さ凡百哩、三角形を爲し山嶽重疊樹木鬱蒼たる美島である、久しく此ミンドロに住居して居つた同船の一米國教育家の語る所に依れば、此島の住民はタガログ、ピサヤン相半し砂糖、椰子、珈琲を耕作する、山中にはマンギヤン人と云ふ未開の人民があつて、其数は凡そ七千人と推定される、其内南方に居る者は頗る猛惡であるけれども、北方に居るものは至極穏和である、西班牙時代此島に罪人を送り、米領になつた後呂宋島から土匪或は山賊（ツリサネと云ふ）の類が逃込んで人氣甚だ穩ならず、小學校を設けたれども其兒童強悍にして頗る教師を苦しめた、山地には熱帯植物が繁茂して居つて容易に進入し難く、マンギヤン人の真相も未だ明ならず富源の調査も十分出来ぬ、先年來米國人で此地で木材の伐出しをやる者があつたが、今日は罷めた、此島の首府は東北角にあつてカラバンと云ひ東方に突出した岬があつて、比律賓名物の暴風に因る被害は極めて少ないといろく物語つた、此島を過ぎて船は航路を東南に取りシマダ島を初めに小島嶼の間を通つて行く風景稍我が瀬戸内に似て居る、十一時頃に船は一大島嶼に觸れんばかり接近して

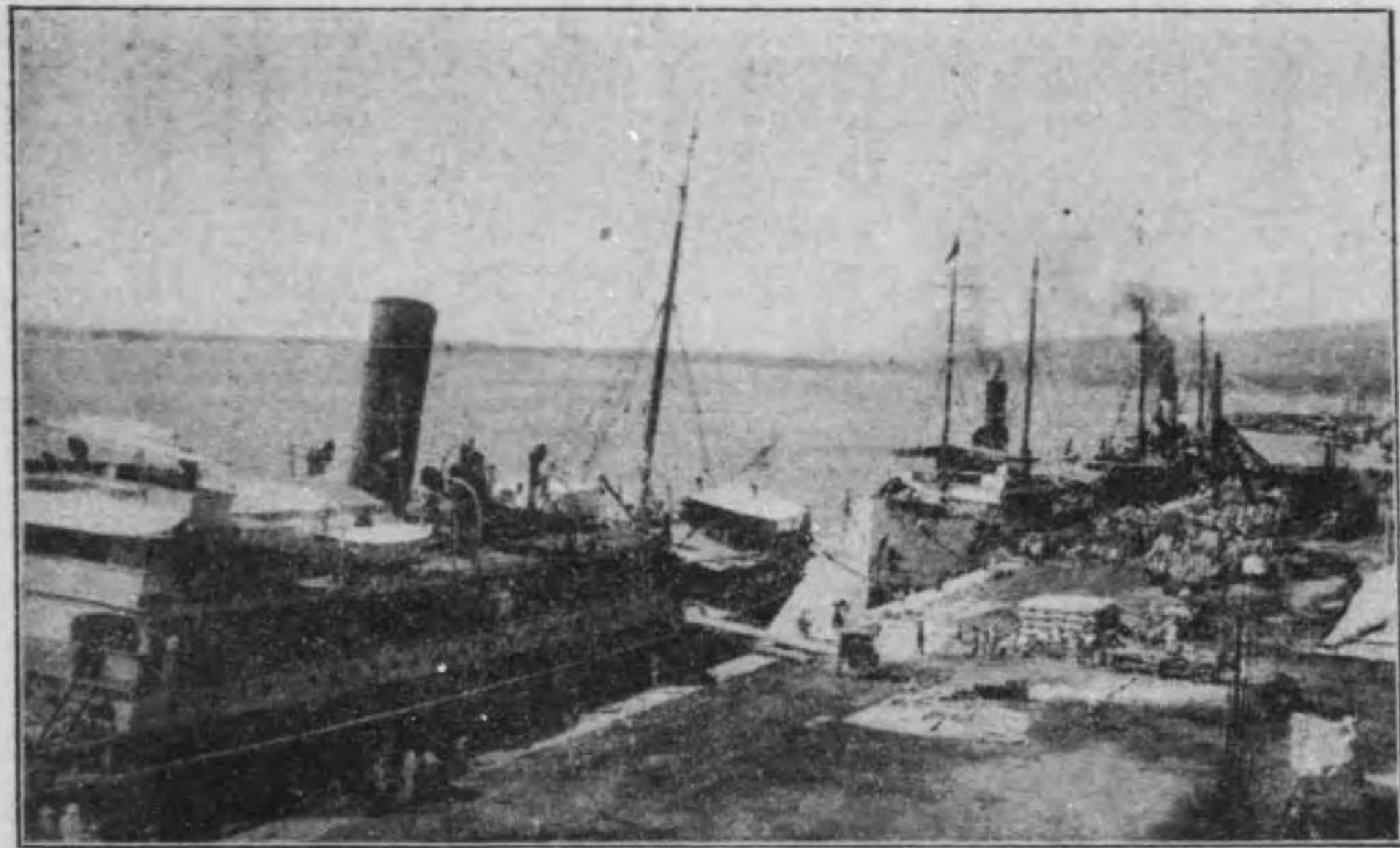
通るダボラスで其左方にシブヤン島を遠望する、午後六時昨の如く甲板で夕食する時右にバナイ島左にマスバテ島が見える、バナイはミンドロより少しく大きく正三角形を爲し、四千三百呎以上の山岳八座を有する、其東南岸にイロイロの港が有つて盛に砂糖の集散を行ふ、マスバテは片鎌槍の様な形の島で面積はバナイの三分一に足らず、附近の數小島を合して一州を形造る、産物は椰子で有る、此夜マスバテの海岸に近く盛に火の燃ゆるのを見た、大なる村落はないから恐らく山火事であつたらう。



(島ロドン)人ンヤギンマ

七月二十四日午前六時右舷に近くセブー島が横はつて居る、海濱に小村がある、ソーゴツドの漁村だとの事、セブーは薙刀のやうな細長い島で、中央に山脈がある、一番高いところで二千呎ばかりだが、幅が平均十五哩位だから割合に高く見える、全島の面積千七百方哩長さは百三十哩ばかりである、此島全體珊瑚礁石灰石で其上に薄く土壤の皮を被つて居る、椰子其他の熱帯植物が山の頂まで植ゑられて居る、比律賓諸島中人口最稠密で、従つて山地まで好く耕されて居る、其代り山林は伐り盡されんとして居るので、政府は頻りに殖林を勧めて居ると云ふこと、同船の一米國人醫師は遙にソーゴツド村の上方を指して「十數年前僕が義勇兵で出征して居た時同僚と共に、彼處の藪の中に追込められ三日ばかり潜伏して居つたことがある」との懷舊談は眼前の風景に魂を入れた。

セブー港はセブー島と之に對する一小島マクタンとの海峡中に在る、土地平坦數町の岸壁海に臨み、一萬噸級の船も市街に横付になる、西班牙時代には少し大きな船は皆沖繫りであつたのを、米領になつてから改良したのである、海峡中にブリンヌアリス、青島外一隻の獨逸船が碇泊して居る、開戦以來獨逸船の此比律賓に來つて領海外に出る能はざるものが二十二隻ばかり、其大部分はマニラ灣内に碇泊して他は此處とサンボアングの附近カルデラ灣に



セブー島の岸壁

居る、船は十時に此セブー港の岸壁に横付になつた、マニラよりも少し暑い、三神君の知人回漕業者のジャックス氏が使を走らせて余等を迎へ、同伴して州知事ロア氏を政廳に訪ふた、ロア氏は矢張セブー人で温厚の長者を以て聞えて居る、イデアール新聞のルス君から余を知事に紹介した、知事は直に自働車を命じ自ら案内して市内を見せて呉れた、舊市街からコロン街、小學校、高等學校、工業學校、病院等などの前を通つてオスマニヤの噴水のところに出た、是は近頃完成した上水道の記念で有る、オスマニヤの名を取つたのは、氏の州政上の功勞を顯揚するもので有る。

オスマニヤ氏の人望　比律賓へ旅行して余の驚いた一事はオスマニヤ氏の人望で有る、西班牙

政府に殺されたドクトル・リサールの記念碑が到る處の町に建つて居るのは不思議で無いが、四十歳になるかならず今活動中のオスメニヤ氏の名が百般の品物に附けてあるのは歐米にも其例が無いことで、今度もジョーンス案通過の記念としてオスメニヤ運動場と云ふのがマニラに出来るさうだ、今にオスメニヤ煎餅など云ふものが出来るかも知れぬ、まるで天神様のやうな勢で有る、然し聞いて見れば、氏が最初ライト總督に知られ、年少にしてセブの知事心得となつた時の働は眞に献身的で、一ヶ月間に四十郡を巡回して人民を安堵せしめた事もあれば、交通不便の田舎二十七個村を一週間で巡回し、親しく窮民の訴を聞いたこともある、或時は奮然起つて自ら武器を執り暴徒を鎮定して其勇氣を現はし、或時は自ら私財を棄て、學校を建て、其先見の明かなるを示すなど、恰もリサールを再生せしめて其經綸を行はしむる如き有様だつたさうだ、軍政廢されし後、公選せられセブの知事になつた時に衆票一身に集つたのも決して偶然で無いことが分かる、それから舊式な汚いセブの市街を變じて文明清潔の新市街たらしめたのも皆オスメニヤの方寸に出ること、水道の如きも矢張り氏の發案に係るのである、衆議院議員としてのオスメニヤ氏は、民心の結合國家的思想の發達に着眼し、人種的地方的偏見を打破せんことに盡瘁して居る、日本の御一新で言へば一寸阪本

龍馬の役廻りで、アギナルドをタガログの西郷とすれば、桂小五郎をも兼ねて居る、身體は小さいが腹は中々大きい、米人は氏を評して餘り政治家過ぎるなどと云ふが兎に角此長刀の刃のやうなところから豪い鋭い切れ者が出たものだ。

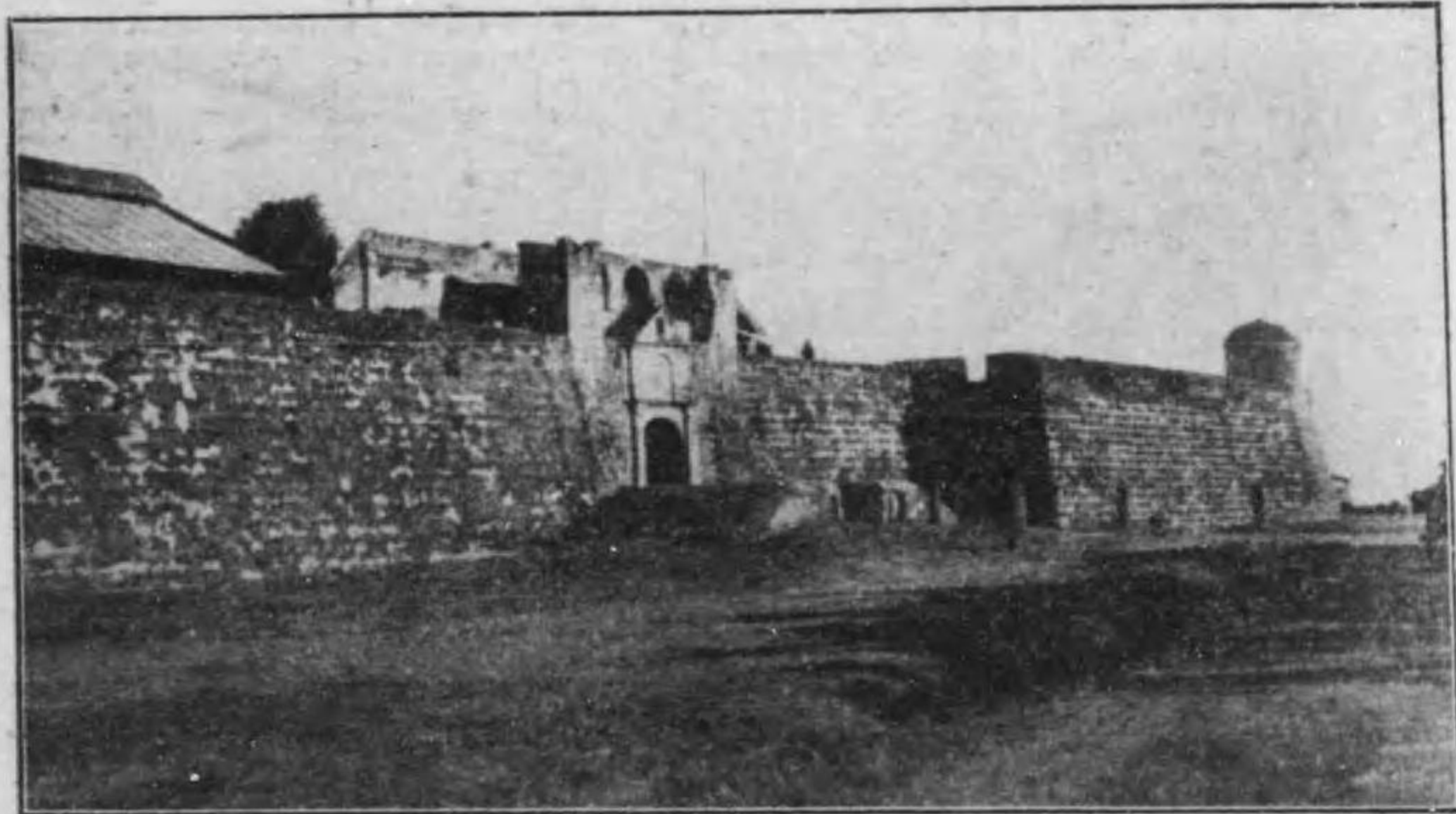
西班牙人の古跡

水道記念碑を見て市中に戻り、市役所を訪ふた市役所の前に古い圓形の建物が有つて其内に汚い木製の十字架が立つてる、其十字架の前に大きな寺がある、宗旨はオーグスチニヤンで、其本尊はクリストニヨ一名セブの童形聖像と云ふもので有る、此基督の尊像は千五百二十一年彼のマゼランのマガリヤネスが此島に來りし時、歸依者に與へたものに相違無いとの折紙つきで、遠近の信仰大方ならず、一年一度の御祭には、信徒四方より雲集



水噴ヤニメスオ

して大層な賑で有るさうな、恭しく堂内に参詣するに、建築頗る宏壯にしてマニラの本山に多く劣らず、美麗にして神々しき正面神壇の上に、童形聖神黒衣を被金冠を着けて立給ふ、畏くも亦尊き有様で有る、十字架の立つてる地點は彼のマガリヤネスが、其部下を率ひて最初の會議を開いた舊跡じゃさうな、何やら文字が彫つて有るが讀めぬ、此寺から數町北に行く海岸に古城が有る、此處がマゼランの假壘を築いたところで有ると云ふ、マゼラン落命の地は對岸マクタンの海濱に在つて、大なる記念碑が建立されてある、今日は残念ながら停船時間短くマクタンへは行くことが出来ぬ、知事と他日を約し送られてロミュルスに歸つた。セブ州は人口凡そ八十萬で、セブの市街の人口は七萬、州の歳入五十萬圓、市の收入は凡そ十八萬であると云ふことである、市街は舊市街新市街の二部に分れ、新市街は道路廣濶街衢端正、商店軒を並べ賑の觀を呈して居る、セブ港は單り本州のみならず、東部ビサヤン諸島即ちセブ以東の貨物を集散するものであつて、バナイ島のイロイロ港と拮抗しマニラに次ぐの商業港である、貨物の主なるものは麻であるが、今日ロミュルスには頻に石油を積込んだ、これは此島の北方に産出するもので、支那人が經營し龍牌石油と名付けて賣出して居る、石油の輸出先は主にホロである。



セブの古城

レガスピの比島征服

此處で一才レガスピを御紹介する、御承知の如く西班牙から最初に本島を見舞ふたのはマゼランで有るが、セブからマクタン島に攻入つて土人に殺された爲めに、其寄港は何等の利益をも西班牙に與へなかつた、其後西班牙からロアイサ(千五百二十五年)、サアベドラ(千五百二十八年)、ザイラロボス(千五百四十一年—四十二年)など云ふ者が此邊にやつて來たが、ミンダナオからモルツカの方へ抜けてビサヤ諸島へは來なかつた、其間に西班牙はフロリダ、西印度、墨西哥から南亞米利加の全部を手に入れたので、いよいよマゼランの島をも取るべしと云ふことで、時の國王フィリ

ツプ二世は墨西哥の太守に命じ兵船を送らせた、其大將に選ばれたはロベス・レガスビと云ふ老武者、參謀として法師ウルダネタ、此法師はロアイサの船員で其後出家し世界一周の強の者であつた、レガスビは兵船四隻に武者二百人水夫百六十人を載せ、千五百六十四年十一月メキシコを發したが、内一隻は恐くなつて途中から逃歸つた、其所で三隻の船で翌年四月にセブーに到着し、セブーの會長トバを降服させて此處に城を構へた、其所でウルダネタ法師は一隻の船を以て墨西哥に引返し、兵員の増加を請求したが、此歸りに初めて路を北方に取り風と潮流に乗つて今のカリフオーニヤの西岸に着く海路を發見したとは、何處まで豪膽な坊主であつたか。

それから墨西哥との交通が開けて西班牙船が續々やつて來た、レガスビは暫く居てバナイ島に移り、バナイを足溜りとしてマニラを攻めた、マニラには前にも言ふ如く三會長が居て武器は銅の大砲位備へて居つたが、優勢なる西班牙の武力に敵せず「セブーとは違ふぞ」と傲語したラジャ・ソリマンも遂に其城を棄て、逃走した、それが千五百七十年で、翌年レガスビは新に墨西哥から到着した多くの兵を引率し悠然としてマニラに入城したので有る、斯う云ふ次第で有るからセブーは比律賓島の根元で、フィリッピン二世の名に因むフィリッピンの名

はセブーから始まつた、後にレガスビはセブーの町に「最貴最勝ヘスウス市」の名を與へたが、餘り長くて通用せず、矢張りセブーで三百餘年を経過したと申す事である。

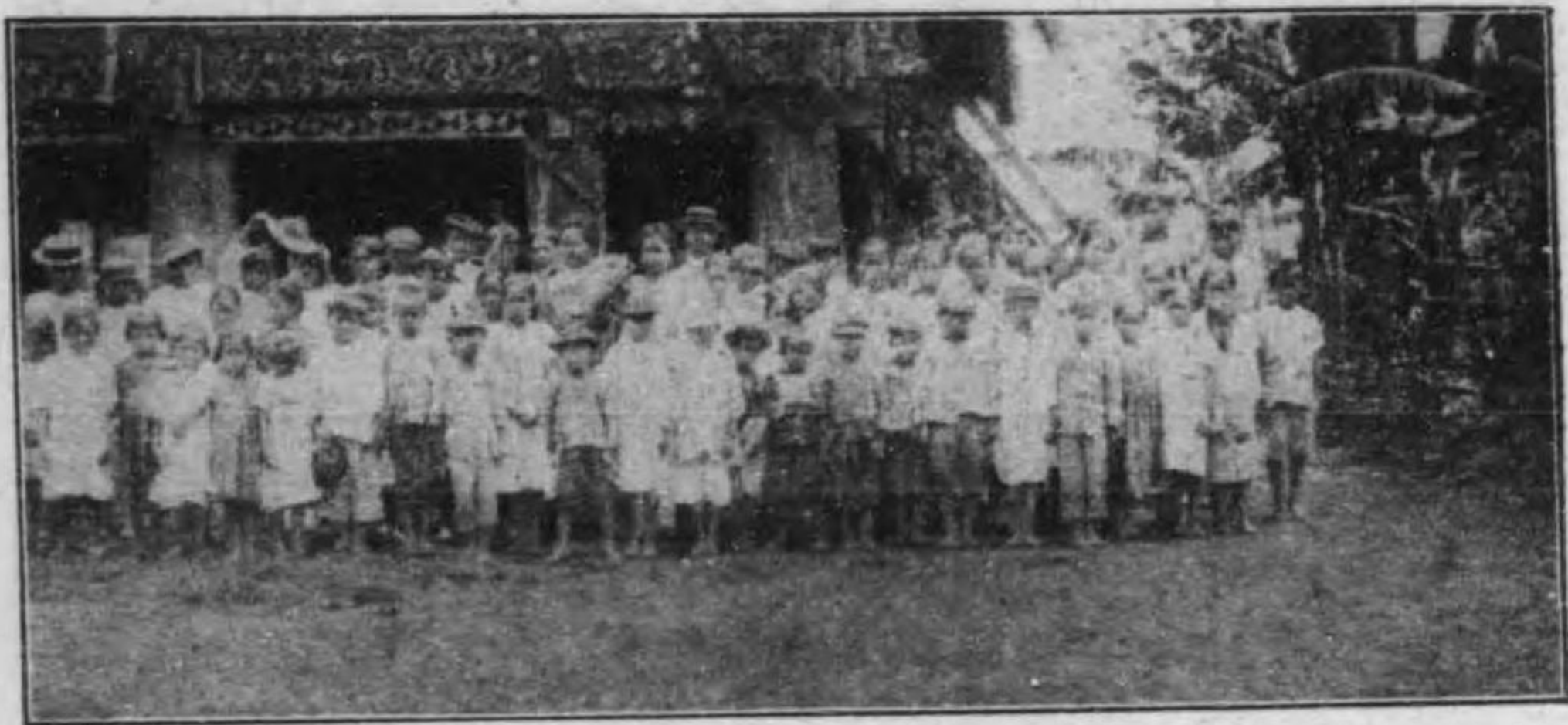
マニラを攻めた大將はゴイチ、サルセドの兩人で有つた、サルセドは非常の勇者で、數十人の兵を率ひて呂宋を横行し南はタババスから北はカガンまで征服した、千五百七十四年支那の海賊李馬奔が六十二隻の船でマニラへ攻込んだ時、サルセドは西海岸のピガンで其通行するを望見し、マニラ危し救はざる可らずと直に船に乗つて取つて返し、惡戦して李馬奔を打破つた、彼が長生したなら日本までも攻て來たかも知れぬが惜むべし早世した、サルセドはレガスビの孫で有つた。



像靈のヨニニトスリッ

カガヤン港とカガヤン町

七月廿五日午前七時の温度は八十二度で此時既に南方にミンダナオ島の連山が近々と見える、船は將にミサミス州のカガヤン港に到着せんとしつゝある、カガヤンは古い町で此の港から凡そ一里ばかりも奥に在る、港は小高き山々に圍繞せられたる一大灣と其一方に川口があるらしく、海は著しく濁つて居る、港には唯一軒倉庫があるばかりで其他は土人風の家屋が點々と見ゆる淋しき所である、倉庫の前に小さな棧橋があつて船は丁字形に此棧橋に横付けになる、倉庫はスミスベル商會の所有で、亞鉛膏ではあるが頗る大きい、此處に二時間ばかり碇泊する間に脇阪氏及同船の西班牙人ヒメネス氏と共にカガヤンの町に行つて見る、カロマタに乗れば三十分ばかりで到着する、其間は例の椰子林で道路は廣濶なる一等道路が開通して居る、其途中には新舊の小學校、職業學校等があつて、教員や生徒が書を挿んで往來する、其人々の服装は何れも清潔都雅斯る邊土に此くの如く文明の風が吹いて居るかと思ふと驚かざるを得ぬ、カガヤンの町は粗野な田舎町であつて、家々の周圍には多く芭蕉其他の植物が植えてある、商店は大抵支那人で、日本人は唯二人此村に住つて居る、其商賣は菓子



(オナダンミ)校學小の州オナラ

屋で其店頭を訪ふと、子供が澤山詰掛けて飴菓子を買つて居る、兩人共暫くも手を休むる暇もなく菓子の製造に従事して居つて、話も出来ない位な忙しさであつた、此他一人の日本人が居つたがそれは此處を距る三十五哩ばかりの内地に米人の經營して居る農園に雇はれて行つたと云ふ、後に聞けば彼の農園はウースター氏等の經營するもので、雇はれて行つた男は大工職で大に好評を博して居る、此村には頗る樹木が多くしてアカシヤ、サンパロ、タリセイ等は樹の蔭が憩ふべく休むべく清陰を形造つて居る、市内に小さな公園のやうな處があつて古い記念碑がある、風雨に曝された爲に其文字が磨滅して何の記念碑か分らない、其前に例のリサールの新記念碑が立つてる、村内小學校二ヶ所、警察、憲兵の屯所などがある、村外れにヘスイットの古い寺がある、ヒメネス氏は心安い和尚を訪ふた、自分等は堂

内に入つて見物する、例の如く金赫ずくめでマリア、耶穌、聖徒等の木像が十幾つか立つて居る、天井には油畫を以て聖徒の空を飛んでる所が描いてある、戸の入口から祭壇まで凡そ三十間ばかり、此の田舎に斯くの如き大なる堂を見るさへあるに、床には一面に化粧瓦が敷詰められて居る、以て如何に僧侶が到る處に其勢力を逞しくしたか分る、寺の前に二本の大なるタリセーの木がある、其蔭に休んで不圖樹幹を見ると不思議な蟲が居た、蜘蛛の種類で背が平たい、此蜘蛛は蟻を殺して其蟻の死骸を澤山に背中に背負つて、樹の皮の割目を歩いて居る、一寸見ると蜘蛛の網に懸つた蟲が風に揺られて動くかの如く見える、タリセーの樹は樹幹極めて彎曲し且節くれ立つて居る、其枝も亦奇妙に曲つて居る、葉は柏の如きもので其大なるは長さ一尺以上もある、支那人の所謂樗と云ふ樹は斯くの如きものであらうかと思つた、それから村内を歩いて見たら、シンガミシンの店があつて、數十臺の機械が陳列してあつた。船に歸つて十時に碇を上げたが、灣を出れば海色コバルトの如く、船は碧空を航するやうな工合、それより再び進路を北方に執つてネグロス島のドマゲテに向ふた、比律賓内海の船舶は總じて軍隊用の簡便寢臺を備へて居り、船客は船室内に入らずして甲板上に寝るのが普通である、余は風を嫌ふ性分なるが故昨夜までは船室に寝ぬ、今夜初めて甲板上

に寝た、海風暑からず冷たからず何時しか穩かなる眠に就いた。

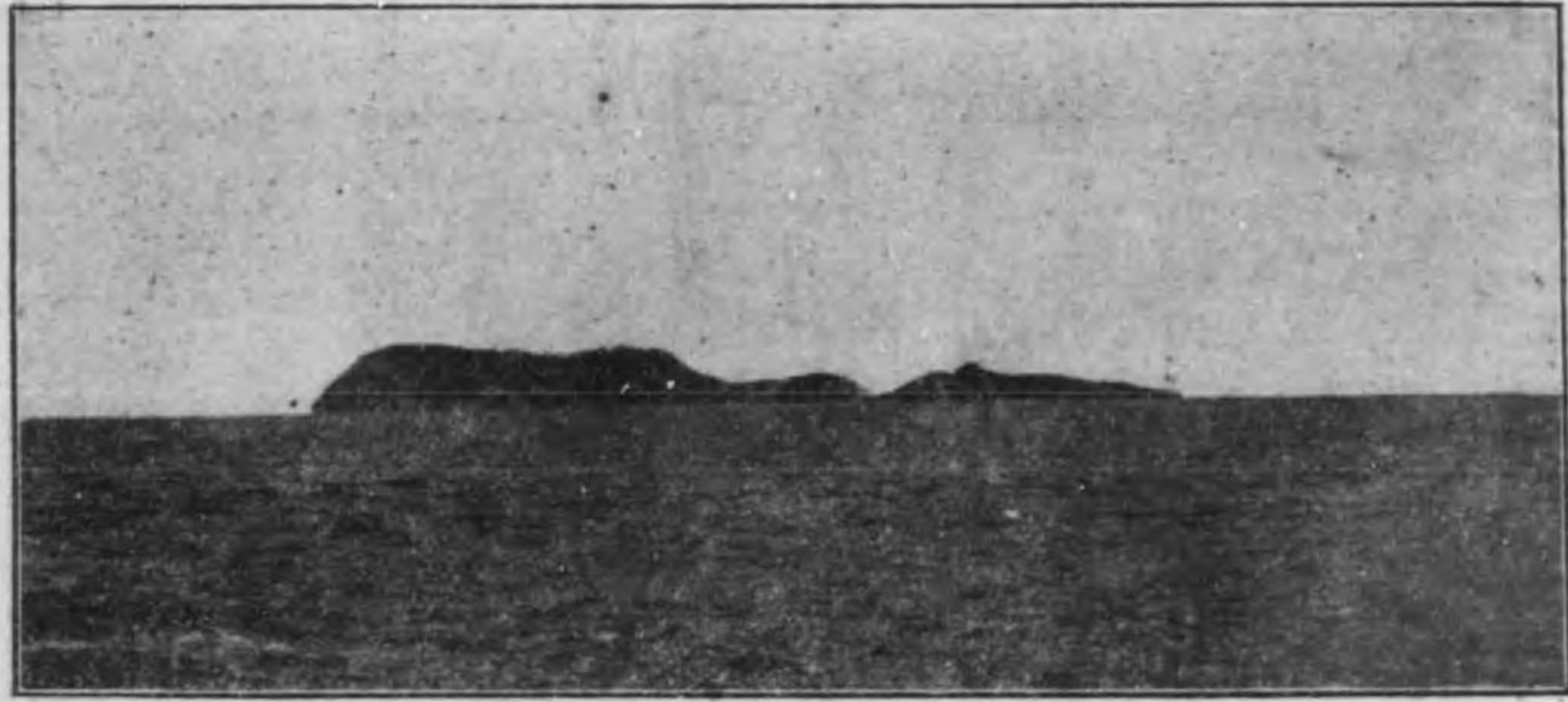
シリマン學校

七月二十六日朝七時に起出づれば船は早やネグロス島に近づいてドマゲテの家々が手に取る如く見える、頓て四五町の沖合に碇泊した、此處ばかりは棧橋が無い、陸地との往復は土人のビンタ(小舟)を用ふる、其細長き刳船は四角に組んだ木框で水の上に杖を突き、船上には竹で造つた椅子があつて、其上に二人位並んで腰掛けることが出来る、土人二人で之を漕ぎ十分間にして海岸に達する、小舟から砂濱へ上るには船頭の肩に乗り、若くは運臺の如きものに乗る、ドマゲテは海岸の一



校 學 シ リ マ ン

小村落であるが、此邊は一體に富有と見えて白塗の木造家屋が數多く立並ぶ、此處に有名なシリマン・インスチチュートと云ふ學校がある、大學總長ザイラモア氏の添書を持って校長ヒッバート氏を訪ねたら、大に喜んで直に學校に同伴した、此學校では毎朝生徒一同大講堂に集つて讚美歌の合唱、聖書の朗讀、祈禱、校長の報告及諭示等がある、余も校長と共に壇上に上つて見た、生徒の數凡そ八百人フィリップノ、支那人等の子供で、女生徒も若干其中に交つて居る、何れを見ても日本人と同じやうな顔をして居る、校長の訓示の中に學生中往々女生徒の名前を机又は黑板、壁等に書く者がある、斯くの如きことは將來紳士たるべき者のすべき事でないと言つて大に戒められた、何れの處にも惡戯者のあること及び其惡戯の仕方にも大凡同様であるのを知つた、會合終つて校長は余を誘つて學校の構内を巡回した、其工業科の教授法は頗る實際的で大に此國の現狀に適して居る、此學校は米國の慈善家シリマンと云ふ人が數百萬圓の金を捐つて、千八百九十九年に設立したものである、課程は小學中學及大學まで備つて居る、比律賓島中二十六州の學生が現在此處で學んで居る、校内には病院もあり、亦四百人を收容し得べき寄宿舎も出來て居る、敷地は凡そ二十五エーカー尙どれだけでも擴張が出来る、學校の外で今まで目に觸れざる樹木を見た、其樹は灌木で灰白色の幹を有し



アボの奇島

幹に接續して濃綠色方形の枝が數本に分れて直立し、其枝には綠色楕圓形の厚い葉が貝殻を重ねたやうに重なつて居る、而して其楕圓形の葉には小さな刺が澤山に生えて居る、校長に尋ねたら仙人掌の一種で有毒な樹液を有し、誤つて眼の中に汁を入れれば赤く膨れ上つて容易に治らぬ、無頓着な水牛さへ此樹に觸ることを厭がるから、牛除け泥棒除けに妙であるとの説明であつた、後に之を人に尋ねて樹の名をソロンロと云ふことをやうやく知り得た、此邊水に乏しく井戸を掘るのに二百尺程も掘下げて漸く良水を得ると云ふことである、ドマゲテの前面にはシキホルの小島あり、北方にはセプー島の南端を遠望し背後には高山が連つて居つて眺望頗る濶大である、氣候は極めて變化少く、周年殆ど同一、颱風の害も極めて稀であると云ふことである、十時半此地を發してサンボアンガに向つた、ドマゲテの

西方は富士の裾野のやうな緩傾斜の山脚で、其地上には椰子が密生して居る、暫くして船は航路を西南に取つて進行し、彼のリサールの流瀆地たるダビタンの北方に至れば、印度佛を仰向に臥させたやうな奇島がある、其名を問へばアボと云ふ、日本なら臥佛島と名付けるだらう、此邊は海色紺碧、アボの奇島は美しき淺綠色を呈し頗る心持の好い景色である、暫くして日暮れ海風は愈々其涼しさを加へた。

七月二十七日は又前日より涼しい午前五時ミンダナオ島の山々が見えて、七時頃には其山が天狗の鼻の如く西方に突出するを見、船は懸て其尖端なる首府サンボアンの港に安着し、余等は太田興業會社の木村君に迎へられ其樓上の客となつた。



ド マ ゲ テ の 船

ミンダナオ及スルー

ミンダナオは北海道より少し大きい島で、今二州七縣に分れて居る、二州と言ふのは耶蘇教民の居るところ、北岸のミサミスと東北のスリガオで中央政府の直轄である、七縣はスルー、サンボアンガ、ラナオ、ブキドノン、コタバト、ダヴァオ、アグサんで、之を總稱してミンダナオ及スルーのデパートメント(省)と云ひ、呂宋の山地マウンテン州と同じく稍異なりたる政治を行ふ(七縣の人民は余の旅行した時まで代議政體に加はらなかつた、ジョーンズ氏自治案の結果此省から上院議員を出すこととなつたが、それは選舉でなくて長官が任命するので有る)其人民はフィリピノの外にモロ、スバナン、ブキドノン、バゴボ、ボワヤン、ピラン、マンダヤン、マンサカなど稱せらるゝもので、人種は我々と同屬其數總て六十三萬ばかり、内回教徒のモロ三十二萬、基督教徒のフィリピノが十三萬ばかりある、三萬六千方哩に六十二萬だから一方哩に十七人、海岸と河濱の外は荒寥たる原野、鬱蒼たる森林である、住民の活計は農牧漁でまだ工業時代に達しない、政府の方針は慍悍なるモロを懐柔し、蒙昧なる非教民を教育し、全島に道路を開通し、中部及北部より人民を移住せしめ水陸の富源を

開いて文明の樂土を現出せしむるに在る、千八百十三年以來軍政に代ふるに民政を以てし、フランク・ダブルユー・カーベントー氏最初の長官として着々治績を擧げつゝある、七縣中三縣は米人の知事(コタバト、ラナオ、スルー)他の四縣はフィリッピン人の知事が政廳を主宰して居る。

めたなう、サンボアング

ミンダナオは呂宋と同時に昔の日本に知られたるものである、徳川三代將軍が枕屏風にした世界地圖中にもちやんと比律賓地方の島々が書いてある、島名はぶるねる、まかさる、しやば、しやかたらん、はつ、呂宋、めたなう、まろく、らいらん、たかさご、からかなど見える、其中のめたなうが即ちミンダナオである、比律賓の歴史上でもミンダナオは亦頗る古いもので、西班牙人はマニラ略取の後間もなく此處に砦を築いた、但し其地點は今のサンボアングでなくて少しく東方のカルデラ灣であつた、カルデラ灣は此近傍で最も海水の深い入江で、可成りの大船が其天然の岸壁に横付けらるゝ如き地形である、此處に砦の出來たのは、千五百九十八年である、それから三十七年後には今のサンボアングの所に小さな城が出來た、



(地の瀉流ルーサリ)望遠のンタビダ

我國の寛永十二年に當るから随分古い事だ、サンボアングと云ふ名稱の起りは西班牙人の間違ひに原因し、船の「もやい棹」から來て居る、カルデラ灣の西班牙人が初めて此邊を巡視した時、モロに地名を尋ねたら、モロは自分の手に持つ品物のことかと思ひ、サンブアングと答へた、西班牙人はそれを訛つてサンボアングと言つた、米國領有後は又サンボアングになりかけて居る、此附近には尙モロ人種が澤山住つて居つて、カワ／＼と云ふモロ村が市外に在る、ミンダナオのモロは土地が廣い爲めか早く海賊の業を罷め至極穩和な生活を營んで居る。

地勢大觀

ミンダナオ島の形は柄杓の如く其地勢は縦に三本

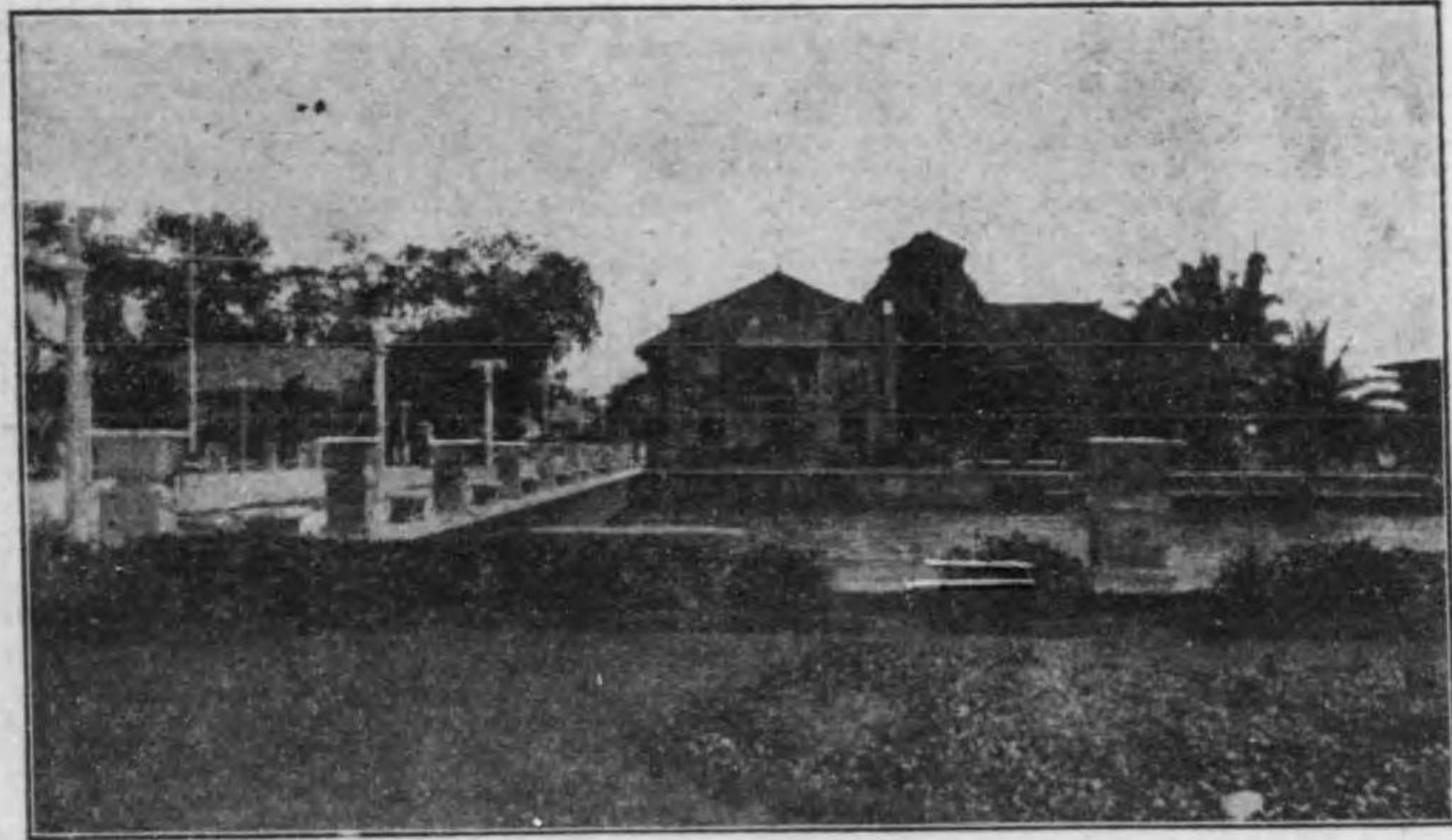
横に一本の山脈があつて(三本は柄杓の頭一本は其柄に當る)東北と東南に稍大なる平原が有り、中部は高地で四千呎以上になつて居る、東方から數へ第一と第二の山脈の間に二つの入海がある、北方をミサミス、南方をダヴァオと稱する、而してアグサン、タグムの兩川が北と南に相背いて流れる、アグサン川は呂宋のカガヤン川を繰返したやうな形で、二百四十哩の間二大山脈の間を流れ、川の兩方に二三十哩の平原を有して居る、吃水六呎の船は二十哩、以下の小船は百五十哩の上流に遡ることが出来る、將來ミンダナオの發展は此河の兩岸に在りと頻りに涎を垂れる米人が幾人も居る、余は地圖を一見しタヴァオ灣から此川に沿うて北岸まで鐵道を架けたら好からうと説いたら、それは駄目だアグサンの水源地はミンダナオ地震の中心で地面がまだ固まつて居ないと或技師が言つた、恐ろしいところだ、第二第三の山脈の間北方にマカバラン、イリガン南方にイラナ灣が有り、ラナオ、コタバトの二大平原が一小山脈によつて堺せらるゝ、コタバトの中央にはブルアン湖が有り、其湖水から本州第一のプランギ川が流れ出てイラナ灣に入る、又ラナオの中心には同名の大湖が有つてそれからアグス川が流れ出る、ラナオ、サンボアンガ兩縣の境はボンボン湖の幅位の狭い地峡で繋がつて居る、此處を堀割つたら好からうと思はれる、生憎山が堅くて中々廉く出来ないと思ふがことである。

ふがことである。

モロの神話

モロ人種は南方シンガポール地方からボルネオを経て本島に渡來したもので有る、彼等は慍悍な海賊人種では有るが、昔から回教徒で、アラビヤ文字を使用し、古記録や系圖を所有し、其社會は國家に似たる制度を有し、ソルタンを戴き、習慣に基く法律を有して居る、決して野蠻人を以て目すべきものは無い、其ミンダナオに關する神話が一寸面白いから此に御紹介する。

昔々其昔カブングスワン王がジョホール國からミンダナオに渡り給はざる前何千年、此島は今日の如き地形で無く、海水が深く陸地に侵入し、海面には



(局便郵兼廳政が物建の面正)橋棧大のガンアボンサ

數千尺の高山のみニヨキ／＼と現れて居つた、併し人間は既に澤山島内に生じ、島山の周圍に村落をなして住つて居つた、所に何處より來りけん四匹の兇惡なる怪物が現れて、片はしから其人民をムシヤ／＼と取喰つた、是は堪らぬと残りの人間は山中の洞穴に逃げ籠り全國荒廢の有様となつた、其怪物の第一はクリタと云ふ海陸兩棲動物で、澤山の手足を有し、カバラ山を本據となし、近傍の生物を取喰ふ、第二はタラブローと云つて、形は人間のやうだが雲突くばかりの大怪物、其性極めて兇惡で遠近悉く其襲ふ所となる、住所は東方のマトトン山であつた、第三はバーと稱する怪鳥で、大さ垂天の雲の如く、飛ぶ時は羽翼太陽を蔽ひ、其下方一時暗黒となる、其卵の大さは人間の住家以上である、此鳥はラナオ地方に住しビタ山に巢を構へ、矢張人間を以て餌食とする、第四は無名の怪鳥で七つの頭を有して居り、グライン山に栖んで其附近を荒した、恰も其時西方にマンタブリと云ふ國があつて、其國の王をインドラバトラと云ふた、寛仁大度の聖王でミンダナオの慘狀を聞いて大にこれを憫み、其弟スライマン王と云ふ豪傑に怪物退治を相談せられた、スライマン王は一議にも及ばず承諾し直に出發することゝなつた、インドラ王は大に悦び、其實とする一個の指輪とジュル・バカールと云ふ名劍とを與へ、それから一本の幼樹を取つて其居室の窓前に植ゑ、此

樹の枯れざる間は賢弟は無事なりと思ふで有らう」と言つて手を分つた、スライマンは神力を以て空中を飛行し、忽ちミンダナオに着しまづカバラ山に降り立つた、山頂から四方を眺望すると、成程村落は荒れて人影も見えない、「憫れむべし恐るべし」と思はず獨語するや否、全山忽ち震動して何處よりか彼の怪物が現れ、王に飛掛つて其鋭き爪を王の身體に打込んだ、王は何を小癩なと劍を抜いてクリタをずだ／＼に斬り割いた。

今度はスライマンはマトトン山に飛行し、再び山頂より眺望すると、其荒廢の有様は更に一層甚しい、暫くすると林中から恐ろしい山男が現れ出た、即ち彼のタラブローで、

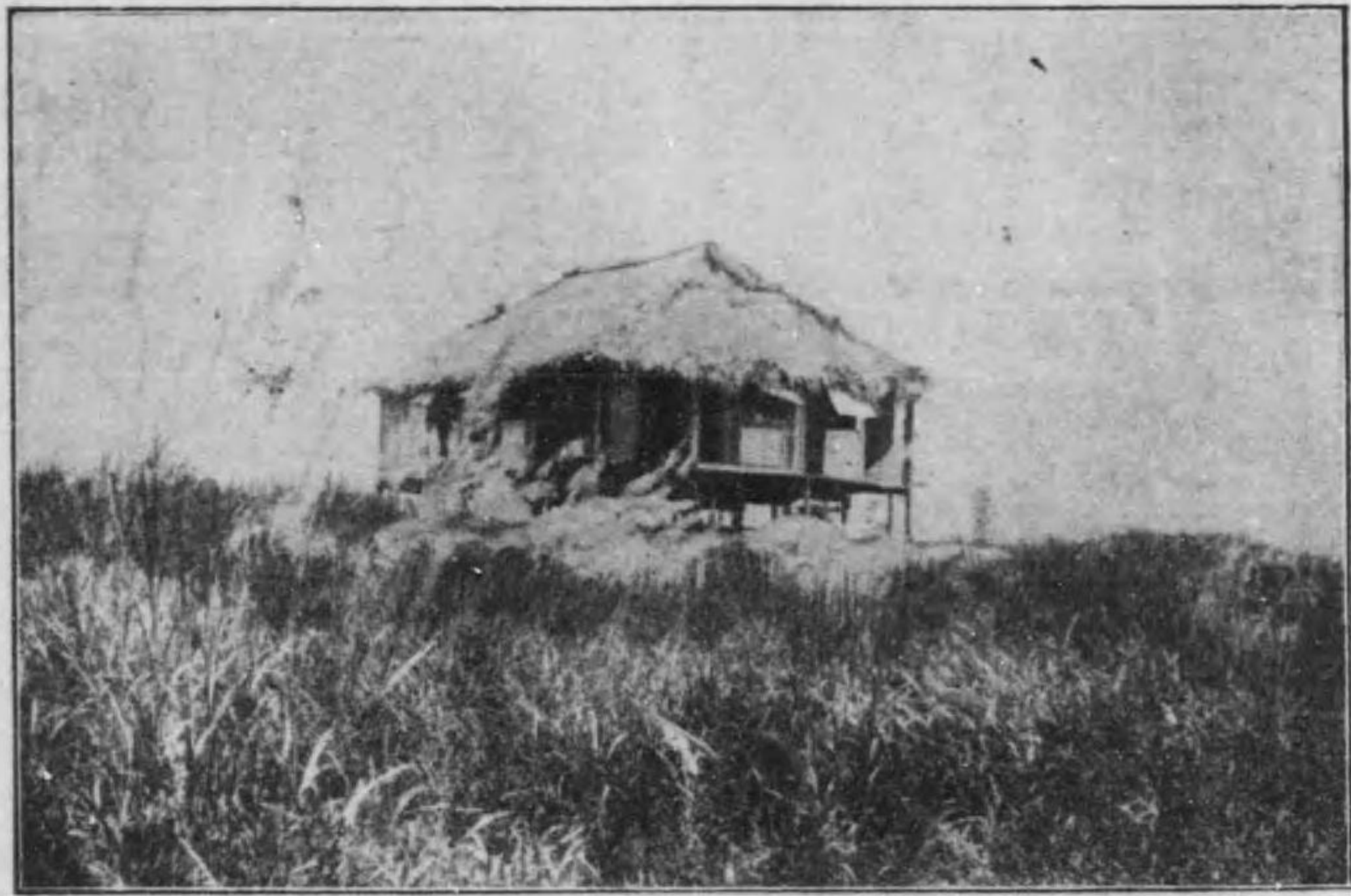


(長倉のロモは人土事知は人米)地高のオナラ

奇なる叫聲を發しつゝスライマンに飛掛つた、スライマンは身をかはし屹と彼を睨み付けた、するとタラブソーは人語を發し「殺さば殺せ我は犠牲となつて死すべし」と云ひつゝ大なる樹の枝を折取つてスライマンに打掛つた、スライマンは劍を抜いて渡り合ひ、交戦數合怪物の疲れて地上に仆るゝを取つて押へ刺通せば、タラブソーは手を舉げて暫しと止め頻りに王の強いことを稱揚した、王は兇惡の報ひ思ひ知れと尙も彼を刺通し遂にこれを殺した。

次にスライマン王はピタ山に飛んで行つた、此近傍は荒廢殊に甚しい、王は慨嘆し「嗚呼如何なる慘狀ぞ、憐れむべき人民なる哉」と言ひつゝ歩を進めると一天俄に掻曇つて凄しい景色となつた、驚いて空を瞻上げると驚くべき大怪鳥が黒雲の落つる如く空中を舞下つて來た、是こそ彼のバーなれと、劍を抜いて待設け一撃に其片翼を切落した、すると其大なる翼が王の頭上に落掛つて王を押潰した、鳥も死んだがスライマンもやられた。

偕又マンタブリ國ではインドラバトラ王は毎日彼の樹を眺めて弟の身の上を氣遣つて居つた處、或る日見ると其樹が枯れて居る、王は大に驚き且つ悲しんだが、此仇を討たずに止むべきかと直に空中を飛んでミンダナオに來り、先づカバラ山に降り立ちて見れば其處にクッタの大骨がある、マトン山に行つて見ると其處には又タラブソーの骨が有る、遂に



ナラオ山の間の小學校

ピタ山に行つて見ると怪鳥が死んで居る、何氣無く切落された鳥の翼を取上げると其下から人間の骸骨が現れた、其傍に彼の名劍が有る、是ぞスライマンの遺骨である、インドラバトラ王は暫く啼泣して弟を弔ひつゝ、不圖其傍を見ると小さい瓶があつて水が一杯這入て居る、是ぞ天の靈水を下し給ふものならんと試みに水を其骸骨に注ぐと、奇なる哉妙なる哉骸骨は忽ち肉を生じてスライマンの姿が舊の通りになり、睡眠中に兄王の來りしを怪しむばかり、少しも死んで居たことを自覺せぬ。然し兄王が見えたからスライマンはマンタブリに歸つて休息することとなり、インドラバトラ王は最後の怪物を退治せん爲めグラ

イン山に飛んで行つた、果して其處に七頭の怪鳥が爪を磨して待つて居た、王は即ちジュールバカールの劍を抜き忽ちに之を斬殺した。

怪物退治を終つたインドラ王は避難民を安堵の爲島中を巡回したが容易に見當らぬ、或日一人の奇麗な少女が遙か前方を歩み行くを見てこれを追駈けた處、少女は地中の穴の中に遁入つて行方が知れなくなつた、王は餓え且疲れ、と有る岩石に腰掛け何心無く其傍を見ると米を入れた壺があつて其側に焚火がして有る、王は占めたりと彼の壺を取り、焚火に跨つて兩足の間に壺を挟み、そろ／＼米を煮初めた、其所へ一人の老媪が現れて「是は強い人だ」と大に驚き呆れた、王は米を煮て食ひながら此老媪と物語り、此邊の人間は大抵怪物の爲に殺されたが、老媪夫婦は樹の空洞の内に隠れて纔に其命を全うし、其他の者は地中の洞穴に隠れて居ることを知り得た、王乃ち老媪を案内として洞穴の中に這入つて見ると、洞内頗る廣濶其一部に會長の住居がある、會長に向つて怪物退治の事を物語りつゝ、不圖見ると前の少女が居る、御約束通り會長の娘で、會長は感謝の意を表する爲め其少女を王に與へた、其所で人民は安心して段々穴の中から出て来て再び平和幸福なる村落を形造つた、そして其時から海は段々退いて陸地が段々増加して來た、インドラ王は暫く此地に滞在の後本國に歸らうと



川 ト バ タ コ

したが、曩にスライマンに與へた指輪の事を思出し之を捜す爲め又方々歩行いた、或日海岸に近く一張の網を拾ひ其網でブガンガと云ふ魚を捕つて之を食べた、すると其魚の腹から彼の指輪が出て來た、王は之を得て満足し、妃と親とに分れてマンタブリ國に歸つた、マンタブリに残つて居つたインダラ王の正妃は其前から妊娠であつたが、王の歸國後に男女の雙兒が生れた、此雙兒がラナオ近傍の人民の先祖であると云ふのである。

モロの此神話は我國の素戔鳴命、彦火々出見命、日本武尊の話に西遊記を調査したやうなものだが、ミンダナオにあるモロ人種の中に最も廣く行はれて居る、尙幾多の不思議なる事蹟が此王に就て傳へられる、之を英語に書いたサリビー氏の説に、アラビ

ヤ語が土名に混入して幾分外國化せられて居るが、全體の調子は純然たるミンダオ風であるとの事で、外國から輸入した傳説ではないさうだ。

ミンダオ國の開祖カブングスワン王が此島を統御するに至つたに就ても亦古傳説がある、抑もミンダオと云ふ地名は中央の大河プランギから起り、昔はミンダオと言はずマギンダオと言ふた、マギンダオと云ふは「水の出る處」と云ふ意味である、此マギンダオ地方即ち現在のコタバト地方に古昔タブナワイ、ママルーと云ふ兄弟があつた、或日漁梯を造る爲に竹を切つて居つた所が、ママルーは藪を切盡して唯一本の竹を残した、タブナワンはママルーに向つて一本残すのは不吉皆切れと云つた、ママルー乃ち其竹を切ると中から一人の少女が出て來た、刀の先で小指に傷を負はせられて居た、タブナワイ此少女をママルーに養はせた、其前に亞刺比亞のメッカからアビディーンと云ふ回教師がジョホール國に來つて其王の婿になり、一人の子が生れた、其子が賢人で多くの信徒を率ひ海を越えてマギンダオに移住し、タブナワイの賓客となつて人民を教化し大に回教を此地方に弘めた、タブナワイは此南來人の賢明なるを見て彼の竹姬を嫁した、是が即ちカブングスワン大王であるとのことである。

モロの種類

モロが何處から來たと云ふことは今明かでは無いが、右の傳説にも見ゆる如く其一部が新嘉坡邊から來たことは略窺はれる、古い西班牙人の記録によれば、三百年前は北ボルネオに大なるモロの都が有つて、人家二千五百を算したと云ふから、マニラ、セブ一邊へも宗教を傳へたばかりで無く、必ず若干のモロが移住して居つたに違ひ無い、彼のバナイ島の如きもレガスピ時分に人口が多く後世却つて減退したので有る、モロの比律賓襲撃は彼に在つては或は復讐戦で有つただらう、一千九百三年の比律賓國勢一覽はモロを大別してサマル、バハウ、モロの三種とし更に其モロをイラノ、ホロ、カリブガン、マギンダオ、マラナオ、ヤカンの六種として居る、マラナオは主としてラナオ、イリガン



查巡ロモのガンアボンサ

地方に住し、マギンダオはコタバト地方に住し、イラノは極少数でマラバン、サンボア
ガ地方に、カリブガンも同様サンボアガ附近に住し、スバノ人と混血して居る、ホロモロ
はホロ島を中心として四方の群島に散在し、ヤカンは主にバシラン島に住居して居る、大別
中のサマル・モロはダウアオ灣内のサマル島を本據とするもので、最近にジョホール附近か
ら来た形迹があると云ふことで有る、モロと云ふのは彼等の本名では無い、モロは西班牙人
が回教徒を呼ぶ言葉で、ムール即ち亞拉比亞人から来て居る、然し久習の爲彼等自からもモ
ロと稱するから恰も人種の名の如くなつて仕舞つた。

モロの服装は至極簡單、男女共にサロンを着け又は女は寛き股引に筒袖の上衣、男は細き
股引に短き筒袖を着る、腰に帶ぶる刀は庖丁の如きをボロング、波形のをクリスと稱する、
檳榔の實(ブンガと稱す)に石灰を混ぜブヨと云ふ樹の葉に包んで食ふから、齒が眞黒唇が眞
紅になつて居る。

西班牙人とモロ

西班牙人の来た時はカブングスワンの子孫がミンダナオの各地に住居し、一人のソルタン



モロの騎打

を戴いて自治して居たので有る、其頃の西
班牙は頗る強かつたが、モロだけは手に合
はず、戦争は事實上亞米利加人の来る頃ま
でも繼續して居つたので、ミンダナオ、ス
ルの領有は唯名義ばかりであつたのであ
る、されば和蘭や英國は西班牙の領有に對
し抗議を提出し、米國の如きも前世紀の初
め其軍艦を派し、勝手にホロのソルタンと
和親を行つて居る、スルのモロはミンダ
ナオと違ひ、ホロ其他の小島に本據を構へ
て居るから、勢ひ四方を劫掠するを以て最
も容易なる繁榮策としたものである、殊に
其海面は四時靜穏だから刳船に乗じて比律
賓諸島を襲ひ、財寶を掠め人民を生捕り、

之をホロに連行して奴隷として使役した、其往來極めて不意に出づるが故にビサヤン諸島の人民は之を防ぐに苦しみ、モロ來ると聞けば老幼荷擔して山中に逃れると云ふが如き有様で、恰も支那に於ける八幡船に髣髴たるものがあつた、されば呂宋以南の島々には悉くモロ船發見の爲の望樓が有る、西班牙政府が比島の安寧を圖る爲に武器を取上げたのは又モロに取つて極めて好都合であつた、モロは其備なきに乗じて益々跋扈し跳梁を逞うして、千七百年代の如きは一時はサンボアングの前面なるバシラン海峡の如きも船舶の通航を許さざる有様であつた、其所でマニラ總督バスタントはサンボアングに兵を送りモロに向つて戦を挑んだ、ホロのソルタンは之を聞いて赫怒し、コタバトのソルタンと謀し合せ、一百艘の軍船三千の兵を以てサンボアングに攻來つた、サンボアングの守兵は僅に二百人に過ぎなかつたので大苦戦となり、三ヶ月籠城の後やつと此聯合モロ軍を撃退することを得た、其後もモロはサンボアングの城砦を攻落さんとし屢々此地に來襲した、其間千七百九十八年には英國艦隊が來襲し、又城内に拘禁せられた七十人の囚徒が守兵を殺して城を奪ひ一時大に官軍を惱したとなどもあり、千八百九十八年に至つて遂に米軍の爲に占領さるゝに至つたのであるが、モロ其他の戦に慣れたサンボアング人はマニラ陥落と同時に共和國を建て、千八百九十九年の夏

までは其手を以て地方を治めて居つた、冬に至つて共和国の政治家中に異論を生じ、同時に亞米利加政府が海軍を送つて此地を占領せしめたが爲に小共和國は何時しか滅亡して了つた、斯う云ふ人氣の所であるから千九百十三年七月十五日までは、米人も軍政を撤しなかつた次第で有る。

サンボアング市

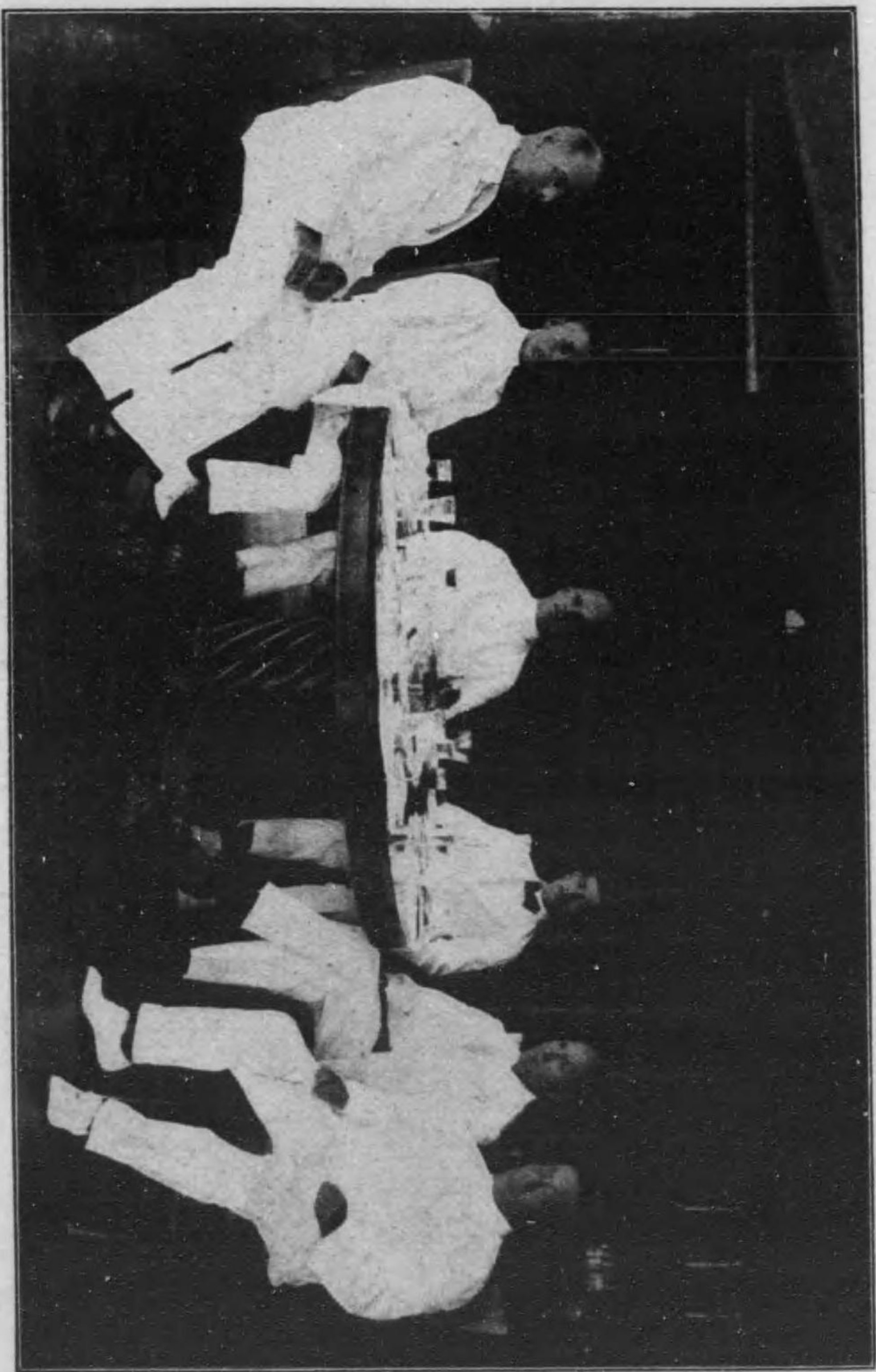
ミンダナオの諸港中最も多く物貨の集散する地はサンボアングで、輸出品の主なるものは麻、木材、コブラ、眞珠及眞珠貝、コバル護謨、ルン



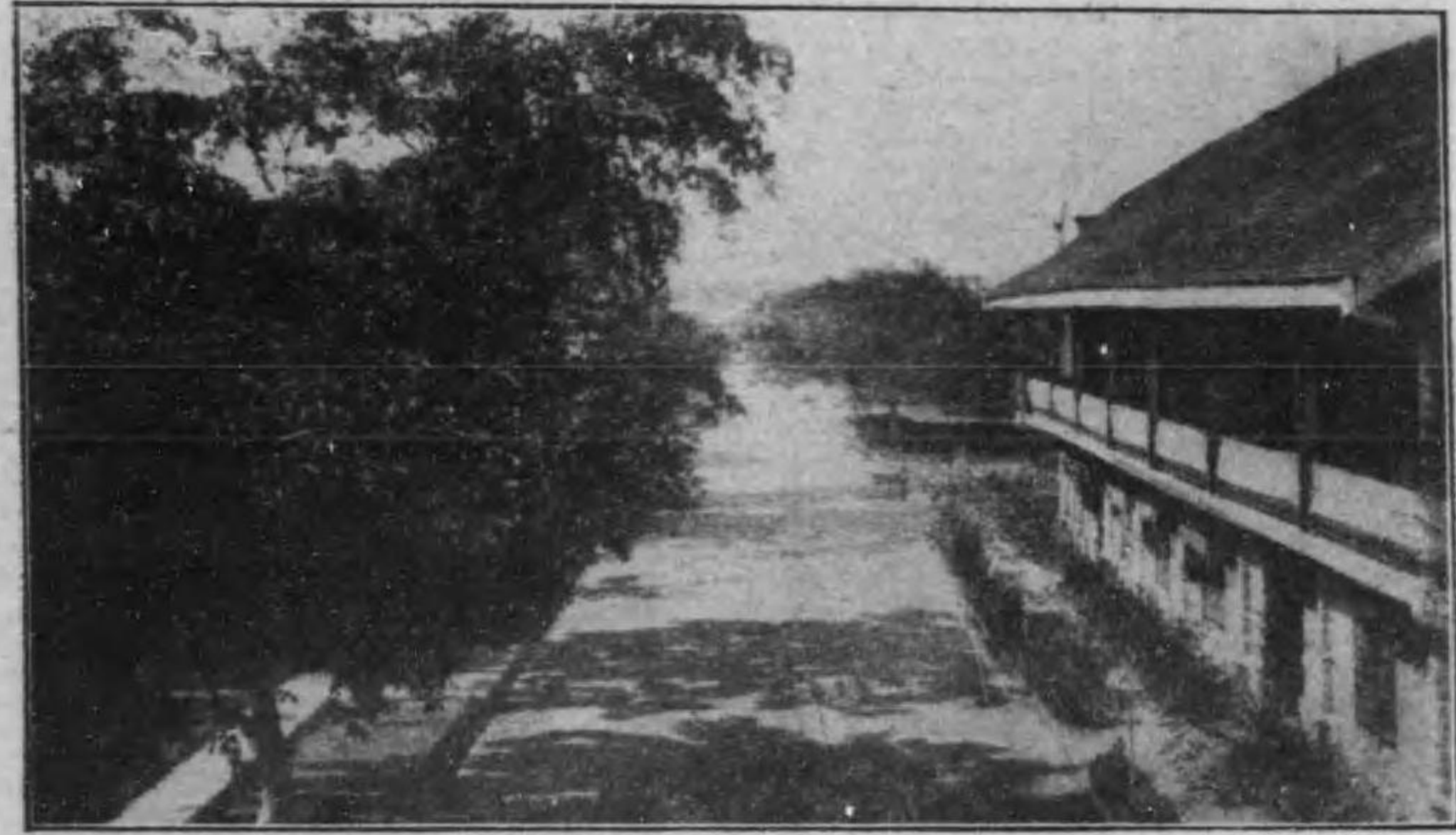
コトバト山の間モロ(ス)の如く織るあのる
ものは極めて稀なり

パンの實などである、農學家はミンダナオは比律賓中で地味最も豊饒、麻、椰子、バナ、護謨、米等の耕作に適し其高地は牧畜に適する、海は又魚族に富み眞珠貝其他の産物の、未だ

探究せられざる富源も尠らずして大なる將來を有すると説くのである、サンボアングの町は人口凡そ三萬清潔なる一小市街である、全體ミンダオ島は氣候周歲極めて溫和、四五の二ヶ月と雖も北方の如く暑からず、乾季雨季は呂宋と反對であるが其差別は北方の如く甚しくは無い、此市も涼しくて住好い處である、數年前火災の有つた爲め汚い舊市街が焼拂はれ、コンクリート造の新家屋が續々と建築せられつゝある、余が昨年此港に上陸した時と今年とを較べても著しい相違がある、殊に長官カーベントナー氏が努めて市街の裝飾に意を用ひ、樹木を植ゑ花壇を作り、棧橋に至るまでも美しき熱帯の草木を植ゑ並べる如き方針であるから、小さい氣の利いた町になつて居る、當國人はマニラ市を稱して東洋の眞珠町と言ふけれども、其稱は却て此サンボアングに適當すべきものである、市街は西班牙の古城に接し、其城は兵營に用ひられ城の近傍には將校の邸宅がある、而して中央の郵便局と税關の間から海面に突出する大棧橋があつて、大船の繫留も自由である、唯此海峡の潮流が極めて急速なる上海底が珊瑚礁であつて錨を保持するの力が少いから、郵船會社の濠洲航路の如き船舶は棧橋を放れて沖に碇泊し流れぬやう常に警戒して居る、然し此處は颱風の區域外であるから海峡は天然の港灣と言つて差支無い。



長官カーベントナー氏の食堂
 (向つて左より)キヤムロン氏、監坂氏、カーベントナー氏
 本村氏、リース氏(著者)



街市ガソアボンサ

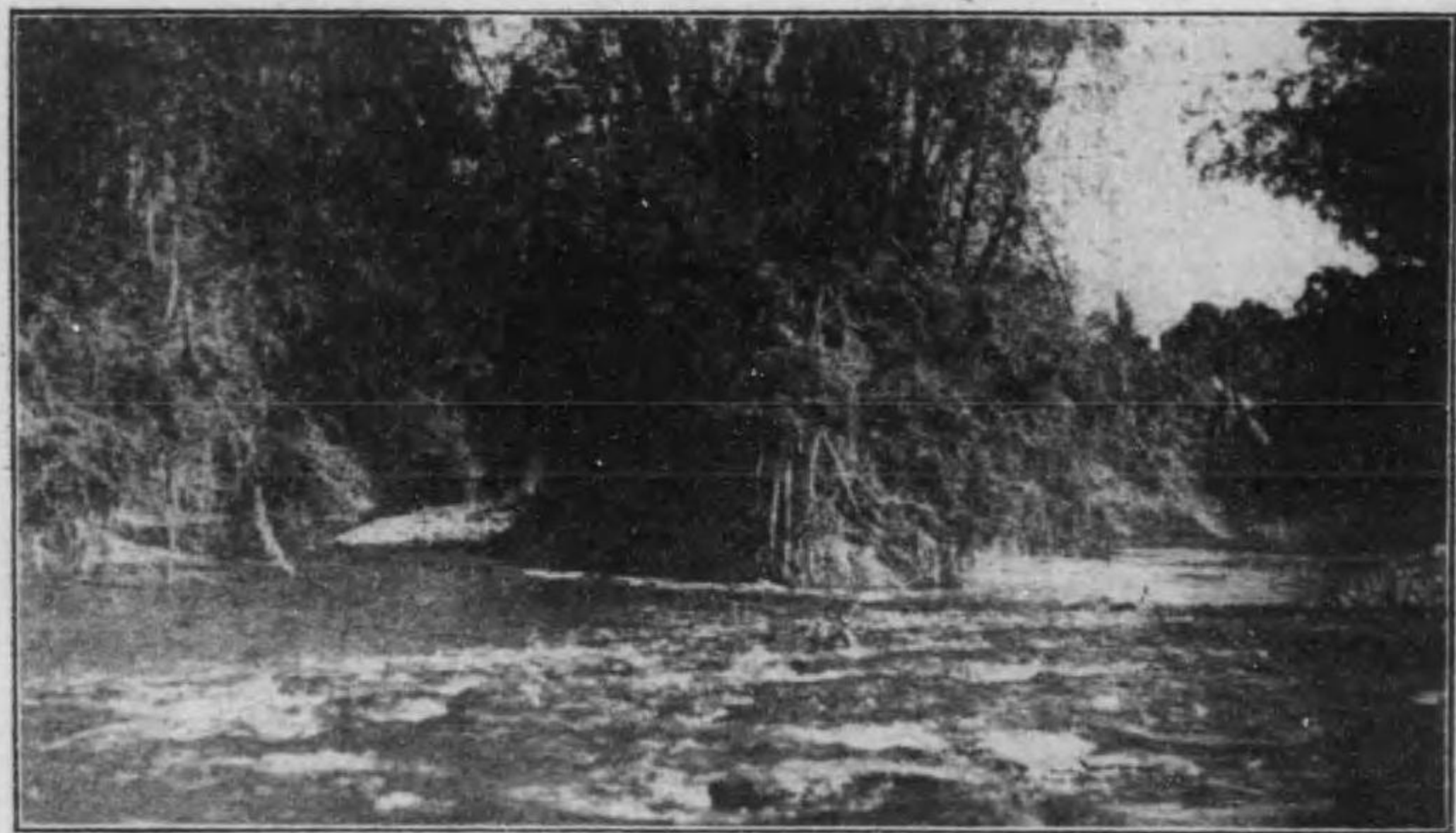
長官カーベントー氏

余の初めて此地に來たのは大正四年の一月郵船會社の日光丸の第一回寄港の時で、其時初めて長官カーベントー氏に面會した、温良圓熟の好紳士で、心を傾けて省民の安寧と富源の開發とを謀りつゝあるものと鑑定した、氏は余に向つて島内の遊覽を勧め滯留を希望された、余は此の島の美なるを愛し、日本人の若干がダツアオ邊に行つて農業に従事し居ることを聞き、歸途巡遊を約した、濠洲よりの歸途再び此地に寄港したが不幸にして要事が出來て急ぎ日本に歸つた、今度此比律賓に來たのは一つには此前約を果す爲である、カーベントー氏は余の嘘つきならざるを知り今後何時で

も、ミンダナオに來れば十分便宜を與へるとの挨拶であつた、其所でサンボアンガに來て先づ長官を訪問する、省廳は郵便局と同一の建物中に在る、後面は小庭を以て棧橋に接し其庭の中には種々雑多な熱帯植物を植ゑ、中央の小池中には紅紫色の熱帯蓮が美麗なる花を水中から擡て居る、長官は先日マニラでも會ふたが何時も同じ態度の優しい人で有る、モロの如き慄悍なる人民を治するには是で無くては行かぬ、偕此訪問で大體見物の方針が定まつた。

パサナンカの水源地

サンボアンガの見物は先づ水道から初める、總じて比律賓は珊瑚礁であるから水に乏しい此邊は二百五十呎位掘下けても良水を得ることが出來ない、都府の繁榮は何處でも水が元であるから、長官は其來任後直に上水道の計畫を立て、二十五萬圓ばかり掛けて市外三里半の山中から河水を引き來ることにした、水源地はパサナンカと云ふところで川の名をツガマと云ふ、水道工事は略落成し本年七月より給水する筈であつたが、少しく遅れて本年一ぱい位掛るであらうと云ふことである、七月二十七日即ち到着の午後昨年知面となつた蘇洛眞珠會社の中村清次君に案内を請ひ脇阪君や當地滞在中の小川多門君と共にパサナンカに出掛けた、



ツガマ川の竹林

途中に一つの坂があるだけで路は極めて良い、坂の彼方は道路狹隘椰子、バンの木、ナンカ其他の樹木が密生して居つて車行甚だ困難、林中を無理に押し通つて河岸に達すると、清冷なるツガマ川の水が滌涼として流れて居る、バンの木は呂宋では見無かつた、ナンカと云ふは冬瓜程もある大なる實が樹の幹より垂下る植物であつて、其中は矢張バンの木の如く白い肉漿を以て満されて居る、川の前面にブラングバツと云ふ石灰石山があつて、モンタルバンに一寸似て居る、此邊の風景は幽邃にして愛すべき所がある、歸途貯水池を見た。

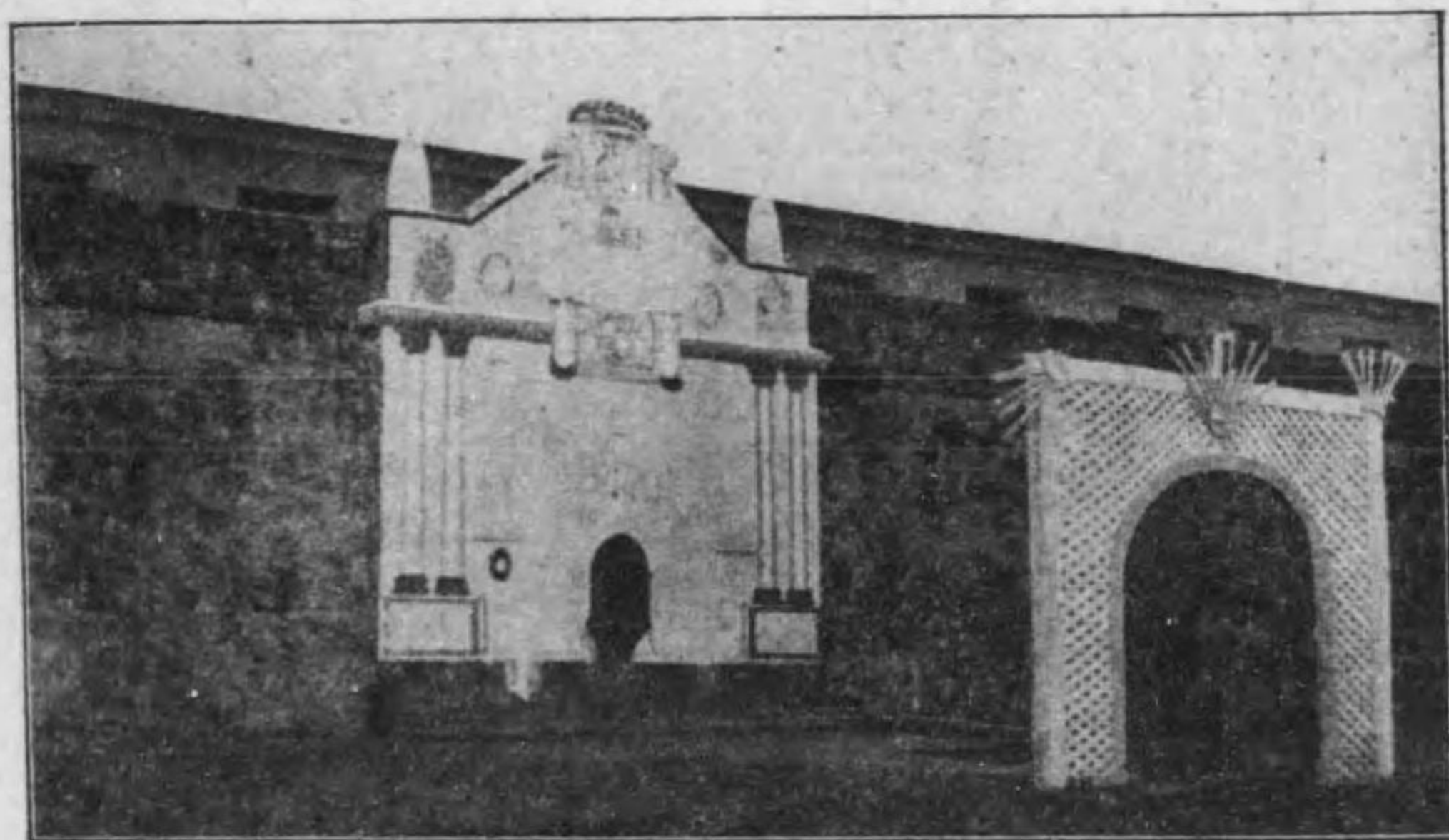
税關長の送別會

四時サンボアンガに歸れば税關長の送別會が有

る、支那商人團の催してロムルス船を借切りにレセプションを催すのである、此税關長はマニラの税關長に榮轉したのだ、此日當市の紳士紳商皆悉く集るので其數二百餘名と注せらる、太田會社の木村君、中村君、と共に行つて見る、來會者中に十數人の婦人もあつて華やかな會合であつた、船は此等の客を乗せて棧橋を放れ、音楽を奏しながらバシラン島近くまで航行して、其間に酒茶菓子等の饗應がある、人々愉快に打語らうて税關長の送別であるのを忘れやうとした、若き男女は甲板で舞踏する、其中にはモロ君も交つて居つた、此船上でカーベントー氏は余をホロのソルタンの元の御家老ハチブト殿の令息ハチグラン君に紹介した、ハチグラン君はシリマン學校の卒業生で今はカーベントー氏の副官を勤めて居る、本日ホロへ歸り數日滞在すること、余の爲に豫めソルタンに面會の事を謀らせやうと云ふ長官の好意である、又同時に此船上で長官の代理官エツチ・エフ・キヤメロン君に紹介せられた、キヤメロンは覺え好いが、ハチグランはグラついて覺え悪い、其所で余は記憶法により八五郎君と覺えて置いた。

學校參觀

第二は學校である二十八日朝キヤメロン氏が自動車を以て迎ひに來られ、本省視學官コルキン氏と共に學校を廻つた、先づ最初にサンボアンガ高等小學校を觀た、此學校は新式コンクリートの建造であつて、生徒の爲に冷水浴の浴場までも備つて居る、生徒の數三百二十人日々登校する者三百人である、四個年の科程中第一、第三、第四、三學級の授業を一見した、生徒はモロが多い、五年生の所では昔話の精誦を英語でやらして居る中々上手、七年では算術の試験中、其算術は利息算であつた、八年では文法の教授中であつた、次に女子職業學校を視た、生徒の人種は前者と同じであるが、其課目の中レース及刺繡の二課は成績頗る佳良、日本の女子にも劣らざる技倆を有して居る、校長ミサ夫人丁寧の説明をして呉れて大に益を得た、餘り見事だから其製作品數種を乞ひ受けて來た、次にテツアン小學校を視た、是は粗末な萱葺の田舎家を其儘に使用したものである、其真向ひにヘスイット寺院の小學校が田舎に珍しき大なる建造物を有して居るのは氣の毒である、生徒は年齢に大なる高下があつて、中には十五六の少年も居つた、人數は凡二百人ばかりで其中百五十人位毎日登校する、吾々の行つた時は恰も休息時間で生徒は悉く外面に出て居つたが、一人を除くの外皆跣足であつた、教室は唯一室で、各級の間には申譯ばかりの仕切が有る。



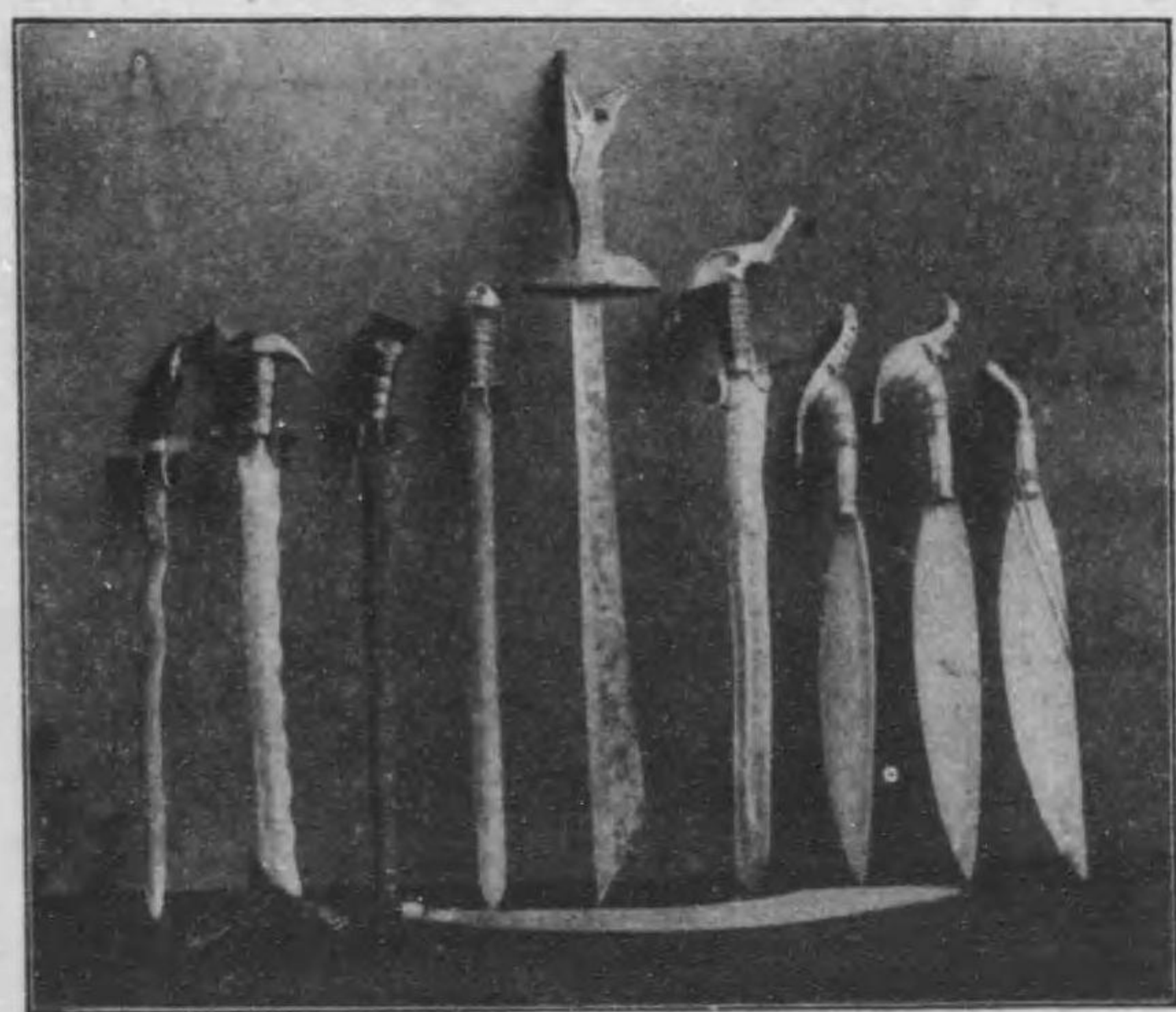
ピラールの古城

母 聖 の ル ー ラ ビ
 歸途にはタロンタロン街道からピラール城に廻つて内部を一見した、此城は海城で有つて一面にツマガ川を控える、其石垣は珊瑚石灰石である、城壁に登つて瞰望すれば我國の小藩の城内に似て居る、城の南側に一の舊城門がある、今は壁になつて居る、舊城門の扉の上に當る所に聖母の像が浮彫に現してある、其彫刻には青と黄の彩色があつて、何となく支那の陶器を見るが如き趣きである、聖母は希臘式の柱の上に立つて左右に天使を従へて居るところである、柱のことを西班牙語でピラールと云ふ、故に此城のことをピラール城と稱し此彫刻をピラールの聖母と稱す、此神像は彼

のアンチポロの聖母と同じく、靈驗赫灼なりとの迷信がある、或時敵兵が此城に攻寄せた時に城兵は皆眠つて居たのを、此神像が拔出で、呼醒したと云ふことである、神像の下には常に低い祭壇が置かれて其上には絶えず蠟燭線香等が供へられ、城壁の下部は其煙の爲に薄黒くなつて居る。

モロの兵器

古城を見終つた後市内の憲兵屯所に行つて押收せられたるモロ族の武器を見た、其武器は鎗、刀、弓矢等である、刀には出刃庖丁のやうなボロン、刃の形の波状をなしたクリス等がある、其外に楯、傘、蓆等があつて、其蓆を壁に張付け其上に此等の武器を體裁善く飾り付け、押收したる地方に



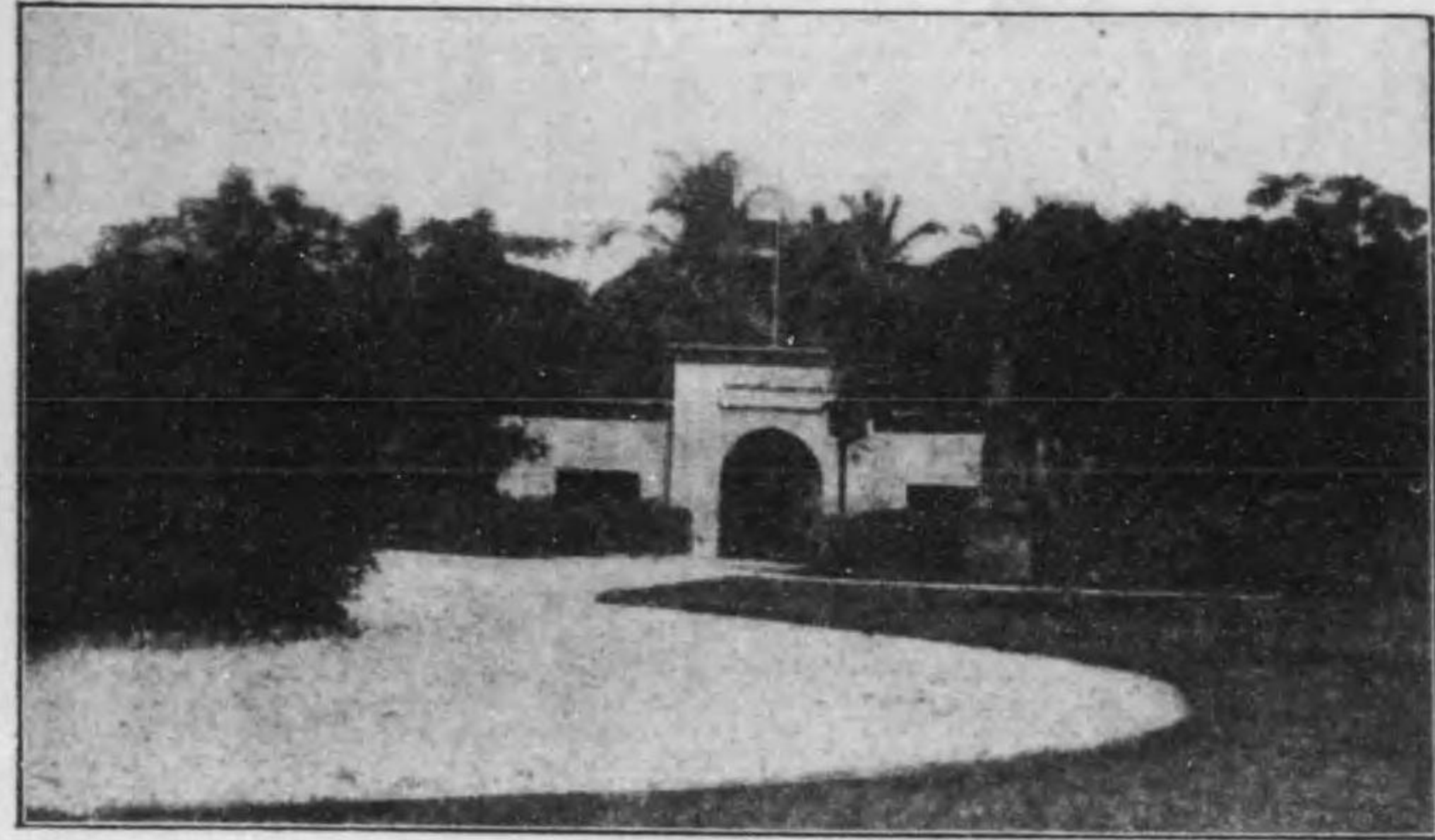
(スリク形波。ンロボ形葉の木。ンラビンカ中央) 劍刀のロモ

依つて區別してある、憲兵隊長ワロウ少佐の説明を煩して此珍しき恐るべき武器の概略を了解した。

サンラモンの監獄

本日午後三時サンボアンの東北海岸に沿うて十二哩、サンラモンの監獄を訪問した、キヤメロン氏脇坂氏と自働車に同乗して行くに天曇り風冷かで恰も我十月の如き氣候である、道路は坦々たる一等道路で一方は椰子檳榔樹の林で有る、其間にはタビオカの木が諸所に植ゑられて居る、タビオカは八ツ手のやうな葉が層々相重つて居る優しい木で、其根から葛が取れる、洋食のタビオカブデングは即ち此である、又アバカ麻も諸所に植ゑられてある、キヤメロン氏は一寸車を駐め其麻の皮を切取り、吾々の爲に内部の構造を示されたが、其繊維の重つて居る有様は恰度上等のレースを見るやうな心地で、天工の妙に一驚を喫せざるを得ない、四時半サンラモンに着した、サンラモンは西班牙時代にラモンと云ふ軍人が初めて建設した監獄じやさうで、元は不潔な場所であつたに相違ないが、米領以來マニラのピリビッドと同様コンクリート造り鐵窓の清潔なるものに改められ、囚人の作業としては椰子其他

の農業をやらせる、監獄に接近して支那人の稍大なる椰子園があるが、其椰子の生育を見れば不成績である、兎てもサンラモンの整然たるものに及ばない、監獄の前にはラモン將軍の記念碑、少し離れて海濱に典獄、副典獄の官舎が相對して建てられて、其間に奇麗な芝草の庭園が設けられてある、監獄内には獄舎四棟の外に病舎一棟、倉庫一棟炊事場兼食堂一棟、其間には廣潤なる空地が有り、恰も學校のやうな體裁である、獄舎は一棟各二百五十人入りで、其寢臺は鐵製キャンバス張りで三段になつて居る、四方は恰も鳥籠の如き構造で、清潔の點に於ては恐らく世界之に優る監獄はなからう、余等は副典獄チエンバース氏の案内で囚人の作業を見た、此監獄に附屬する土地の廣さは二千五百英加、其耕作物は椰子、王蜀黍、米、煙草、バナ、で、乳牛、馬、鶏、豚なども澤山に飼つてある、椰子の作付は既に四萬本に及んで居ると云ふことである、余は昨年も見したのであるが、脇坂氏は最初の見物であるから此處で椰子の皮を剥く作業や、之を乾燥する乾燥室其他を視、山の如く椰子の實の積まれたる所に於て寫眞を撮り、自働車に乗つて廣き耕地の内を一巡した、獄舎に近い所に木造の小學校があつて、兒童が二三十人學校から歸りつゝあつた、此兒童は看守、在監人等の子供と普通の村童とである、ピリビッドの所で一言した通り、比律賓の監獄は感化院である

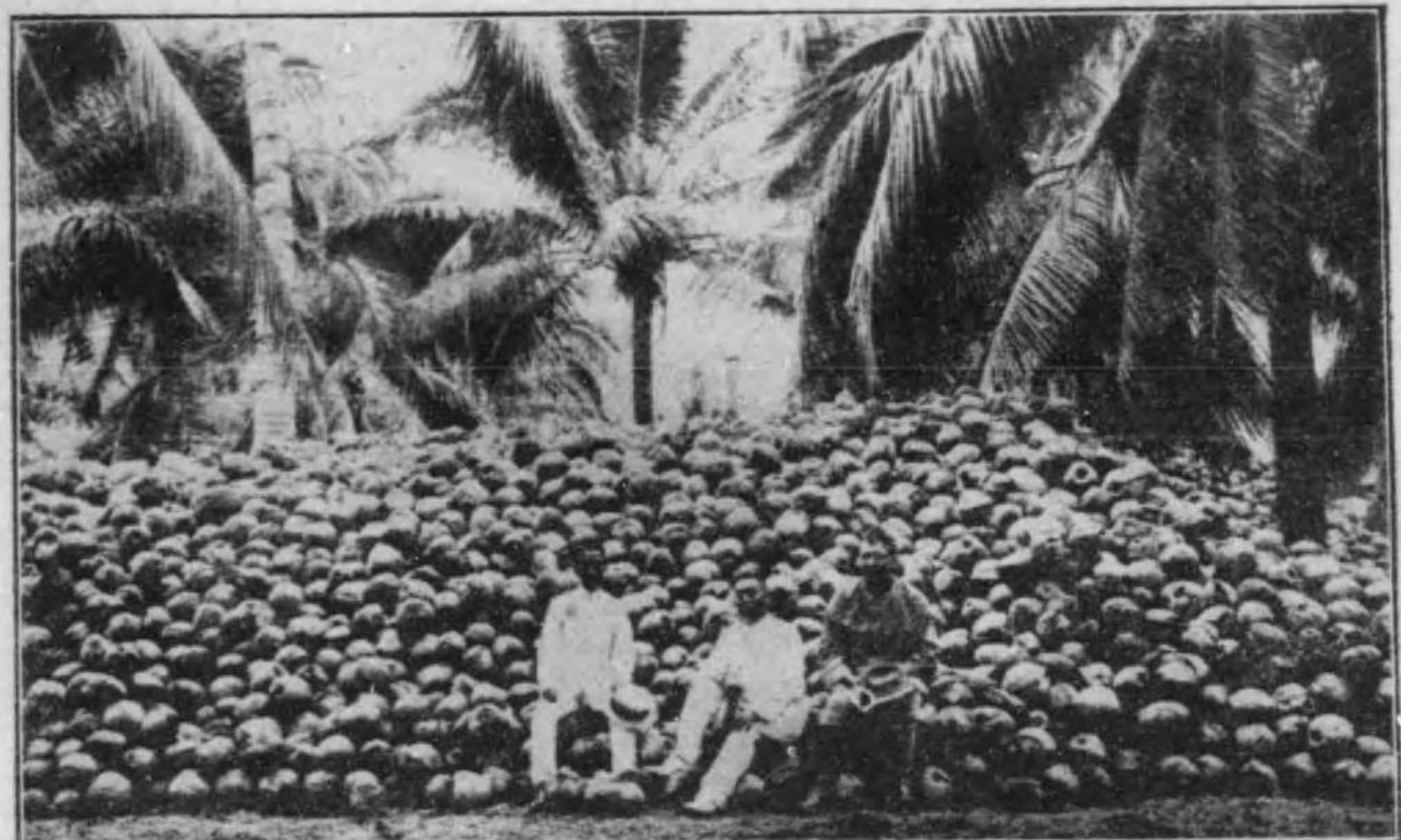


サランモン監獄正門

から一等の囚人は假に出獄することを許されて家族を喚んで外住し、毎日一定の時間監獄に出勤する、而して其妻子の費用までも政府から給與せらるゝ、斯く特別の取扱を受ける囚人を名けてトラスチーと云ふ、學校の教員は典獄の細君及び囚徒中の學者である、誠に奇妙なる仕組みで一寸驚く、耕地を視終つて典獄の官舎に行つてお茶を飲んだ、其處に居合せたチファニー夫人と云ふ人は近頃我國を通過して當地に來られたもので藤の花、躑躅の花などの話が出て茶に日本の色が浮かんだ。

五時囚人一同に晩食を給するのを視やうと、キャメロン氏、副典獄、典獄夫人、チファニー夫人と連れ立って監獄に行つた、此日の晩飯は、米に玉蜀黍を交ぜたものは肉汁とババリアであつた、囚人既に

食事を終り或は將に食卓に就き或は列をなして食物を貰ひ受けつゝあつた、此外に白色褐色兩種の麵麩を給するが、其褐色のものは玉蜀黍に砂糖を交へたるものでコーン・ブレッドに似て居る、余等は此等の食物を少しづつ味うて見た、其味ひ決して悪からず囚人としては結構であると思はれた、猶食堂から炊事場、炊事場から洗濯所、洗濯所から倉庫まで巡見した、此處の洗濯所はサンボアガ其他の町から注文を受けて仕事をする、サンボアガの註文品は毎日馬車で配達をすると云ふことである、洗濯所の隣なる物置に數名の囚人があつたが、副典獄は其一人を指して彼れは日本人だ何か話して見給へと云ふ、其男に近づいて尋ねて見たら、本業は理髪業で阿片密輸入の爲に二年半の懲役五百圓の罰金を課せられたものであるとのことであつた、斯かる所で日本人に出會ふとは意外でもあり亦慨嘆の至りでもあつたから、能く本人を戒めて別れた、囚徒の數は現在六百人で其多數はモロである、再犯の者三人、三犯の者一人あると云ふことである、支那人も數人居り、白人も亦數人居つた、此囚人中に異彩を放つ者は元某縣の知事であつたモンドックと云へる比律賓人で政治犯の爲に此獄に投ぜられて倉庫の帳面方をして居る、此倉庫でババリアと茄子の非常に大なるものを見た、茄子の大きさは椰子の實程あつた、玉蜀黍も亦此地に産するものは極めて粒が大きく、中には馬の



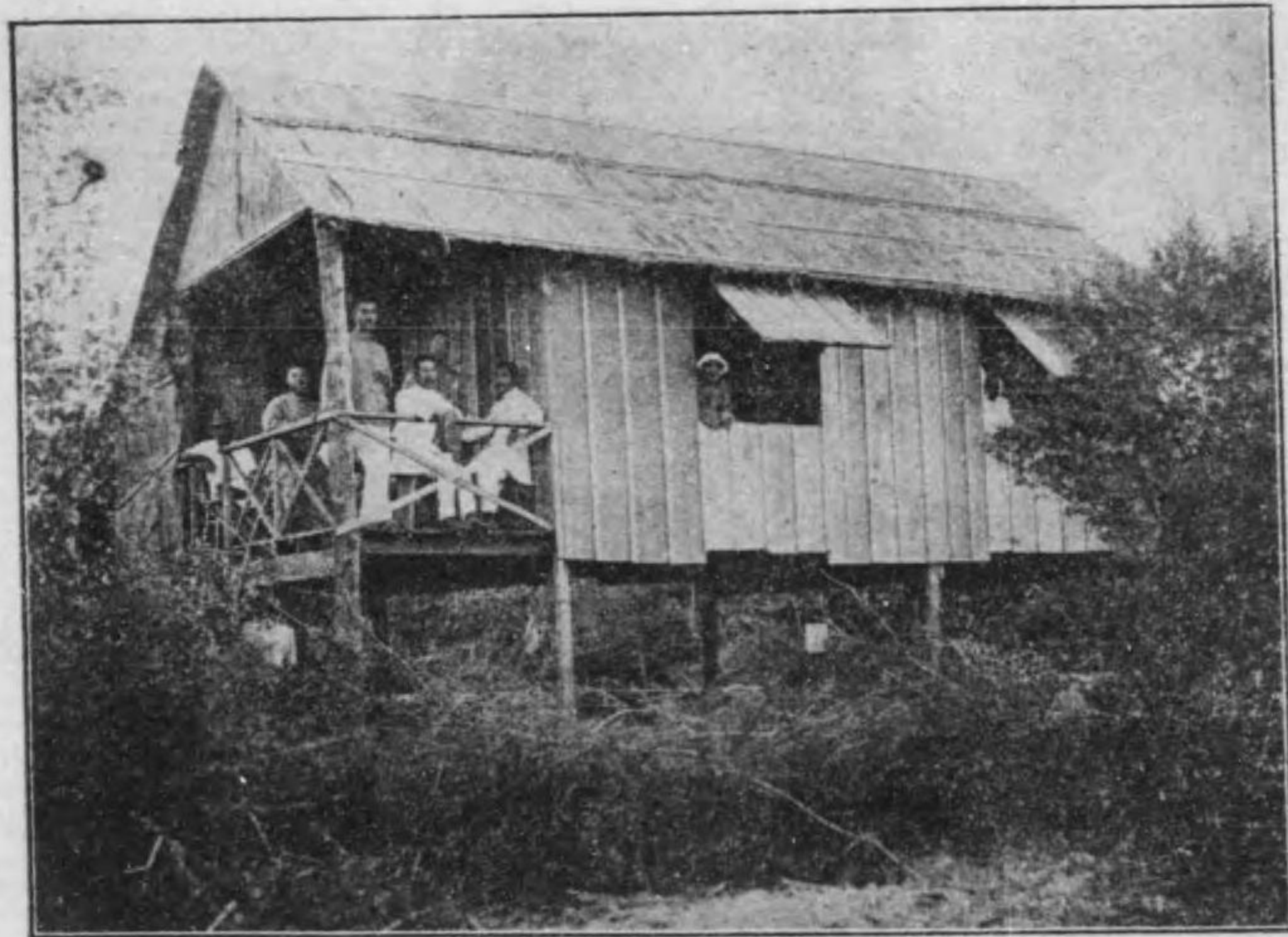
子 椰 の ソ モ ラ ソ サ

齒のやうな位なものもある、此監獄の構内で一同又寫眞を撮つた、門外に出る時副典獄が毎日囚人を十六人づゝ椰子園中に放つて害虫を採集せしめると語り、其害虫のアルコール漬をも見せたから、岐阜の昆蟲先生に贈らうと思ふて其中の三個を貰ひ受けた、門の邊より振り返つて獄舎を見れば、囚人は或は行列をなして點呼を受け、或は點呼既に終つてシボを蹴つて遊ぶ者もある、獄舎内に飼はれたる鹿は犬と共に馳廻つて戯れて居る、氣象色々如何にしても是が監獄だとは思へない、唯四方の壁の上に銃を肩にした看守が絶えず往來して居るのみが稍監獄らしき觀を呈して居つた、此監獄ではピリピッドの如く體操又は訓練を課せずして、運動は囚人の隨意に取らしめる、是より副典

獄及兩夫人に別れて歸途に向ふたが、日暮に近くして椰子林中は稍薄暗くなつた、其薄暗い中に一種の香氣の漾ふのはイランイランの花である、自動車が海岸を駛走してカルデロ灣の所まで來ると日は彌々暮れ掛つて、椰子林中のモロ村の炊煙が朦々と立昇る。

藤田理學士の島住居

七月二十九日朝八時の温度は華氏七十八度、昨日山中に降雨ありし爲め今朝は非常に涼しく、浴衣の下に襯衣を着せざれば過冷を感じる位である、本日の日程はサンボアングの前面に横はるサンタクルース島に養殖眞珠事業を試験中の藤田理學士を訪問することである、蘇洛眞珠採收會社の眞珠船シッスルに乗つて午前十時サンボアングを出た、サンタクルース島は大小二個孰れも純然たる珊瑚質の環礁で中に潮水を湛へて居る、藤田氏は西川氏の研究を繼いで圓形の眞珠を養殖する方法を發見し、南洋を巡見の後此地を以て最も適當なる養殖場とし、本年六月の初めより其事業を開始した、サンタクルース島は珊瑚礁だから飲料水もない無人島である、前ダヴァオ縣知事米人マクファイ氏之を所有し、モロ人其一部を借りて魚梯漁業を營んで居る、藤田氏は其サンボアングに面する所の海面若干を借受けて、島上に



(氏次清村中後其士學理田藤はるて立てひ側に柱)居住島の氏田藤

假小屋を建築し、二隻の帆前船を購入し、一隻を交通運搬の機關一個を養殖試験船に充て、日本人小川平三外三人モロの少年一人を使用し心強くも此處に立籠つて居る、然るに昨夜モロの海賊が其船に忍び寄つて施術の終つた真珠百數十個を入物の籠共盗んで逃亡したと云ふ事であつて、小川氏は今朝サンボアンガに来て其捜査方を官廳に申出でた、此邊は小盗人が有るから藤田氏の所にも用心の銃器があつて、一昨夜は怪しき人影に向つて發砲した程であるに、昨夜甘々と仕てやられたのは遺憾察すべしである、余の乗つた真珠船シッスルは長さ五十一尺幅十三尺吃水八尺、英國專賣の空氣

壓搾器を据付けたる二本檣の風帆船であつて、乗組員は潜水夫三人機械師一人水夫五人網持一人である、真珠船の經濟を大擧げに言へば、真珠を産する蝶貝で收支を適合させ、其蝶貝より時々現れ出づる大小の真珠を船持の利益とするものださうで、此船の費用は一ヶ月凡そ六百三十八圓で真珠の収入が月に凡そ二三百圓位の平均であると云ふことである、船はサンボアンガで建造し頗る堅牢且清潔である、此船の近傍に尙五六艘の真珠船が碇泊して居つた、其中でセイリキと云ふのが最大で長さ四十二尺幅十二尺吃水十七尺乗組員シッスルに比して二人少いと云ふことである、此の海峡は潮流が非常に速くて一時間五哩乃至七哩に及ぶ、今朝は風が悪いので如何に努めても船は唯一つ所に止まつて居る、十二時猶サンタクルース、サンボアンガの中頃に居る、已むを得ず錨を卸して用意の辨當を食しながら、試みに錘を入れて海底を試みた所が、豈圖らんや適當の真珠漁場たるを發見した、そこでダイバーは海坊主の姿となつて海中に飛込んだが、其兩足に穿つ所の靴は大佛の靴かと思はれるやうな大きさに底に鉛の板を附着してある、重さ各十五斤、其上に胸と背中に各四貫五百目の重りを背負ふて海中に行く海水の壓力は是だけの重量を付けても動もすれば人間を押上げる位で、一度海底に到達すれば此服裝で陸上を歩むと少しも異ならず歩けるとは驚くべきである、成

程知盛が境の浦で錨を擔いだわけだ、扱此ダイバー海中に入つてより上る時迄凡十五分間、激潮に流さるゝこと二百四十尋、其到達したる最深處は十七呎半であつた、上る時眞珠貝二個海松一本を切つて來た、暫くして又他の潜水夫が、俺も海松を切つて來やうと言ひつゝ、潜水服を付けて潜り込んだ、此度も前と同じく二百餘尋流されたが潮流が緩やかになつた爲に水底に在ること四十分に近く、眞珠貝四個海松一本を取つて上つて來た、此六個の眞珠貝は非常に大なるものでどうも眞珠が有さうだ、一萬圓の玉が有つたら何ぼ貰へるかなど念を推して開けて見たら、中には蝶貝の身ばかりであつた、三時に至つて潮流が稍順になつたから直に帆を上げて進行して一時間にしてやつとサンタクルース島に到着した、此磯は白珊瑚と赤珊瑚の碎けた美しき砂から成立つて其上に珊瑚の殻が白骨を散したやうに堆積して居る、藤田氏の小家は波打際より四五間のマングローブ樹の中にある、荒削りの板造の屋根には例のニバが葺いてある、中は二室一個が共同の寢室一個が研究室になつて居る、藤田氏は其海中で採集した種々の貝類及動物を吾々に示した、暫くして中村氏が小川氏と共にサンボアンガから到着したので、一同は打連れて暫し海岸を散歩した、中村氏は此邊に日本人を殺したモロの墓があるといつて波打際を頻りに捜す、稍暫く行くと魚梯のある少しく先きに一本の

眞珠、眞珠貝及び其採集船



大樹があつて、それに竹垣を圍らし白布が其處此處に結び付けてある此樹はバカアンと云ふて非常に堅く腐朽せざるを以て有名なる樹である、*



それより少しく先きに行くと又小屋の如きものがあつてそれにも白布を附着してある、此二つがモロの墓であるが、其何れが日本人を殺した者か一向分らぬ、海岸は何處までも美しい砂で之を日本に送り茶室の壁などに塗つたら好からうと思はれた、六時藤田君の許を辭し順風に帆を上げサンボアンガに向つたが、潮流も風も順であつたから僅雲端は落日の光を受け

て黄金色に輝いて居る、惜しい事には繪の具函と畫筆を日本に忘れて來た。

太田會社の椰子園

七月三十日はサンボアングより九哩メルセデスの山の上なる太田會社の椰子園を見物の日である、會社の木村氏に誘はれて脇坂君中村君と共に自働車に乗つて同地に向つた、此方面には既に十二三哩一等道路が開設されて車行は誠に滑かである、十一時メルセデスの村の東端なる小橋の所に來た椰子園の監督者萩原忠藏君が四頭の馬を引いて出迎へられたので自働車を捨て、馬に跨り、馬嫌ひの中村氏は徒歩で山の上に向つた、其間二十丁許り坂路で幾度か上り下りする遙かに山の上なる太田會社の社宅を望みつゝ、靜かに馬を歩ませる心地は何とも言へない、頓て山上の社宅に到着し來路を眺むれば、岡陵起伏し西南の方には海も見える山下には古い椰子林が鬱として繁茂して居る、此社宅は矢張比律賓式の平家造りで椽側を広く取つて風通し良く誠に涼しい、今朝大雨の爲め氣温が七十六度に降下して居る、欄に倚つて庭前を眺むればカンナの一種で花の黄いバラデラエスビニオラ(西班牙の旗)、白い花の簇つて咲いて居る梅檀の樹、瓜の如きものが無數に幹から垂下つて居るババイヤの樹、香の良さ

白い花を付けるサンバギタ、其他美しき斑紋のある灌木などが花壇の如く植ゑられ、其間に薄紅の細花を澤山着けたカデマ・デ・アモールと云ふ蔓草が這懸つて居る、カデマ花は紫の小花を付けるカムバネラ(小鐘)と共に家屋や庭垣の裝飾に用ひらるるもので、其細い枝から



太田會社椰子園の監督者萩原忠藏氏

鬚のやうな條枝が横さまに出てそれが互ひに尖端をからんで居る、カデマ・デ・アモールは「戀の鎖」と云ふことである、新渡戸稻造君が此花を臺灣に移植しと云ふので臺灣では新渡戸蔓と云ふさうだ、謠曲に作ればハイカラの定家が出來さうだ、此花壇の外は次第に下りの坂をなして一面に椰子が植ゑ

てある、此邊の椰子は三年ばかりを經過したもので、樹の幹は未だ地中から現れずして唯其雄大豪壯なる綠葉を天空に向けて抽出して居るばかりである、午後に再び馬に跨つて山を下り

谿川を隔て、向ひなる會社所有の椰子園を見物した、谿川を渡ればミソウで土人の家が林中に若干見える、川端に會社の賣店があつて、附近の林中には澤山の鳩が飼ふてある、賣店より椰子林を通過して山を登り谿を越え谿川を渡つて終に一小丘の上に出た、是から亦海上を見渡すことが出来る、此處も新しい椰子園で、樹間にはバターニと云ふ隠元のやうな豆が一面に繁つて居る、これは椰子の間に雑草の生えるのを防ぐが爲に植えるもので、其實は苦いけれども食へる、價は小豆よりも少し高い一舉兩得の品物である、他の植物は椰子の根から肥料を奪ひ其成長を害するが普通だが、バターニばかりは却て土地を肥して椰子の助けになると云ふことだ、それから又山道を巡つて元の所に戻り待合せ居た中村君を伴うて橋のところまで戻つて馬を還した、然るに迎ひに来べき自働車が來ぬ、雨が降つたから多分メルセデスの川で喰止められて居るものであらうと思つて凡そ三十町ばかりの距離を川端まで歩く、此道路の兩側には悉く椰子が植えてあるから行く／＼其模様を一見するに、驚くべし大部分の樹は其葉を悉く蟲に喰はれ或は又其葉の尖端が刃物を以て切斷したやうになつて居る、是ぞ即ち椰子の害蟲の仕業であつて、葉の悉く喰はれたるはバギバギと云ふ蟲、葉の尖の切られたるはゾウ蟲と云ふ甲蟲で椰子の幹に喰込むものである、法律では此等の害蟲に襲はれる時は持



ナ　　カ　　果

主は速かに其樹を切らねばならぬものであるが、兎角之を怠るので其害蟲が近傍に傳染して多大なる損害を他人に及ぼす恐るべき事である、纏てメルセデスの小川に到着して見れば果して自働車は對岸に待つて居る、此道を往來する乗合自働車も此川を越し兼ねて對岸に停止して居る、水の深さは僅に膝を没するばかりであるが、流れは可なり急である、幸ひに馬と水牛とを引いて此川を過ぎる者があつたので、木村小川兩君は馬に跨り、中村氏は水中を徒歩し、余は人夫の肩に擔がれて對岸に渡つた、比律賓で人を擔ぐ法は横様に肩に跨らせるので甚だ危険い、日暮るゝ頃サンボアングに到督した、この日見物した椰子園は凡そ七百町歩で、椰子の數が二萬五千本外に牧牛が凡そ百五

十頭あると云ふことである。

バシランの半日

七月三十一日はキヤメロン氏に伴はれバシラン島の護謨園を視る、午前五時半に出懸る、棧橋に行けばキヤメロン外一人の紳士が早や其處に待つて居る、バシラン木材會社株主バス
トル君である、脇坂小川木村三氏と併て六人山林局のモートル船モンテロに乗つて出發す
る、熱帯で涼しい朝海風を浴びつゝ、穩かなる水上を滑かに航行する心地は爽快無比である、
二時間にしてバシラン島に着く、バシラン島は前に一小島があつて其間に狭い水路がある、
兩岸は美しいマングローブの密林で下の磯は珊瑚礁である、海峡を少し上ると港があつて之
をイサベラと云ふ、此處は元西班牙の軍港で、其時建てられた海軍病院の建物が今尙存在し
て居る、木材會社の棧橋から上陸して直に護謨園に向ふた、護謨園はイサベラから二十町ば
かりの處にある、其間は山道で纔に荷車を通ずるばかり、路の兩側は矢張椰子林であつて、
其間にワラン、ナンカ、ガヤバナ、グワバナなど稱する樹木が繁つて居る、此等は何れも類似し
た樹であるがナンカの實は中々大なるものがぶら下つて居る、ナンカは實を生で食うて其核

を焼いて食ふ核の味は栗のやうである、更に進めば兩側はタビオカの林で周圍にミント(薄荷)が繁つて居る、ミントの香氣が盛んに鼻を衝いて來る、又樹の枝から妙な蔓が下つて居る、
ニタと云ふて其心が頗る強い、之を取つて籠を編み、又編物の飾りに用ふる、ニタの葉は恰
も竹の葉の如く又手の指を開

いたる如く展開して生ずる、
頓て護謨園に達した、會社は
三十萬圓ばかりの資本、齒科
醫師ストロング氏が創立した
もので今は其資本主が獨逸人
に變つて居る、ストロング氏
は活潑なる米人で能く語り能
く笑ふ、此日は足を痛めたと
云つて馬上で余輩を案内し護



バシランのラバ護謨(六年生)

謨林椰子林を一巡した、珈琲、カカオなども澤山に植てある、會社の所有地は總計凡二千五

百エーカー、中一千百エーカーが開墾済である、椰子は二十七呎と三十呎と二通りの間隔を
取り其間にはバナナが植えてある、護謨林は初めバナナを植えて其バナナの間には護謨を植え、
後にバナナを切取つて護謨ばかりを残してある、護謨は各十八尺の間隔で面積は百三十四エ
ーカー、其一番古いものは千九〇七年に植えたものである、此島は一年六七十吋より百六十
吋位の降雨があつて、而もそれが一年に程好く分配されて居る、而して土地には肥料が多く護
謨の成長は頗る速かで、新嘉坡地方に比して凡そ一ヶ年早く收穫することが出来る、護謨は
凡そ地上三呎のところ樹の周囲十八吋に達したるを以て採取の適度とするのであるが、是
は學理上のもので、實際に於ては必しも十八吋に達しなくても液汁は多量に出る、現在此護謨
園の護謨は一本一年の平均二封度最も多く液汁を産する木は一年に十八封度の護謨を出す、
一封度は凡そ二志であつて、其採取費は一志半以下であるから其利益は頗る多い、護謨の數
は七萬六千本あるとのことである、護謨を採取するは毎朝一定の時間に小刀を以て護謨園を
巡り其外皮に薄い切目を入れる、護謨液は其切目から人間の乳の如く泌み出るものである、
之を硝子の器に受けて其浸出の止むのを待つ、液汁の流れ出づる間は凡そ十五分間ばかりで
ある、斯くして取つた護謨は乾燥した後三等に分たれる、一等は硝子の器に滴つたる液汁、

二等は其硝子の容器を水で洗ふて採取したる液汁、三等は其薄く切取つた樹の皮に附着して
居る液汁であつて、其等級は雜物の混入如何によつて分れる、此處に植えてあるものは何れ
もバラ護謨であるが、尙其外にカストロアと云ふ樹からも護謨が取れる、是は黒色を呈して
居る、此園のカストロア護謨は性質不良にして利益がないと云ふことである、椰子の植付數
は三萬一千、まだ採實期には入らぬと云ふ事である。

比島の珍果

護謨園からイサベラへ戻る途中、一軒の茶店があつて果物を並べて居る、青蜜柑、バナナ、
アチス、サントールなど並んで居る、サントールは此島で初めて味つた、形日本の蜜柑に色も
黄色いが皮は平滑で堅い、實は蜜柑の囊一パイに核の有るやうな者で其肉は離れが悪い、味
は少しく酸く香氣に富んで居る、アチスは一名佛頭果釋迦の頭に似て居る、是は中に柔い甘
い身が有る、比律賓に来るといろ／＼の熱帯果物が食へる、北方ではマンゴ是は時々日本にも
取寄せられる、大なる黄瓜のやうな形で、核が大きく、肉は黄色で少し松脂の臭がするが味
は甘い、これに似て非なるワニと云ふ果は、松脂の臭氣甚しく一寸食ふ氣になれぬ、マンゴは

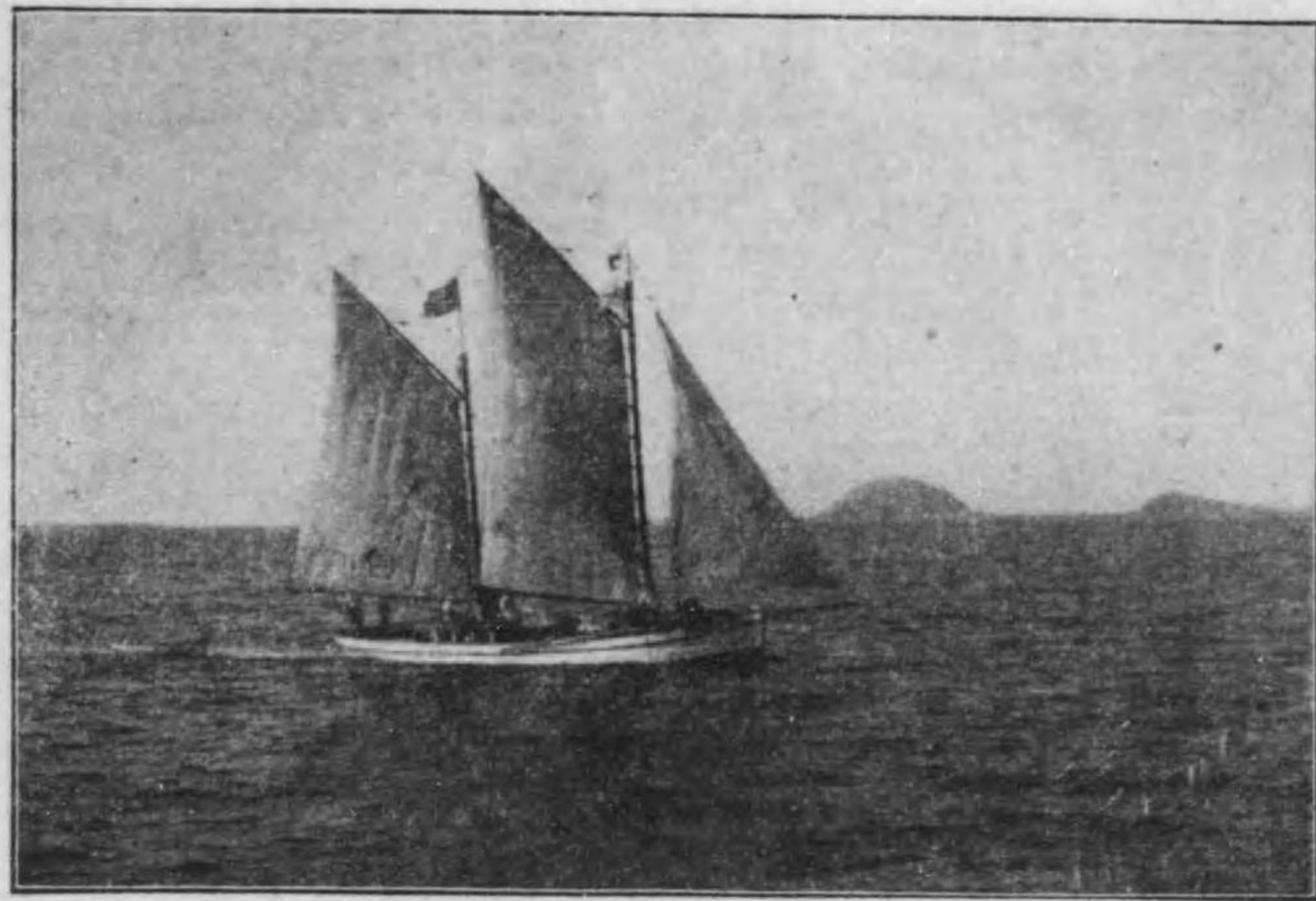


(氏ダシロトスルトクド目人ニリよ右)園子椰のシラシバ

往々大樹が有つて高さ何丈、實の生ること何千と號するものが有る、南方にも有るが北の方が好い、南方ではマンゴスチン俗に果物の王と云ふ、サンツールに似て外皮濃紫色中は雪白の肉が一つづつ、小核を裹んで居る、最も平凡なるはパイヤ、是は青桐のやうな樹で中は空洞十二三尺の幹に何十と云ふ青瓜がぶら下る、味は柔かい柿のやうである、堅い柿に似て居る味はチョコの實、是は胡桃ほどな丸い果物薄い皮をむいて食ふもの、其外普通なのは青蜜柑何時まで樹に置いても黄くならぬ、緑青のやうに青くても酸味は少ない、佛頭果の親類筋はバンの木、ナンカ、ヅリヤンだか、ヅリヤンの臭氣は聞いたばかりで胸を悪くする、是は食ひたくもないが珍果で有るには相違ない。

バシラン製材會社

珍果を食ひながら川を渡るとイサベラの町で、之を通り越すと製材會社の工場になる、直に場内に入り株主ホーランド氏の案内で作業を一見した、此工場は平常一日に凡そ一萬八千方呎を製出するのであるが、昨今機械に故障が出来て僅に七八千方呎を製出するに過ぎないと云ふことであつた、木は比律賓特有の堅木でマンガチャツピー、ギホウ、ラウワン、カラントス、アビトン、ルンバヤオなどである、此會社では此傍ら小船の建造をも請負ふのである、會社は資本二十二萬五千圓で、バシラン島の主なる森林は大抵伐木の免狀を得て居る、それからヘマタイトの小丘を登るとホーランド氏の住宅で、暫時休息し正午同所を辭して、折柄の急潮に流され大小サンタクルース島の間を通過して二時過サンボアンガに歸着した、バシラン島は地味も良く氣候も好く雨量も極めて適度であるのに、此イサベラの護謨園、木材會社の外殆ど無人の状態である、それは是までホロ近傍諸島のモロが數人若くは數十人此島に押掛けて人家を襲ひ、物品を掠奪し男女老幼を生擒して連行いた爲めである、而して島の或部分には猛惡なモロの匪徒が住居して居つたこともあるさうで、比律賓人は固より米人も亦



帆船の真珠船

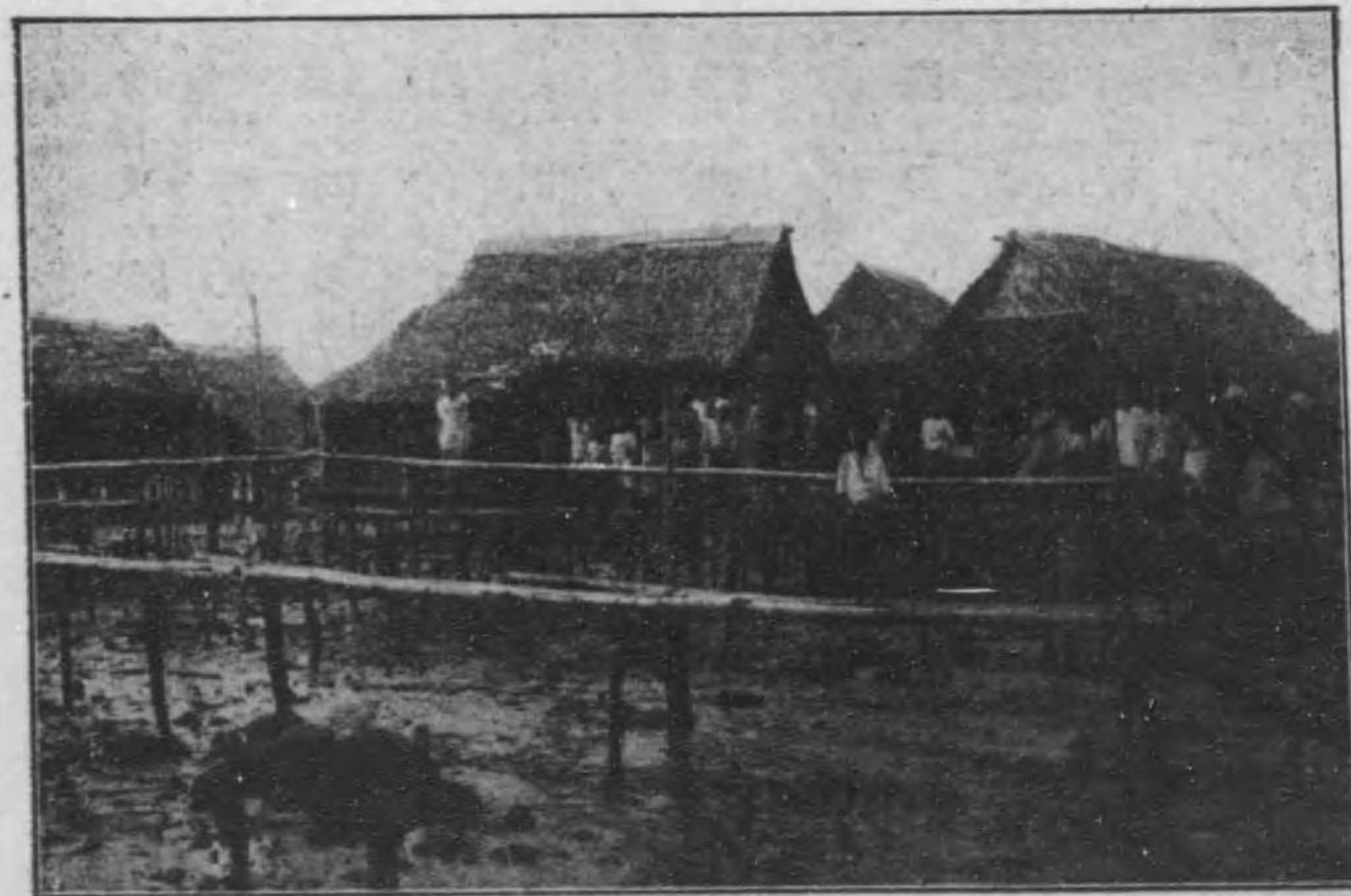
之に手を附ける事が出来なかつたのである、日本人も此處で農業を企てたことがあるが、資本の不足とモロの危険を恐るゝが爲に半途にして抛棄したやうな有様である、併し今や新式憲兵の力でモロの悪徒は大抵捕縛せられ、又は斬殺せられてホロ地方も平穩に歸したのであるから、此バシラン島も次第に開拓に就くに相違ない、斯くの如き有様であるから島内の状況も未だ調査せられざる次第である。

モロ村見物

八月一日はサンボアングの南東、海上の行程一時間程のタラクサンガイと云ふモロ村を

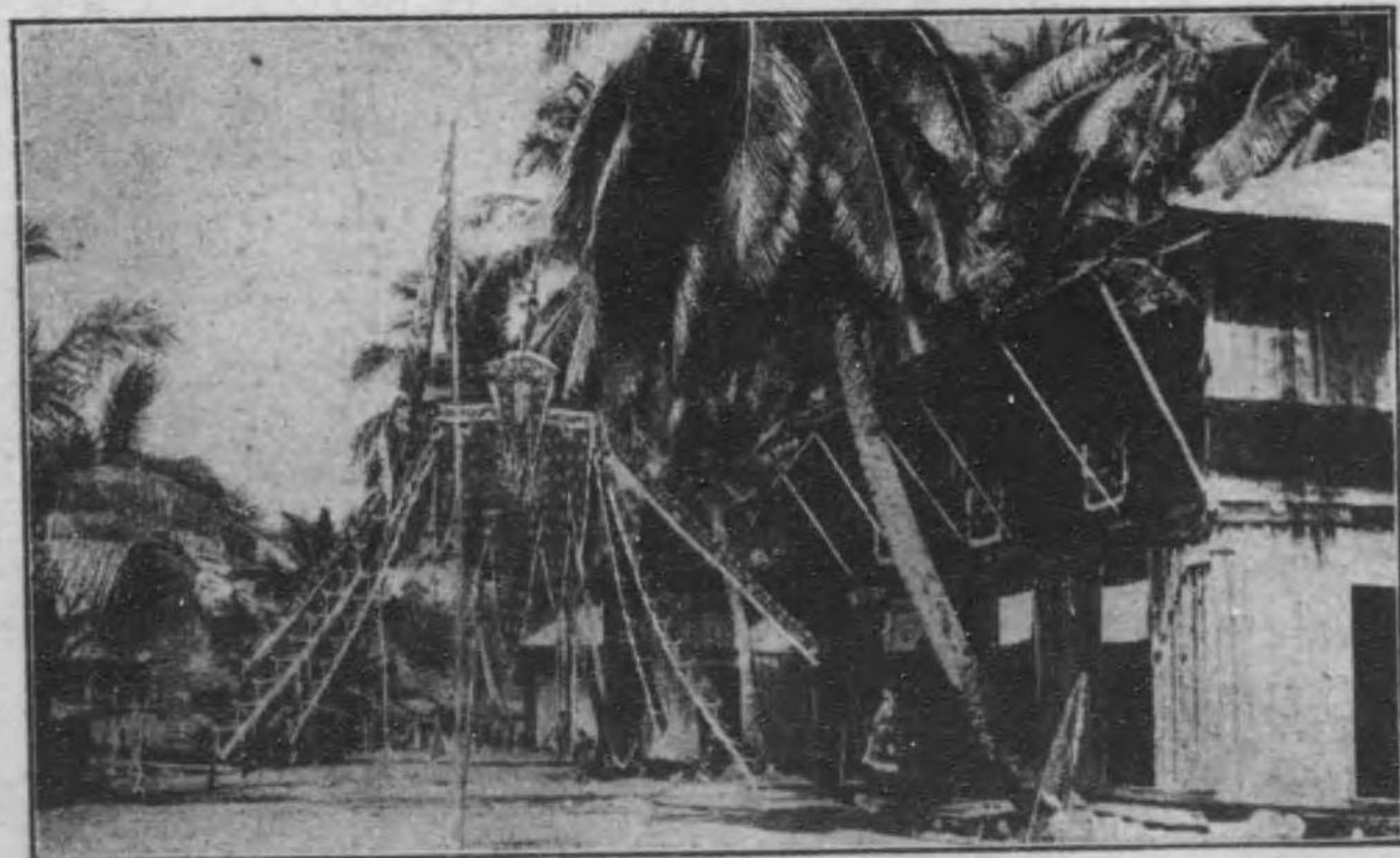
見物する豫定であつて、午前六時半再び昨日の棧橋に集つた、其人々はキャメロン君、書記官レイス氏、衛生局長ドクトル・ハルト氏、米國のデトリウ陸軍少佐、本省會計局長ヒューズ氏、通譯官フェルナンデス氏、脇坂君、小川君、木村君及余の九人である、モロの奉ずる回教にラマダンと云ふ斷食の期節があるが、今日は其斷食の明けた日であつて色々の御馳走をして祝ふのである、タラクサンガイは海中に突出た沙濱で一條の水路に隔てられ島のやうな形になつて居る、住民は主に漁業に従事し、村長は田地持ちで一ヶ月八十圓ほどの収入がある、村長をモロ語でダツウと云うて中々權力を有する、中村氏は十何年來比律賓に住居するが未だ祭日のモロ村を見無いと言つて喜んで吾一行に加つた、七時再び昨日のモンテロ號でサンボアングを出發し、海岸に沿うて東南に駛る、鳥の集るサコル島を過ぐる頃雨に逢ひ一同船内に隠れ、九時タラクサンガイに到着した、海濱のモロの村は多く其家を水上に掛け出して造るもので此村も同様である、或家の裏手に舟を着くると、ダツウ初め村中の長老多勢出迎へる、人家は總て百戸ばかり人口五六百人だから村の一端から他端まで一眼に見える、土耳其風の星月旗で村内を飾り老幼男女半ば盛装して遊んで居る、其半は平服のまゝ又は半裸體で、小供は丸裸と禮服靴穿とが連立つて歩行いて居る、村長は名をアブダルヌニオと云ふ

年齢六十餘り瘦身白髯の品好き老人で一行をまづ其モスク(會堂)に伴ふた(回教には寺も無く僧侶も無い)モスクは稍大なる平家であつて中央に高座があり、其後に土國皇帝の親翰が金縁の額にして掲げてある、此村にコンロイと云ふ奇なる米人が居る、前年兵士として此地に來り後回教に歸して村内に留り、モロの婦人と同棲して居る、別に常職は無く村長の顧問のやうなことを仕て居る、今日も出て來ていろく世話を焼く、會堂の内には凡二百人の男子が五行に列座し、高座の後の奥まりたる所に村長のハヂ(回教の尊稱)が這入つて居る、女子は男子の後に何人か居る、其間には仕切がある、男子の中に珍しい尙僕者



(つ 建を屋家に際水)村ロモ

が居る、ホロのジキジキと云ひ有名な男で本年四十二歳である、背の高さは三尺に満たない、偕其儀式は座中一人の發聲につれて一同經を讀み、或は立ち或は座し、或は兩手を顔の兩側に付け、或は携へたる座具の上に額を付けて禮拜するのであるが、極めて靜肅である、暫くして第三列に座して居つた一人が長き杖を取つて立上り何か唱へた、其終ると同時に第一列中央の一人が立つて其杖を受取り高座の上に昇つて何やら書物を讀初めた、ダツウの息子だと言ふことである、其聲誠に軟かにして玉を轉ずるが如く、又赤兒の語るが如く、而して五六語毎に長き音を引いて節を付けるのが、恰も我國の朗詠のやうで古雅且優美である、是は回教の聖典コーランを讀むのであつた、其讀經の間凡そ十分間、將に終らんと



(イ ガン サ ク ラ タ) 飾装の村ロモ

する時群集が低音で之に和すること謠の次第の如く一高一低聲音相連なる中、壇の傍に座した一人が其壇の欄干に立てた旗を取つて之を巻く、其中に讀經が終る、一同打寛いで立上り中央に進んでハヂの手に額を當て又互ひに額を付けて敬禮する、其中廿人ばかりの村民は代るく吾々の處に来て握手した、村長は此日普通の衣服の上に黄絹の長衣を羽織つて居つた、此服装はメッカに赴いて拜禮を遂げハヂの稱を得た標であつて土耳其皇帝から許さるゝのださうな、彼の子息も亦同様の服装をして居つた、但し其色は隨意と見え茶褐色であつた、讀經が済むと堂後で爆竹をやる、此爆竹はモロ流で大竹に石油を入れ火をつけて瓦斯で爆發させる、其音大砲の如くで有る、それから村長の先導で村内を巡る、齒の黒い女や澁紙色の子供は我國の漁村を想出させた、總じてミンダナオの住民はモロに限らず總て檳榔子を嗜み男女共眞黒な齒をして居る、黒齒の事は舊約聖書にも見えるさうで或は中央亞細亞から起つたかも知れぬ、回教との間には必ず何か關係が有らう、村内一見の後に村長の家に伴はれた、其家は素木造りのニバ葺だけれど頗る大なる二階家である、此處にも滿艦飾の如く旗を吊つて、窓から外へ垂れたる一つの赤旗にはウェルカムの英語を羅馬字で現はして有つた、階段を登つて客室に入れば二個の長卓の上に茶菓を並べ數十脚の椅子が其兩側に並べられて

ある、村長の請ずる儘一同椅子に座して珈琲を喫し菓子を食べたが、見ると其菓子の中に日本のちまきに好く似たものがある、バナ、の葉に餅を包んだものである、中の餅も矢張餅米で造つたものらしく光秀の喜びさうなもので有る、村長に謝して此處を去り今度は棧橋から

乗船したが老人は半壞の棧橋の上を平氣で飛渡つて見送りに來た。

ウイステリヤ



長村のイガンサクラタ

八月二日は中村氏に引張られサンボアンガ市外のバラテと云ふ所に行つて、日本人の漁業者が新に造り上げたモ

ターアポートの進水式を見た、此ポートは長さ二十八尺で十五馬力の機械を据ゑることになつて居る、建造費は機械代共に八九百圓日本大工二人で一ヶ月半掛つて出来上つたものであ

る、其建造の場所は海水が沼澤の如く陸地に侵入して居る、造り上げた舟は泥の上をすべつて水中に浮ぶのであるが、此邊には柁のやうな葉を持つイガノの蔓草がしばいに生え、其間にマングローブが根を張り、水路甚だ狭く且曲つて居る、進水の法は極めて簡單で二十人ばかりの男子が力を協せて船を押流すのである、船の上には米國旗を立てたがそれでは氣が濟まぬと見えて、又別に青竹を立て、手拭で裝飾が施してある、エイヤノの懸聲で船は難なく水上に浮んだ、船の上から餅を撒く、船主花田君は麥酒を抜いて吾々に勧め立ながら一所に喇叭をやる、軍艦の進水などは少し式が違ふ、實は昨日中村君から此舟の選名を頼まれウイステリヤ(藤の花)と云ふ名をつけたが、早やそれが船側に書いて有る、余も船の命名は初めてだから祝うて一首詠んだ、

まこ草の茂る水際に日本の本



童兒ロモのイガンサクラダ

紫深くにほふ藤なみ

醜草と云ふのは彼のイガノの草を指す、歌人の手を刺したのでかく罵しられることゝ相成つた。

モロの都ホロ

サンボアングの見物一通り終つたところに、マニラからダヴァオ行の汽船イスラス・フィリピナスが到着したので、八月二日夕陽阪君と共に之に乗る、船はまづ西航してスルーの首府ホロに寄港し、引返して東方コタバト、ダヴァオに向ふもので有る、イスラスは噸數千噸ばかりだが、古さに於ては我豈敢てロムルスに劣らんやの老船で随分不潔なるもので有る、殊に其船室が下甲板に在るのは甲板上の睡眠を好まざる余に取つては一大難儀で有つたが、船長は氣輕な面白い西班牙人で大に助かつた、原博士の「南海一見」を見ると、サンボアングからマニラまで同じマリチマ會社のネイル・マクレオドに乗つて食卓で下席に就かせられたことを憤つて居られるが、此邊で其不平は原氏にも似合はぬ野暮だ、ロムルスなどはハッチの上を食卓に假用する、此船には粗末の卓子が有るが、米人官吏でも何でもシャツ一枚で飯を



（モロの正橋の面家の屋政）

食ふので有るから、席順どころの話では無い、食事の場所が夜は寢室、日本に居ると思へば一向平氣で有る、唯ダヴァオまで三十八圓近い船賃は滅法高過ると不平を言ひたい。

八月三日午前五時船は既にホロの港の大棧橋に着いて居る、此處が即ち恐ろしい評判の有るモロの巢窟かと思ふと少し變な氣持になるが、棧橋から眺めたところ直ぐに首を取られさうも無い、果してモロ御家老の令息八五郎殿が洋服のハイカラ姿で出迎はれ、知事ローラー氏七時政府に於て面會との事を傳へられる、少し間が有るので同船のヒッチコック協阪兩氏と共に上陸する、ヒッチコック氏は會計検査官で官吏横領罪の裁判の證人としてコタバト迄行くので有る、ホロの町は棧橋の

突當りに正方形を成し、三方に石垣及城壁を廻らして居る、サンボアガより遙に小なれども街路は端正、樹木あり花卉あり一寸住んで見たいやうな町である、此處は即ち眞珠船の本據で日本人も少なからず住居して居る、近頃眞珠の獵場が段々衰へたので、其一部は呂宋の方に移つて居るが、近頃濠洲方面から新式の眞珠船が來て此近海に活動して居る、其新式は潜水夫を海底に吊り下げながら船を走らせ其合圖によつて船を進退し、慥に貝の在るところを見て錨を下すので、從來の如く錘を下して漁場を捜すのより收穫が多い、其代り潜水夫の仕事は幾倍か困難で多量の報酬を貰ふ代り眞に生命がけである、此藝當は日本人ばかりでモロでも出來まいと思ふ、モロは前に言ふ通り慥悍な人種に相違ないが、其甚く恐がられる理由は別にある、それは彼等の奇習フラメンタドで、回教では自殺を許さぬ、自から殺したものは天國に赴くことが出來ぬ、其代り異教徒を殺して斬死する者は殉教者として屹度天國に入ることが出來るとある、其處で生活に窮し或は世事に絶望した奴が刀を以て往來に飛出し、手當り次第に異教徒を殺戮して終に自殺の目的を達する、之を名付けてフラメンタドと云ふ、是は如何にも危険で暗の鐵砲何時誰に中るか分らぬから比律賓人は大に恐れる、然し日本も昔は辻斬と云ふ恐ろしいことが有つて、新刀をためすなど、號し立派な士が町に出て人を不

意打にする、フラメンタドどころの騒ぎに非ず、それから又人に恨を抱く奴が刀や野砲を以て荒れ廻り、十人斬など、云ふことが今も時々新聞に出る、考へて見れば此方はモロ以上のモロで、彼等が一ツ目小僧なら我々は三ツ目入道位の資格が有る、三ツ目が一ツ目を恐がる理由はないなど、段々膽が太くなつて来る。

七時政廳を訪ふと知事も同時に飛込で来た、書生肌の若い男で滅法嬉しい、時間が無い直にソルタンを訪ふべしと、自から自働車を御し八五郎脇阪兩氏も乗せて後方の城門から走り出る、見ると其門には兵士兩人立番しキラ／＼するバヨネットを携へて居る、ソルタンの居宅は島を南方に横断したマインバンと云ふところである、道路は可成り好いが所々修繕中で有る、近頃モロの悪徒は悉く誅戮せられて地方平穩に歸したと云ふが、僅に數月前まで此マイ



ホロの大通路

ンバンの往復は護衛兵を要する程であつた、行く／＼其地勢を見るに申すまでもなく火山質であるが、山の形は他の地方に於て見るものと異つて角度鋭く文人畫の山に有りさうだ、大抵森林は焼盡され若くは伐倒されて、平地は申すまでもなく山腹までも耕されて居るが、其耕作の方法は極めて鹵莽で雜草と米とが同居して居る、ところ／＼に灰白色の大木が伐り残されて突立つて居る、此島の産業は牧畜、米、麻、タバコ、ココ、珈琲等の耕作である、モロは其特有の服装をなし馬に乗つて田間を往來して居る、成程強さうだ、彼等の中には前の土匪大人も交つて居るで有らう、暫く行くと右手に小山が有る、ブツダホーと云ふ名で、數年前モロ千餘人米軍に追詰られ數を盡して殺さるゝまで抵抗した古跡である、カーペンタ氏來任後も本島には尙幾多の小土匪が居つて、屢々良民を襲ひ官憲を惱ましたが、近頃悉く縛に就き又殺された、其所で此道路も安全と云ふ譯である。

ミンダナオの土匪

ミンダナオの土匪は恰度臺灣の土匪と同じく各地に其頭目が有つて威を振うて居た、明治三十一年、余が土匪調の爲め臺灣に行つた前後臺北に簡大獅臺南に林少猫、翁大臭、臺中に簡

義、柯鐵など號する者が居つて各部下數百を貯へて地方を横行し、佐々木蒙古君なども北投温泉で簡太獅の部下に襲撃され萬死中に一生を得たので有るが、ミンダナオでもコタバトにはダツ・アラマダツ・アリ其子ブンガ、バシラン島にはヤカン・アタール、サンボアンガにはダツ・ロムロなどと稱する輩が一昨年頃まで横行して居つたので有る、それをカーベントリー氏が工風を以て段々に懐柔し或は誅戮し、地方は漸く靜穩に歸した、近頃もラオ地方で有名な土匪が憲兵の爲め退治されて、地方の禍害が除かれたので有る、其中のアラマダは三千人の一部落を有し、米國の支配下に附くことを肯んぜず、山中に一小獨立國を立る考で有つたと云ふ、是等は畢竟大勢を知らぬからで臺灣にも矢張り其類が有る、余の臺北で行き逢ふた鄭文流など云



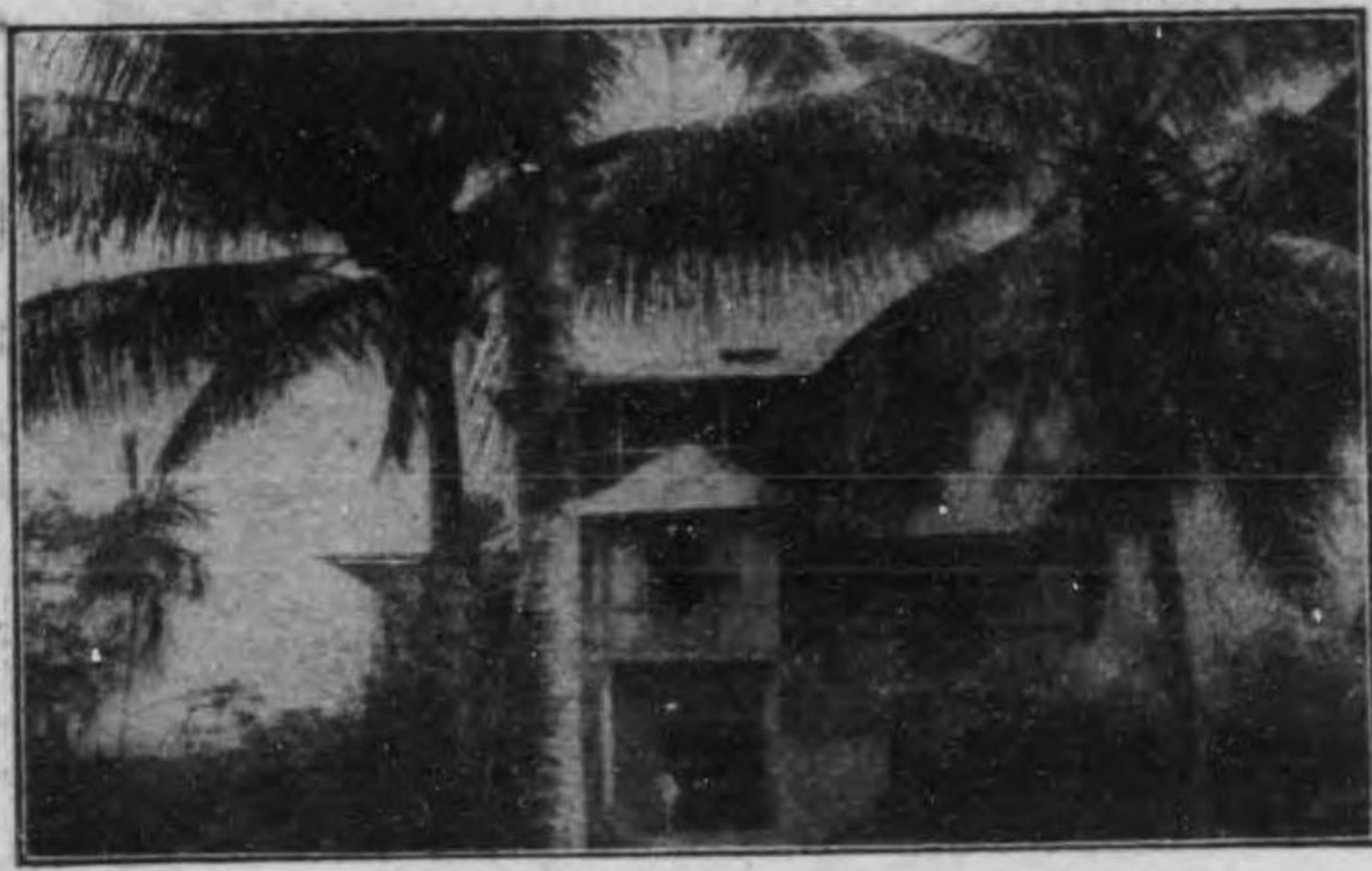
長官ボノマセ順歸

ム男は純粹の賊では無かつた。

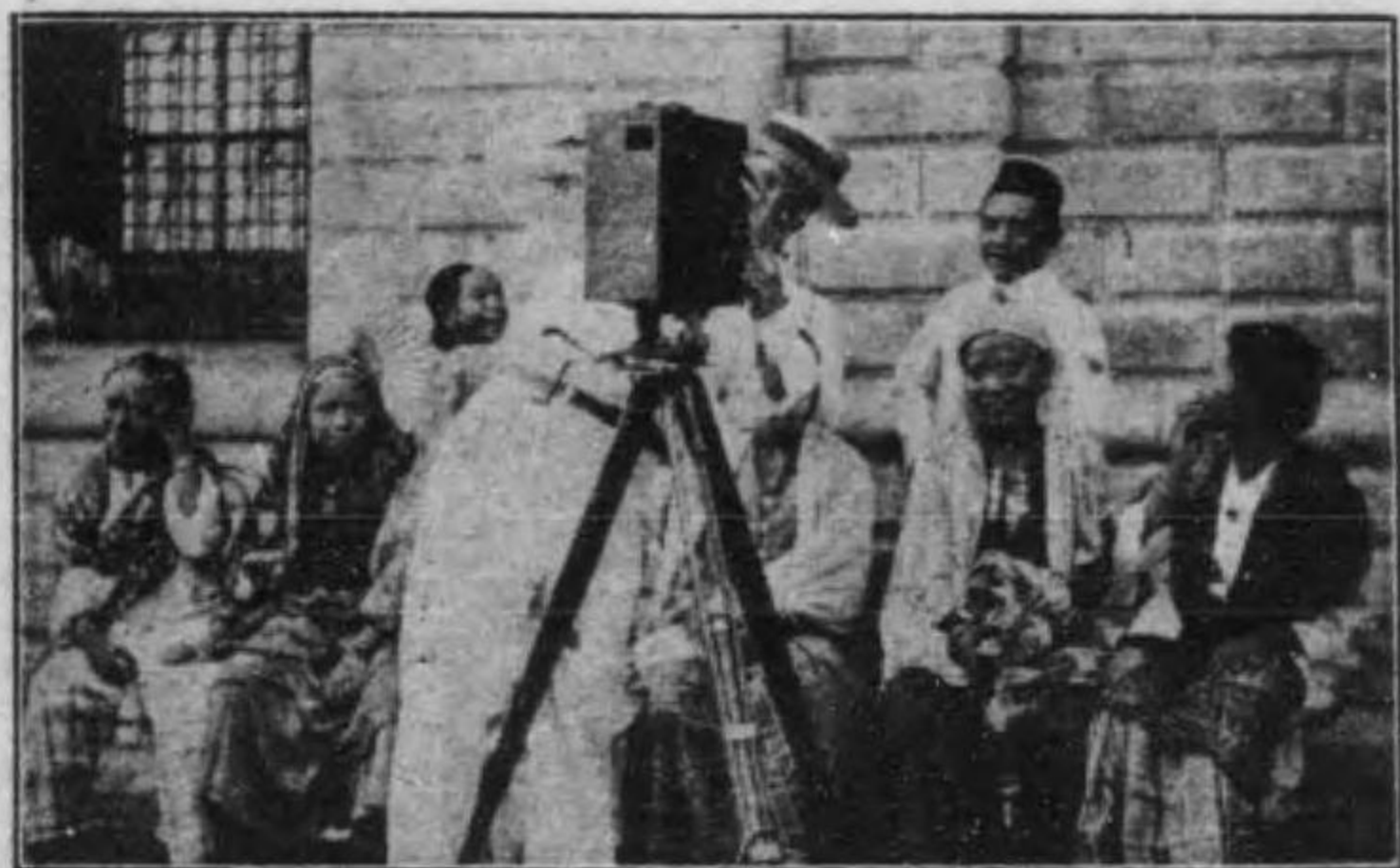
然し西班牙時代にはカーベントリー氏ほどの智者が官吏中に居なかつたので、唯武力を以て之を壓伏せんとして果さず、ホロモロの如き開化したる一民族は人々死を賭して外國の征服を防禦するので、西班牙一代三百年間遂にホロを平定する能はず、モロの使用するランタカ(大砲)と其決死の突貫を防ぐ爲め、ホロ城を築いて自から其中に立籠り、恰もモロの包圍中に在る如き状態で、僅に領有の名を保つて居たので有る。

マインバンのソルタン邸

ホロからマインバンまでの距離は十二哩であるが四十分ばかりで到着した、ソルタンの邸は海岸を少し離れた小高い處に在る、家は木造の三層樓恰も日本の城の櫓の如き體裁で、其外に低い石垣を繞らして居る、ソルタンは多勢の下



邸ソタルソのンバンイマ



ソルタンとその家族

男を連れ自ら階下まで出て迎へた、打見たところ年は四十餘り、白の洋服を着、頭にダアバンを纏ひ、足に裝飾の付いたスリッパを穿き、時計を下げ、萬年筆を持つて居つた、此人も檳榔子黨で其齒が眞黒である、吾々の誘はれたる階上の部屋はソルタンの寢室であつて其處にベッド鏡臺が置かれてあつた、ソルタンの妃に紹介される三十ばかりでも有らう、模様の有る寢衣の如き衣服を着、足は跣足で有つた、ソルタンは英語を話さぬ、知事の通辯を煩はして十五分間ばかり談つた、此ソルタンは一昨年米國政府の世話で歐米を一周した程あつて却々世間通である、余はソルタンに向つて是非一度日本に來遊せられんことを希望する旨を告げたら知事を顧み此方が御伴れ下されば何時でも行きますと答へた、八五郎君は此ソルタンと共に英米佛伊の四國を巡遊したのである、八五郎君は怜悯活潑將來此スルー縣の知事になるだらうとの噂で有る、それよりホロの市街に引返したが、幸ひにも船の出帆する五分は

かり前に歸着して首も取られず無事船中の人となつた。

コタバトの河口

八月四日午前六時船は既にミンダナオの中部なるコタバトに着いて居る、但し着いて居ると云ふのは名ばかりで、河身の浅い爲にイスラス程の船でもコタバト市まで溯れず、ブランギ河の河口數町の所に投錨して居る、此邊は海底に斷崖があつて五六十尋の深さより急に五六尋の淺瀬となる、投錨の極めて困難なる處である、船上から望めば遙かに南方の河口も見える、此川はコタバトの少し上で南北兩派に分れ、其間にチマコと云ふ七百六十呎の一小山を挟んで海に入る、南方河を隔て、彼のカバラタ山を見る、高さ二千三百四十呎山頂は平たくて青々とした草原が見える、北方にはマルガバト岬と云ふのが突出して居り、其奥のラバヤンが岬との間にバランと稱する古い村がある、附近に椰子園があつてロミュルスから此船まで同船の西班牙人ヒメネス氏の所有に係る、ヒチコック氏、ヒメネス氏は是から上陸、此處で少し荷物を卸し午後三時頃出帆した。

サラングニ灣の日本人

明くれば八月五日昨日來屢雨降つて今朝は殊に冷氣である、午前六時に船はサラングニ灣に入りかけて居る、此灣は地圖上の小灣實地の大灣であつて、舟行くこと一時間半にしてやつと灣口に近いサブと云ふ小村の前に來た、此灣は未だ海圖が無い、船長は喜望峰を廻つたバスコダガマの様に運を天に任せ突進するのである、但し海底は甚だ深く陸地に接して五六十尋の處が多い、加之海岸は砂地だから突當つても大丈夫である、船上から見れば海岸に亞鉛茸の倉庫が一棟あつて其傍らに人家が一二軒椰子バナ、の間に隠見するばかりで極めて寂寥たる處である、生物は數個のモロと牛が二頭馬が一頭海濱に居るばかりである、斯かる處で何を積卸しするかと見て居ると、船のボートが陸と船との間を頻りに往復する、船員に尋ねたらビャオと云ふ胡桃のやうな油の取れる木の實と麻で有ると云ふ、其中船長が余の所に來て日本人は豪い斯んな處まで來て商賣として居ると言ふ、余は何處に日本人が居るかと言ふと、彼の倉庫は即ち日本人のもので其持主は今船に來て居ると言ふ、急いで舳の方へ行つて見ると、色の黒い男が頻りに荷物の積込みを指圖して居る、試みに日本語で話し掛けたら日本

語で「唯今は忙しいから後に御目に掛る」と云つた體で船が出ると先きの色黒男は着物を着換へてやつて來た、見れば立派な日本人だ、其話を聞けば、此處は元と太田會社の賣店であつて、此灣内に六ヶ所ばかり出店がある、それを元の店員前澤氏外數人に太田氏から譲り與



ミナダノ第一の富豪ツダビアン

へ別に一の組合を造らしめたもので、今此船に乗つてタヴァオに行く人は其組合員の一人原君である、原海軍大佐の弟で、嘗つて騎兵として日露戦争にも従事した人であるとは頗る感心だ、六ヶ所の店はブリアス、グラン、サブ、ルム、ボアヤン、マツカルで外にマールと云ふのが灣外にある(ボアヤンは閉店中)、グランはサブよりも少しく灣口に寄つた所で西班牙人と支那人が各一軒の店を出して土人と貿易して居る、此地方の住民は即ちモロで時々其中の悪徒が危害を及ぼすことがある、少しく山地に入ればピラン人種が住つて居る、

彼等は太古其儘の生活で、神武東征時代の日本人も斯くの如くあつたらうかと思はれる、彼等の食物は米、芋、甘藷などで棕櫚の若芽の中から澱粉を取つて食ふ、之をミユラルと云ふカフオイと云ふ草の根をも食するが是は芋のやうな味がする、此邊は太古以來斧鉞未だ入らざる森林ばかり道路は僅に蕃人の往來する足跡があるのみだ、然し其道を通つて陸上からコタバトに出ることも出来る、まづ馬上で二日半行くとブルワンと云ふ湖水に達する、其湖水からブランギの水路に依つて下つて行けば二日にしてコタバトに出る、ブルワン湖には常に日本と同種類の蓮花が一面に生えて居つて紅白の花が眼も覺むるばかりに咲く、先日原君商用の爲め此道を通つてコタバトに行つた時、早朝此湖水の岸に出て蓮の花の聞く音を聞いた時は極樂へ行つたかと思ふやうな好い心持がしたと云ふことである、此道を往來するには無論蕃人の家に泊つて歩くのであるが、武器などを携帯すれば却て害を招く、丸腰で行けば至極安全で誰でも宿を借し食物を呉れる、ブルワン湖水を少しく下つた所にミンダナオ第一の富豪ダッ・ピアンと云ふ者が居る、是はモロの大酋長であつて、其邸宅の圍りにはモロ製の大砲を据付け澤山の若者を蓄へて居つて大名のやうな勢で有る、其財産を金に積ると凡そ三十萬圓ばかりであると云ふ話だ、昔の長髓彦などは此類で有つたか、ピヤンの家に行つて



(人土の近附オバダ)人ゴチ及人ボゴバ

一泊を乞へば大に歓迎されるさうである、サラングニ灣の西岸に彼のマトン山が傑然として聳えて居る、其高さ七千五百四十四呎ミンダナオ島第二の高山で、其山麓一百哩の間唯鬱蒼たる森林を見るのみである、今朝見た時は山朝に雲が掛つて居つた、が今見れば晴れて富士山に似たる峯頭を露はす、思はず原君に逢ふたのも非常の愉快である、

我船の來べき朝なりサラガニの
マトンの山の雲の振る舞ひ

此山麓には又グツタベルチャ、アルマシガなどを採收して賣る土人もあるとのこと。

ダウアオ灣に入る

午前九時はサブを出で灣口を左へサランガニ島を右に見て海峡を通る、此離れ島にも英人が一人住て農業をやつて居るとは驚くべし、ダウアオ灣は入口が濶いから何時這入つたか分らぬ、カラワンと云ふ處に着く、此處には米國のバドストンと云ふ人の麻園があるが、南風の時期には浪が高く船の碇泊が困難であるさうだ、此灣内には殆ど燈臺の建設がないから夜航は危険と今夜此處に一泊した、此處まで来れば既に比律賓の最南方であるが、氣候は却て涼しくして朝夕共に七十八九度、下甲板の客室に寝ても少しも暑苦しさを感じぬ。

八月六日には朝八時にカラワンを發して行くこと三十分マッタと云ふ處に着いた、此處は山脚の平らな砂地で棧橋が一本突出て居る、米人ウード氏の農園で麻と椰子と護謨とを植ゑて居る、同船のシモンズ氏は灣東のタグナ、ンと云ふ耕地に行くものであるが、ウード氏と心安いから伴立つてウード氏を訪ふ、棧橋を上ると大なる麻倉庫がある、其後方にウード氏が比律賓特有のイビルと云ふ紫檀のやうな材木で住宅を新築中である、其又後方に氏の事務所があつて是は木造ニバ葺、其近邊に數多の人家があつて、農園使用の土人が住居し小村落

の形をなして居る、其邊一面椰子が丈高く育つて居る、事務所の後數十歩にして既に麻園の一端に達する、其中央を一條の道路が貫通して居る、麻の間に點々珍しい木が植ゑてある、サラ護謨と云ふもので有つた、ウード氏の農園は麻十萬本、椰子六萬本、バラ護謨若干を植ゑて、麻は一月凡四百ピクルを積出す、氏は千九百三年に小學校教師として渡來したものであるが、早く農林事業の有利なるに着眼し、親戚知人を語らうて一會社を立て此土地を拂下げ、自ら監督して耕作を行ひつゝあるものである、今日は米人中第一の成功者と言はれて居る、氏は土人の外に支那人やバゴボ人を使用して居る、余等は此處で初めてバゴボを見た、ウード氏の少しく北方に又米人ビーボデー氏の農園がある、船はウード氏の倉庫から麻を積取つた後、直に出發して午後二時頃には灣内の一島サマル島と本土

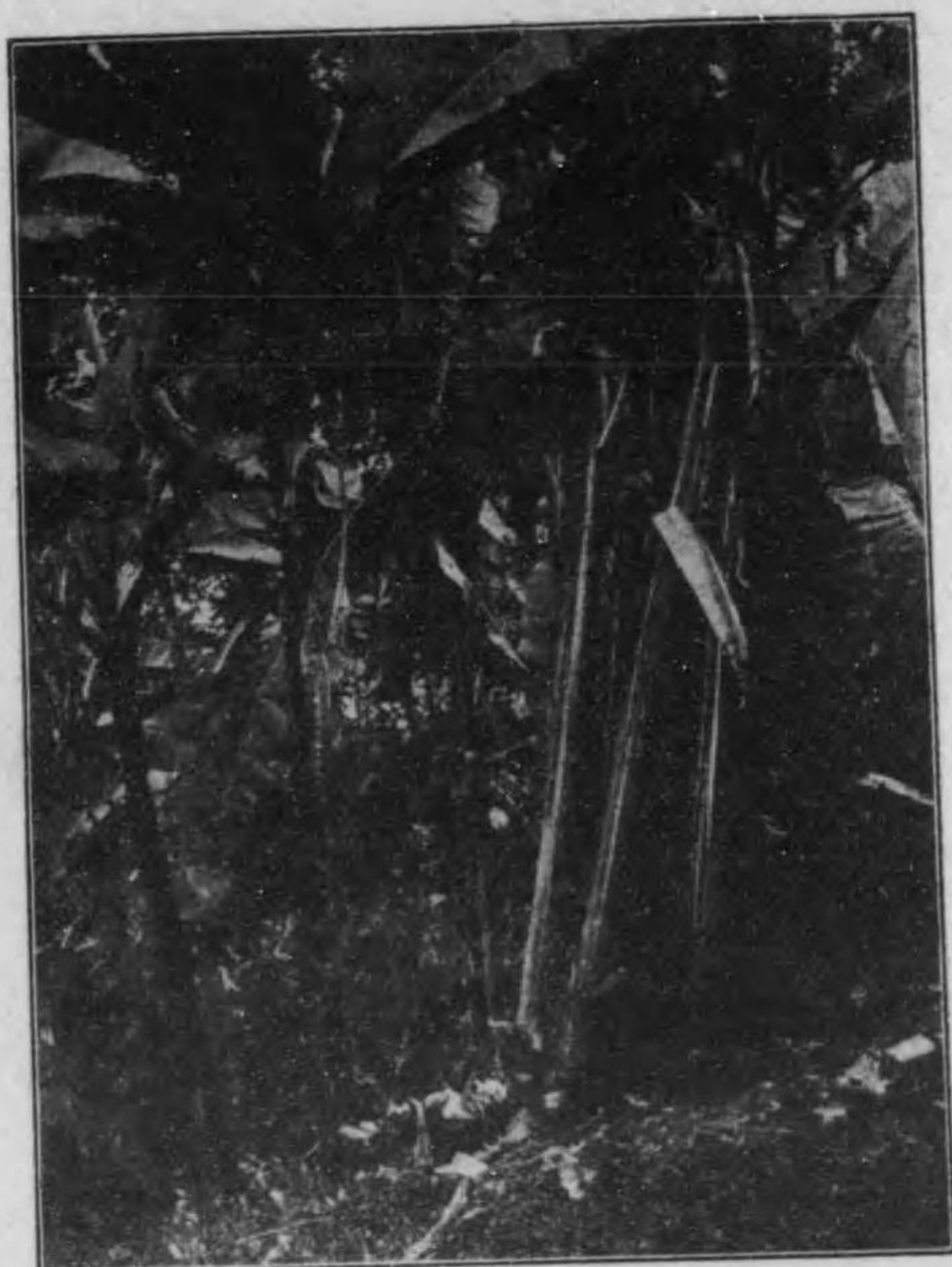


橋 棧 セ ロ タ

との間の狭いところに來た、西方にはマツキンレイ、ルーズヴェルト、アボ等の山々が空を突いて聳つ、アボは比律賓第一の高山で、高さ凡そ一萬呎常に薄煙を噴いて居る、太田氏の耕地は此三山の麓に在つて其地名をタロモといふ、船は徐かに進んで三時にタロモの棧橋に着いた、イスラスは船上に日本より出稼の農業者十七人を搭載して居つたので、ダヴァオ到着前一寸此タロモに寄せたわけである、余等に取つて非常の好都合、直に船を辭して陸に上れば、サンボアンの瀬戸清次郎君は棧橋に待受け、余等を太田會社の社宅に導かれた。

ダヴァオ灣の耕地

ダヴァオ灣はミンダナオの東部の南方から眞北へ向けて、海が七十四五哩も楔形に進入した大海灣で西岸の方は中程が少し膨らんで陸地が弓形に歩を海水に譲つて居る、楔の頭から少し南方に一大島が斜に西岸に頭を接して横はる是をサマルと云ひサマルの北端西岸に近く一小島は又突起するものをタリコッドと云ふ、ダヴァオの首府ダヴァオはサマル島の頭に近く、陸地の少しく海中に斗出するところに在つて、ダヴァオ河が其南方に出口を有して居る、タロモムダヴァオから更に陸上四哩ばかり南方に寄つたところに在る。



植付後二十二月個のカバア

此大灣の兩岸は西班牙時代から多少耕地を有して居たが、首たる住民はバコボ、マノボ、マンダヤ、アタなど云ふ未開のインドネシヤン人で、太古其儘の生活を爲し麻を植ゑて自から着、米、甘藷の類を植ゑて自から食ひ其傍ビヤオの實を拾ひ、アルマシガを掘り之を以て偶々貿易に來る

西班牙人や土人と物々交換を行ひ、南京玉木棉糸金物其他いろいろの品物を獲つ、あつたので有る。

土人の名稱と風俗　ダヴァオ縣廳の調査するところによれば重なる土人の種類及人口左の如し。

バコボ人	五千人	ギアング人	二千人
モロ人	二千五百人	マノボ人	二千五百人
タガカオロ人	三千人	ビラン人	八千人
マンダヤ人	四千人	アタ人	六千五百人
マンガウンガ人	三千人		

是等の未開人がダダアオ灣の兩岸山脚より山腹へかけて今も住つて居る。

彼等は回々耶蘇の兩教を奉ぜず、其種屬間に古より傳はりたる特別の信仰を有し、大抵皆來生の賞罰を期待す、アタ、バコボ、ギアング、リバブオン、マンガウンガ、マンダヤ、サマル等は善神ヂユアタ惡神マラアトを有し、カラガン、マノボ、アガカオ等は善神テマムム惡神トラグカンを有する、尙外に若干の小善神小惡神が有つて彼等の行爲を監視するものと信ずる、但し其信仰は精神的で偶像は一切用ゐぬさうだ、總じて此等未開人の性質は伶俐にして正直に戦闘に勇敢である、老人と酋長を敬尊し大概の争論は其裁断によつて解決する、又同種屬相睦み共同耕作を爲すの風が有る、戦闘となれば随分殘酷で又狡猾なる術策を弄する、敵の首、四肢など戰捷の記念として久しく保存し、戰場に大勇を顯はしたものは推されて酋



麻 引 き 作 業

長となる、刀劍及槍は自から作る、衣服は狭き股引に筒袖のチンチラを着其上に南京玉で模様をつけ裝飾する、又鈴を好み澤山の鈴を背囊や刀の鞘などにつけ盛に音を立て、徘徊する、彼等亦總て檳榔子を噛むの風あり、齒は悉く漆黒で髪を長く伸ばして居るから男女の區別が分り悪い。

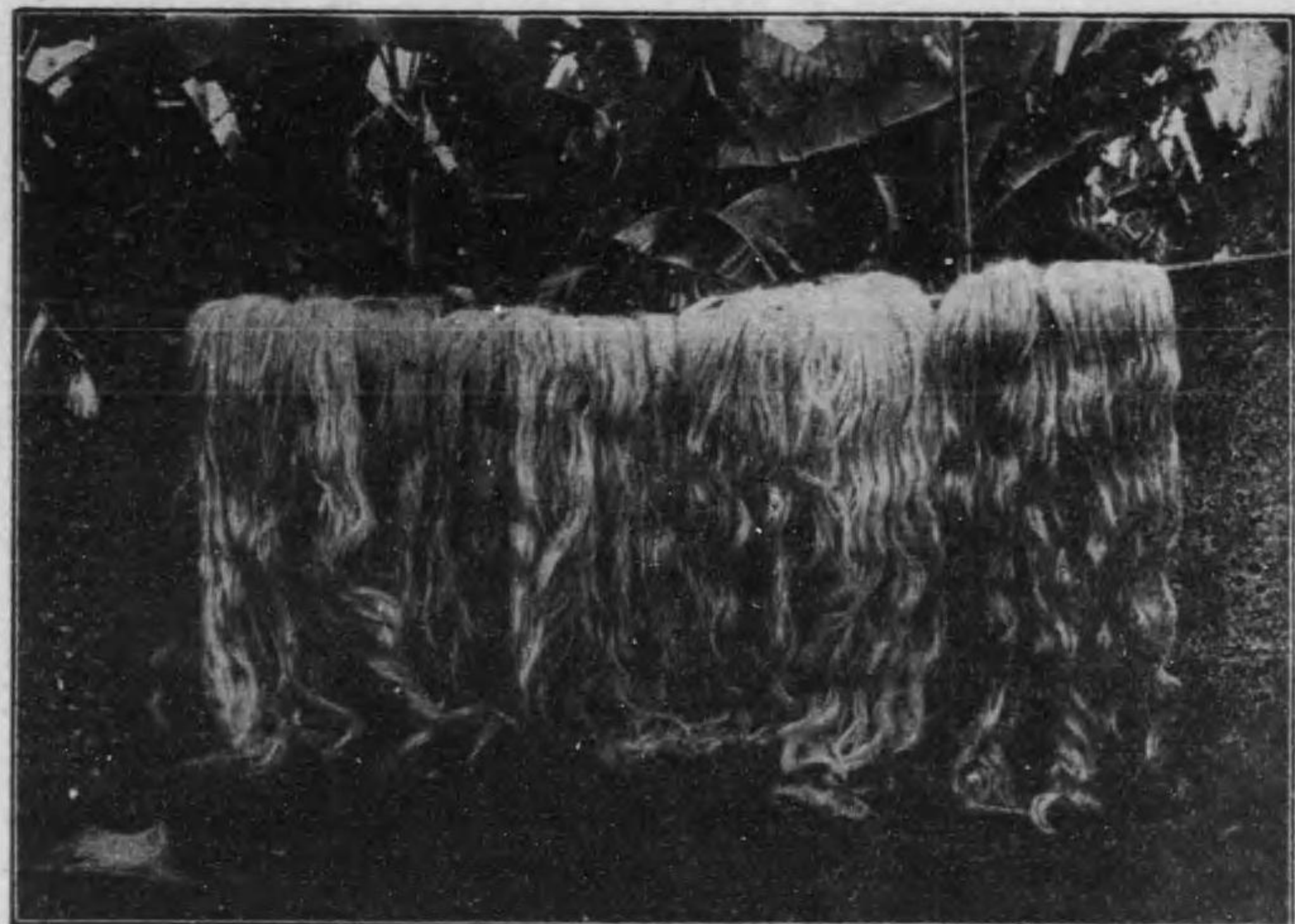
兩岸の耕地 ダダアオ灣兩岸の耕地は多く山脚の間の小平地に起つたもので、灣底のイホ川を境とし南より數へて西岸にラオヤン、カリヤン、ラウワ、レイス、マリタ、ララカロン、ツバロン、チブンゴイ、カラブシン、マラロツグ、バラダヂゴス、サンタクルース、アストルガ、ダロン、シ

ラオアン、ダリヤオン、ヂュモイ、バゴ、タロモ、バガミカン、ラサン、タグム、イホの諸海村、何れも其附近に大小の耕地を有し多少の麻、コブラ、ゴムを輸出せざるところは無い、而して其多くは米人で有る、又東岸には山脚が少い爲耕地も少くタグナ、ン、ワテオ、ピソ、コアボ、ラユニオン、シガボーイ、プトプト其他三四の海村から麻と椰子を出すので有る、其中で太田會社の經營するタロモ附近は、山脚間の小平地で無くアボ山麓の緩傾斜地で最も陽氣な地勢で有る。

太田興業會社

太田興業會社はオータ・デグエローピング・コムバニーと云ふ太田恭三郎君の設立する所である、太田君は播州の人、東京高等商業學校に學び、明治三十四年燐寸貿易調査の爲めマニラに來着、其儘マニラに留まり商賣に従事中、明治三十六年ダグアオ灣内の西班牙人から日本農夫の周旋を頼まれ、彼のベンゲットの山道工事の爲渡來した者の中から、若干人の農業志望者を集め、之を引率してダグアオに來たのが當地に脚を留むる初めで、最初はタロモ其他に商店を開き、バゴボ人マノボ人等を對手に米や雜貨を賣つて居たが、明治三十七年に

至つて麻耕作に従事することとなり、十二萬五千圓の資本を以て太田興業會社を設立した、其後資本を二十五萬圓より遂に五十萬圓に増加して、今では此附近に於ける最も大なる麻園經營者の一人である、其タロモに於ける事業は麻及椰子の耕作販賣、土産の輸出、雜貨の輸入、沿岸航海の代理業等である、それからマニラとサンボアングに出張所があつて、マニラの出張所では農産物の賣買及輸出、海産物の輸出、日用雜貨品の輸入をやり、サンボアングの出張所では椰子園の經營、雜貨品の輸入、海産物の賣買、木材伐出しなどの業を營む、現今同社のタロモ附近に所有する土地の面積は一千二百五十六町歩、租借地が二千八百五十七町歩、其中會社直營の麻耕地二百町歩、椰子の植付段別百五十町歩、小作法に依る麻の植付段別七百町歩である、サンボアングは別に二萬五千本以上の椰子を植ゑ百五十頭の牛を牧つて居る、タロモの耕地は三四年來早魃の爲に大に苦んだ結果大正四年七月から灌漑工事を起すことになつて、タロモ川から水を引き幅十五呎深さ四呎乃至十五呎の大溝渠四哩半を本線幅三呎深さ二呎乃至三呎の溝渠六十哩を支線とし尙又天然の谿川を利用する事二十五哩、以て一千五百町歩の地面に灌漑し得べき計畫を實行し其工事將に成らんとして居る、此經費凡そ十萬圓、比律賓群島民營土木工事の最完全なるものとの評判である、前記未墾地三千餘町



マニラの麻の乾燥

歩の處分は、其六割を小作法に依る麻園とし、四割を直營の椰子園とする計畫で着々歩を進めつゝある、此社に使用して居る日本人は百五十名、土人百五十名、モロ八十名、小作の獨立農夫は悉く日本人で其數凡そ四百五十名である(大正五年四月)、斯く多數の人民を使用するを以て疾病救護の法を設くるの必要あるが爲にタロモには病院を設け、ダヴァオの開業醫師鈴木西照氏に其監理を囑託し凡そ二十人の入院患者を收容し得る程の設備が出来て居る、ダヴァオには太田君の外に副社長大城孝藏君、出資社員諸隈彌策君が居る、諸隈君は佐賀人大城君は沖繩人、共に最初から太田君を助け

て此事業を經營し、大城君は現に農園及水道工事の監督、諸隈君は商業部の事務擔當者である、瀬戸君はサンボアングの出張所を主管しマニラの出張所には事務井上直太郎君が居られる、何れも意志堅實の君子で、太田會社の繁榮は太田君が社中に好き人物を集め得たのが主なる原因である(神戸に支店あり太田氏令兄作太郎君主管す)。

マニラ麻

太田會社の主たる産業は麻の耕作で有る、否太田會社では無いダヴァオ灣の生命は麻に外ならぬ、更に大きく言へば比律賓の活氣は大部分麻の産出に因るもので有るから、ダヴァオを見んとするものは先づ紙上で少し麻學をやつて置かねばならぬ。

マニラ麻は本書上巻タヤバス見物のところでも一言した通り、日本で植えるやうな麻で無く、全く芭蕉と同一の植物で有る、温帯に産する普通の麻は外皮の甘皮から取るので有るがマニラ麻は樹幹を構成する網狀の纖維が即ち麻となるもので有る、芭蕉科の植物からは大抵有用の纖維が取れる、日本の芭蕉でも琉球では芭蕉布の原料を取る、是は誰も熟知の事、それからバナ、是も無論纖維が取れるが弱くて衣服の原料には適せぬ、第三アバカ即ちマニラ

麻で學名之をムサ・テキスタリスと稱する草で有る、其種類は随分澤山だが、比律賓では凡そ十四五種農業用として耕作せられて居る、其バナ、と異なるところは葉の形概して細長くして尖鋭なること、葉縁がバナ、より濃いことと有るが、最も著しい特色は葉の裏面向つて右側に暗褐色の線が真直に縦走貫通して居ること、是を見れば間違ひ無しで有る、是れは嫩葉が卷煎餅の如く巻いて生じ、次第に發育するに従つて其一方の葉端の汚れが他の一方に残留するもので有つて、葉の組織中に存する特質では無い。花はバナ、と同形同大で實も極めて好く似て居るが實の中は大違ひで、麻の方は種が一ぱい這入つて居る、然し採つて割つて見ねばバナ、との區別は素人に出来ぬ、其所で葉の裏に黒い筋の有無を検するのが一番簡便の見分け方と有る、余は其事をウード氏から教はつたが後に比島農務局の出版物を見たら矢張り此點がアバカの特色として記されてあつた。

アバカは葉の上端まで量れば十五六呎から三十三四呎までの高さで叢生する草で、一本の根から普通十二本乃至三十本の幹莖を生じ、幹莖は高さ六呎から二十呎位まで伸びる、此幹莖は葉莖の集團で有るから纖維を採るには先づ此丸い幹莖を伐り倒し、象牙の筥で其葉莖を一枚づゝ裂き剥がし、鈍い刀物と木材から成る麻引き道具に挟んでこれを引き絞る、薄い



麻 選 理

外皮を去つて中の白い纖維を取るのて有る。

アバカの種類は主に其外皮の色で見分けるもので素人でも少し見慣れば略見當がつく、十四五種の内ダヴァオ邊に多く植ゑられて居るのはタンゴニゴン、マギンダナオ、リプトンの三種で有る、タンゴニゴンは外皮が紫色で(或樹は黒色に近いまで濃くなつて居る)、其紫色の中に緑色の筋が通つて居る。マギンダナオは地が緑色で浅紫色と褐色の線が縦に走つて居る、リプトンは濃緑色と褐色の混りて紫色が少しも無い。

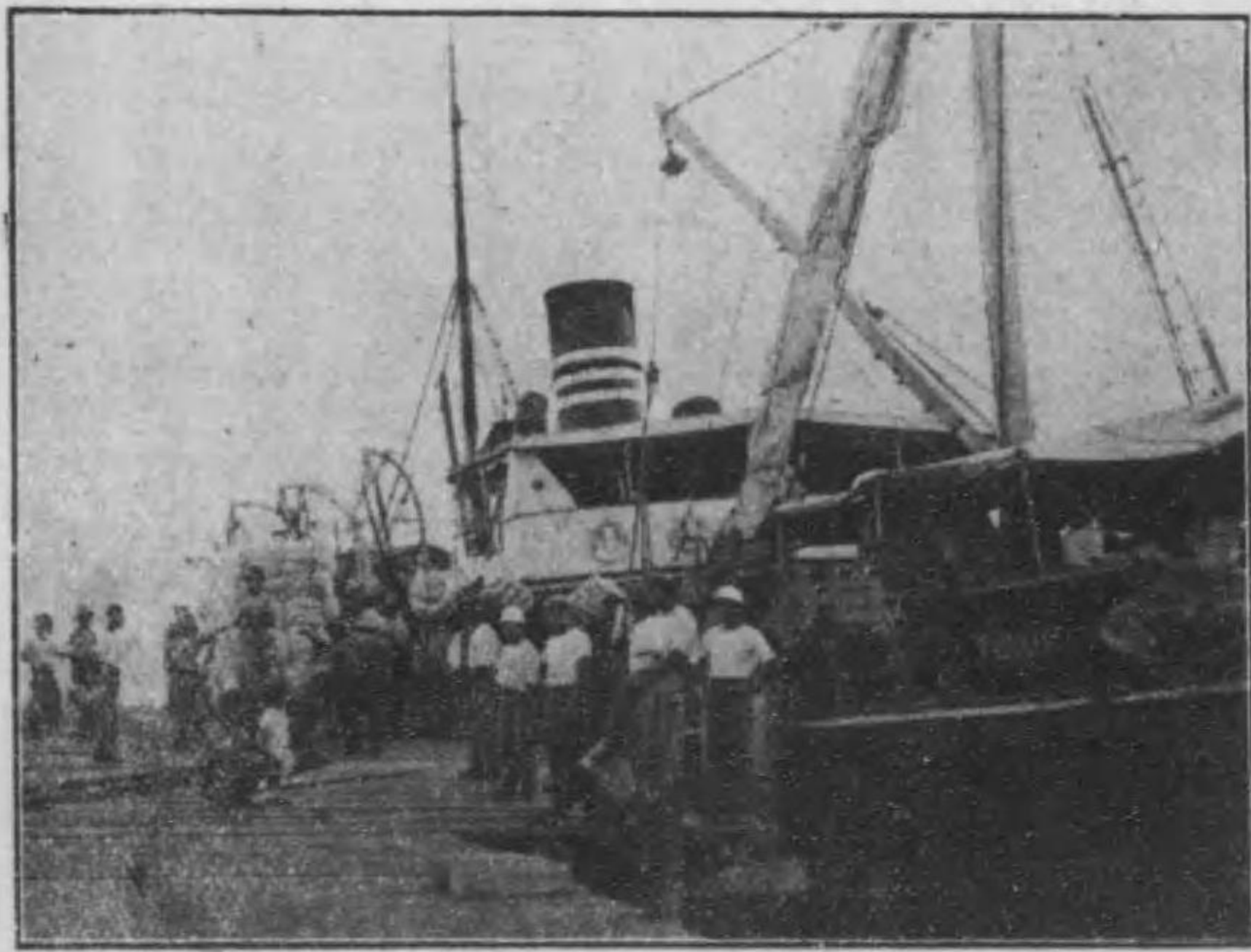
マニラ麻耕作の勘定は椰子と一所に卷末に揚げて有るが、收穫は農務局の調査に一ヘクタール(一町歩)に三百七十五キロ(六ピクル)

から二千五百キロ(四十ピクル)として有る(全島平均の産額は矢張凡そ三百七十五キロになつて居る)、一本の幹から收穫は〇、一五キロ乃至二、二七〇キロとしてある、然し稀には一本から二、五キロも取れるのが有る、そんなのは幹の重さも一本で百六十三キロから有ると云ふことで有る。

比律賓に於けるアバカ事業の面白いことは全く獨占で有ることである、椰子の如きは錫蘭でもジャワでも中南米でも出来るが、アバカばかりは他國に持て行くと商品になるだけの物が取れぬ、先年印度やボルネオに試作したことが有つたが何れも失敗で有つた、天豈比律賓に私するかと言ひたいところである。然し是を聞いて狼狽で、飛出しては困る、比律賓なら大丈夫には相違無いが土壤、アバカの種類、水利、地形、運搬の便などを研究して掛らぬと一旦種えたアバカを引抜かねばならぬ事になる、それから又恐るべき雑草の仕末殊にコゴンと云ふブリツキのやうな堅い草が驚くべき早さで生長する、草取りの勤惰が又熱帯農業成功失敗の分れ道である。

麻園見物

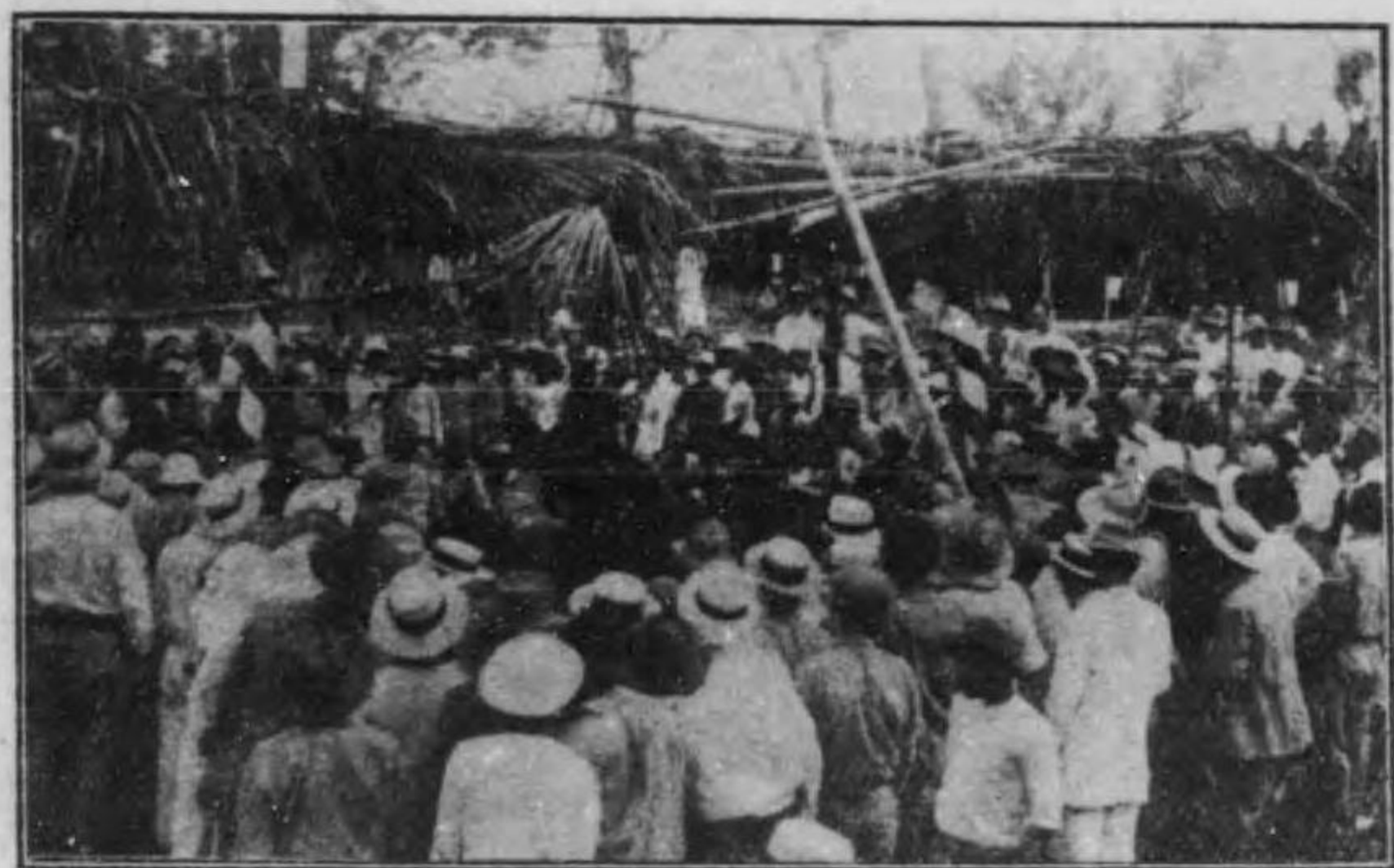
タロモの體裁は略ウード氏の所に同じやうで、棧橋の根には矢張麻倉庫があつて、其内には事務所がある、而して其傍らに更に又他の一倉庫があつて、其内には太田會社が其賣店で販賣する雜貨が詰つて居る、而して太田君の社宅は波打際に近く粗大なる比律賓式のバンガローで庭に花壇などが設けられてある、大城諸隈の兩君が家族と共に此家に住はれて居る、余と脇坂君は太田君の好意に依つて此のんびりした家に起臥するのである、此灣内の海岸は大抵何處でも雜木を伐拂ひ椰子ばかり残してあるが、此所は誰の考か熱帯の雜木を其儘汀に残してあるから、屋中に在つて波の音を聞きながら其波の眼に見えぬのは嬉しい、屋後も無論同様である、此綠樹の障壁はどうか長く保存して置きたいもので有る、到着の夜は久し振りに靜かな浪の音



麻積出し

を聞きつゝ睡つた。

八月七日いよいよ太田會社の農園を見物するのであるが、此邊には亦他の日本人岡田氏、植田氏、繁澤氏などの耕地がある、又米人リッビー氏の耕地もある、太田會社と關係の深い日本人の設立に係るミントル・プランテーション・コンパニー、リバーサイドプランテーション・コンパニー、ビャオプランテーション・コンパニーなど何れも太田會社の耕地に續いて大なる拂下地を有して居る、而して此等の耕地は彼のアボ、マツキンレー、ルーズヴェルト三山の麓を次第に上の方に昇りつゝあるのである、偕此朝は耕地に貨物を運搬するトラクション・エンジンの石油爆發の音を大砲と間違へて目を覺し九時頃から大城瀬戸兩君に伴られて耕地に出掛ける、此邊は官道私道共相應に開けて居るが常熱の炎天を數時間巡回するのであるから矢張馬に跨つて行く方が樂である、社宅を出て二三丁タロモの町に掛る、此處は太田會社の爲めに開けたところで人家數十軒會社其他の賣店や土人の住宅等有る、會社設立の病院を一見して外に出るとカキ服の美丈夫が馬上で飛んで来て余に近づき「君は土屋君ですか」と言ふ、何誰かと問ふたら、是はタロモから數十町の南方ダリャオンと云ふ海岸に昨年來椰子園經營を始めた江州の古川義一君であつた、古川君は大阪の伊藤忠兵衛君の従弟で新しい



太田會社の小作人

林學士で有る、伊藤君が麻店をマニラに有するところから昨年此地に遊び麻椰子の利益あるを見定め、親族と共に一會社を立てキャプテン・パチフキールドと云ふ米人の有つて居つた椰子園を買ふて自から之を管理しつゝあるのである、伊藤君からの手紙で余の來ることを知られたと云ふことである、勇ましい事である、古川君は其からダヴァオに向ひ、余等は町を離れて爪先上りの路を麻園に向つた、道路の兩側は所々に比律賓人の農家を見る、暫くして一軒の立派なカテージが有る、ビーボデー君の住宅で其周圍が氏の管理する農園で有る、それから更に少し上ると太田會社の耕地になる、満目是れアバカで其中に所々天を摩する大木が伐残されて立つて居る、昨年四月此邊の麻園に大火災があつて數萬本焼失したと聞いたが、今や其麻は既に舊の如くに生え揃ひ何處に火災があつたか少しも分らぬ、余等は靜かに馬

を歩ませつゝアバカの間をぐる／＼巡り頓て少し打開いたところに出た、此處に一軒の倉庫と一軒の住宅とがあつて周圍には椰子バイヤなどが生へて居る、是はバゴと云ふ處で倉庫は太田會社の雜貨貿易所兼賣店である、住宅は主任者の家で暫く其中に入つて休息した、純然たる土人風の家に入つたのは是が始めて有る、屋根をニバで葺いて床は板張になつて居る、日本人細君が留守をして居つて茶などを呉れる、傍を見ると新しい米國製の乳母車が置いてある、奥を覗くと愛らしい赤坊が眠つて居る、清閑真に美むべき生活で有る、暫して此處を出て再び馬上の人となつてアバカ林中を徘徊し麻引の作業を見た、麻は凡そ二十個月で纖維を取り得るものであるが、之を切る頃は其幹の頂上に花の咲いた時だと云ふことである、麻引きは前に記す通り唯簡單なる機械に掛けて葉莖を一本づゝ引くのであるが、麻引きの手に従つて美事な雪白の纖維が取れるのは實に氣持の好いものである、斯うして得たる麻は唯日光に曝すのみであつて漂白などの必要は無い乾けば直に商品となるものである。

バゴボに逢ふ

それから又麻の葉の中を潜つて水道工事の小溝渠に沿ふて山の中を段々上り、正午の頃又



タモ農家の天長節

一の賣店のある所に到着した、此處はミンタルと云ふ處でバゴよりも稍大仕掛である、此時恰度澤山のバゴボ人が貿易に来て居つた、彼等が南京玉を繫いでモール式の裝飾を施した美しい衣服を着、腰に山刀を帶し長髪を亂し檳榔子で黒くなつた齒を現はして語るところは平家の落武者八百年振りで山から出た様で有る、彼等は皆素足で或は徒歩或は馬に乗つて山中を往來する、其馬には木製の鞍を置き、衣服や背負囊には彼の銅が鈴生りに附いて居る、彼等は麻を持って来て日用品と交換するのであるが、近來は貨幣の用法を知つて却々計算に巧みであるさうだ、山間の學校でバゴボを教育して見ると算術は比律賓人よりも上達する素質を持って居るとの事である、バゴボの奇なる裝飾は其

耳飾りである、普通は他の蠻人の如く金屬の輪を入れて居るが中に往々極めて大なる象牙の飾りを入れて居る者がある、其象牙は恰も盃の様な形で絲底に當る處を耳朵の穴に押込むやうになつて居る、随つて其耳の穴は頗る大きく耳朵は玄徳式に肩まで垂れ下る、彼等は其奇妙な耳装を兩方の耳に挿み南京玉で飾つた紐を以て其間を連絡し其紐が羽織の紐のやうに頤の下に横はつて居る、彼等の言語は蕃語に西班牙語を交ぜ日本語も少し使ふ洒落れた奴は日本の俗歌をも上手に謠ふさうである、此處で灌漑技師の住宅に入つて休息し午食を喫した後、暫く比律賓流の午睡を試みた、此家は谿川に沿ふて椰子林中にあり、矢張高架式で風通しは極めて良く欄前にタロモ川が流れる、庭前に芙蓉の様な花が目も醒むるばかりに美しく咲いて居るのを何ぞと問へば木綿で有ると云ふた、川の對岸は矢張り太田會社の借用地であるが未だ樹木をも伐採せず太古其儘の森林が鬱蒼として繁つて居る、カンバスの寢臺を並べて板敷の上に仰臥すれば河中の淙々たる水聲は自然に睡りを促がして来る。

タロモ川ニバ家の軒の日盛りに

晝寝の夢をさそふ水音

インタルの一夜

午後三時半眠より醒め又馬に乗つて出發した、再び溝渠に沿ふて行くこと數十町其間は一歩馬足を誤れば溝の中に落ちるやうな處が多い、四時半頃ゼヤと云ふ水源地に達した、タロモ川の上流で天を摩するアビタン(タカリとも)の大木が大佛の錫杖然とニョキ／＼矗立して居るところで有る、會社は其邊の雜草灌木等を伐開いて假小屋を建て多數の労働者を使役して此處に大なる閘門を建造中である、而して水の取入口には別に小なる閘門を造り水量を加減するやうに仕掛てある、小閘門は既に完成大閘門も本年中には出来るらしい、此工事四萬五千圓の豫算で着手したが倍額以上を要し太田君頗る苦戦で有るが最早竣功に近づいたから先一安心今後は加何やらの早魃でも持て来いである、所が工事中に此地方は澤山の雨が降つて本年は一向水道の必要が無いとは天が餘り氣を利かせ過ぎた傾が有る、偕此處で暫時休息の後元來し方へ引返し途中から路を轉じて椰子や雜木の林中を通過し日暮るゝ頃麻の中に在る一軒の農家に着いた、是は三島常三郎と云ふ人の住宅で木の香の鼻を撲つ新築の二階屋で有る、三島君はタロモ草分の一人で今アバカ二萬本を有し獨立獨歩の農業者である、頃日

郷里から内政を迎へて誠に目出度い家である、屋敷は方形の敷地で三方麻を以て圍まれ一方は喬木の林である、庭には椰子パイヤの間に花卉を植え、薔薇、朝顔などが麗はしく咲いて居、又菜園にはパイナップル、里芋などが見事に育つて居る、今夜は主人の御馳走で珍らしい鯛の刺身に煮魚や魚のフライなどが出て来る、日本語ばかりで話がはづむのも頗る愉快主客五人打寛いで食事をした氣候は涼くて秋の半の如く蟲の音の聞ゆるのも面白い、夜漸く深けるまゝ大城氏の用意した美しい小さい蚊帳を銘々に釣つて何時しか穏な睡眠に入つた。

此處で一寸一言するが太田會社の麻園經營法は前言の如く直營と小作法の二種に分れて居る、日本農夫が直營の方に雇はるれば一日に一圓二十錢、小作をやれば收穫の二割を會社に收めるので有る、小作は一人で二町步受持つことが出来る、二町步の收穫はタロモで平均四十ピコ(百斤ピコにて)其價格内端に見積りて二十五圓で有るから諸雜費を引いても澤山に残る、尤もダウアオまで来るには船賃六十三圓外に米國の法律に依る携帶金六十圓を要し日本より出發の支度其他彼は二百圓は入るべく其上に此地へ到着後麻第一回收獲まで凡二十一ヶ月間の食料、家屋費、農具代、種子代醫藥其他雜費合せて凡そ三百圓位總計五百圓の資本を投ぜざれば二町の麻園を持ち一年、千圓の收入(第一回は五百圓)ある身分となることは不可

能であるが、日本で五百圓の資本と二年若くは三年の勞働を元入れして一年千圓の收入は到底夢想す可らざる事である、三島君が僅十年足らずで麻二萬本を有する中農となつたのを見ても如何に其農業に利益の多いかを推測し得べきである、しかも其勞働は唯伐木と草取りに過ぎないのである。

翌くれば八月八日三島氏に謝して其家を出で、一二町行くと一人の若者が馬に乗つて飛んで來た、昨夜大城氏が命じて置いた寫真機械を持って來るので有る、此邊の往來はすべて馬で、馬即ち車馬即ち下駄であるから女子も袴を穿いて馬に乗る、ボーイが買物に行く亦馬で有る、是より五騎轡を並べバゴの耕地に向



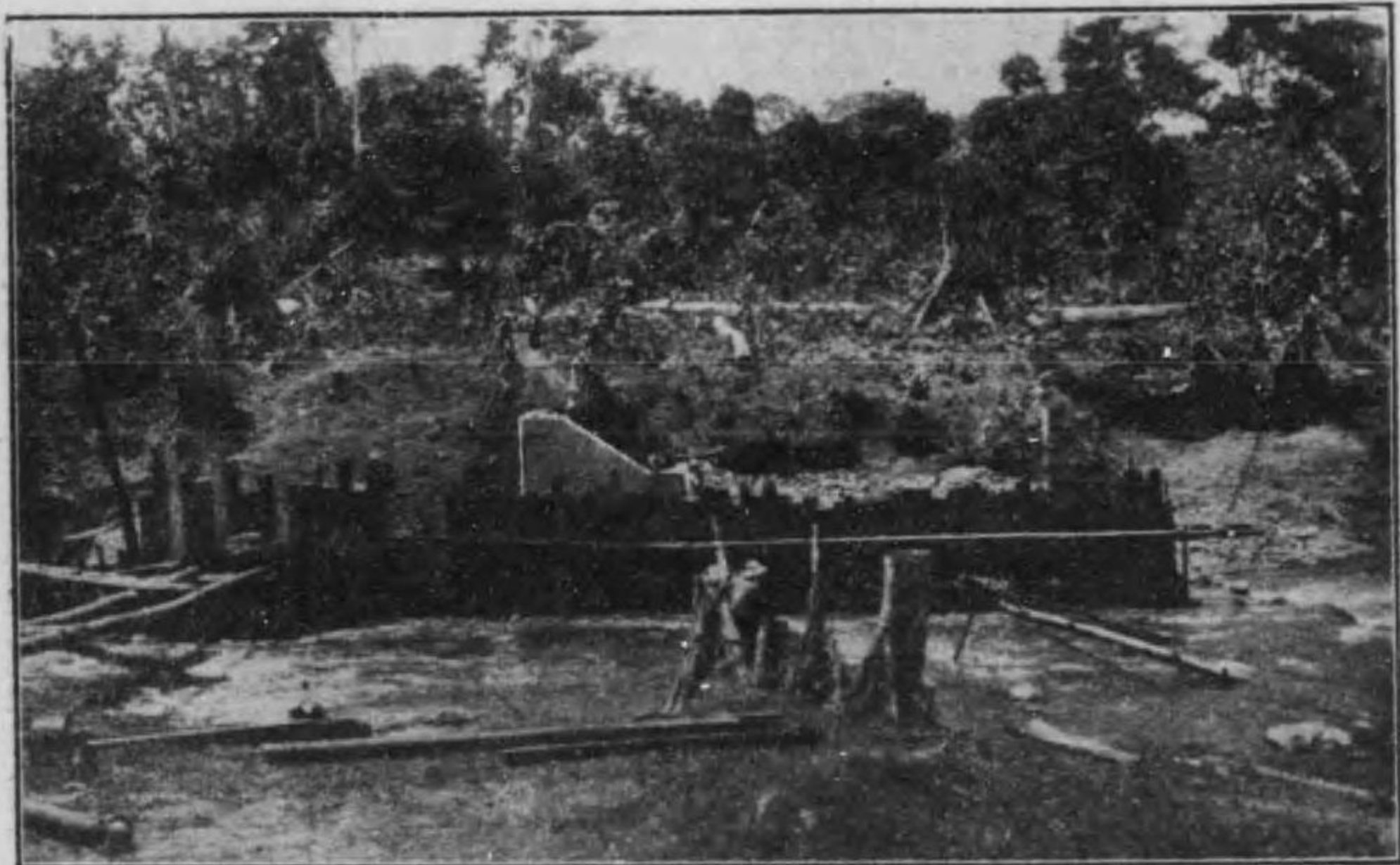
山 麻 ル タ ン ミ

ひ小作農業者の散居して居る麻園を巡り、彼處此處で麻引の作業を見た、其小作農夫の住家は隣りが遠く其間にアバカが繁つて居るから互に相望むことが出来ない、家と家とを聯絡する道路が亦甚だ細いので新來者は一寸困るで有らうと思はれる、吾々は大城君の後に尾いて馬を歩ませるのであるから、何の困難もなく此八幡知らずのやうな麻園の中を巡回し得たので有る、然し他日此等の小作者等が金を儲けて銘々家族を呼寄せて永住者となつた曉は此邊に道路が縦横に通つて見事な新農村が出来るであらう、是れより馬を早め元來た路を辿つて十一時タロモの社宅に歸り着いた、ヒラリと馬から飛下りたら十年前挫いた右足の踝を亦痛めて歩行困難午後から杖を突かねば歩行かれぬやうになつた、此田舎に來て此出來事は大に余の活動力を減殺した、此夜風荒れて浪の音高く蟲聲斷續夢屢々破る。

タロモの浦夜半の寢覺めの蟲の音は
磯打つ浪の音に浮べり

ダリヤオンを訪ふ

八月九日今日は朝から脇坂瀬戸兩君を誘ふてダリヤオンの古川氏訪問と出掛けたタロモか



部 一 の 事 工 漑 漑

らダリヤオンまで磯傳ひにも行かれるが足痛の爲太田會社の發動船ケンタッキーで行く天晴れ氣朗で遙かにアボの火山を望む、

アボの山雪と見ゆるは硫黄にて

峯より青き烟立つなり

此處海岸一帶珊瑚礁でまことに奇麗な砂濱が續いて居る、船から海底を覗くと種々の形したる白珊瑚が花の咲いたやうに見える、

ダリヤオの濱の水底春の來て

珊瑚の貝の花の眞盛り

古川氏の住居は矢張海岸の椰子林中にあつて、其傍に使用人の宿舍倉庫それから太田會社の賣店もある、此處の農園は廣さ百町歩ばかりであつて椰子及麻を植えてある、麻は目下毎月

凡そ二百擔を輸出するが、椰子は未だ商品として輸出するまでに至らぬ、此外古川氏は近頃南方ダロン附近なるキノコール・プランテーションを買入れた、其廣さは七百エーカーばかり是は未だ開墾に着手して居らぬ、氏と共に此處に渡來して其事業を助ける日本人は松本、吉武、田熊の三氏である。

古川氏の住宅は木造ニバ葺の假屋である、此家は屋根が高いので非常に涼しい全く夏知らずである、家の前面は椰子の間からサマール島を望み風景頗る佳なりである、サマール島にはモロと野生の鹿ばかり住んで居る

風渡る椰子の木の間のサマール島

鹿の住むてふモロの住むてふ

午後古川氏の案内で脇坂氏と三人又馬に跨つて耕地を一巡した、麻園は十年以上も経過したもので、何の木も根が張り木と木との間が密接し枯葉が注連繩の如く樹間にぶら下つて居るので馬上の通過頗る困難である、麻は大抵七年位で一遍株を改めるのが好いさうであるから此麻林は遠からず新しきものと植換へられるであらう、それから新しく開かれた麻畑を見せられたが、草取の勤怠により著しく成長の違うのには驚いた椰子も矢張り同様である今日

は好い實物教育を興へられた、此園にも盛に彼のコゴンが生へて居る此草は若い時其上に牧畜も出来るが少しく成長すれば其葉が堅くなつて如何ともすべからざるものである、蝗蟲でさへコゴンは食はぬさうである、此處にも大部蝗蟲の幼蟲が飛んで居る。

さばへ爲す蝗のむしは醜草の

コゴンは食はず黍の葉を食ふ

それから椰子畑を巡見する此椰子園はバチフィールド大尉の學理的に植えたものであつて、其間隔は何れも十メートル以上になつて居つて成長も頗る見事である、五年以上のものは可成り大なる實を着けて居る、併し商品としては六年までは採らないのが本當である、一番大きな實を取つて汁を吸ふて見たら甘味に乏しく酸味が勝つて居た。

巡視終つて元の家に歸り雑談して夕方に及んだところが若い人達が裸馬を引出して五人ばかり海岸で競馬をやつた、此邊に來ると自から斯う云ふ勇ましい事を娛樂とするやうになる海岸に出て見ると其處ら一面朝靨のやうな紫の花の咲く蔓草が沙上に這ひ廣がつて居る、何となく日本から遠いやうな心持がする。

打寄する白波蹴立て紫の

花咲く磯にくらべ馬する

此日午食に茄子を刻んだやうの漬物を出され、晩には又見慣れざる小さき茸を食はせられた、主人公の説明によれば漬物はオクラと云ふもの、又茸は引棄てた麻の皮に出来る茸で有るさうだ、米國人は麻屑の用途を研究して紙を造ることを勤めて居るが茸を生やして食ふなどは流石日本人の風流至極で有る。

味はオクラの茄子に麻の茸

家はニツバぞ住好かりける

ダヴァオ灣の古川君サンホアングの藤田君共に若き人の好き手本で有るから其事業の十分に成功せられんことを祈らざるを得ない、此日の訪問は七百五十日も生延びたやうな氣がした。



(氏川古はつ立に上船)ンオヤリダ

ダヴァオ縣の首府

ダヴァオ縣の首府ダヴァオはタロモから陸上二里足らず、平生は自働車も馬車も通ふが途中に橋の無い小川が有り、雨が降ると馬でも交通が出来悪くなる、市街はホロとサンゴアングの中間位の田舎町で有つて町と云ふよりは村と云ふ方が適當で有るが縣の首府だけに政廳、憲兵屯所、學校、病院、寺院、無線電信所クラブなどが有り、市外十數町のサンタアナには、棧橋を有する小港が有つて南島巡航の汽般は必ず此處に寄港する、日本人は市内に凡百人ばかり又、それから北イホへ掛け日本人の農業會社が十七八も有る、ダヴァオ市には日本人會が有つて、柳原隆人なる人、其世話を焼き無給の領事を働いて居る日本人の宿屋が二軒醫師は即ち彼の鈴木君が開業して居る。

ダヴァオ縣知事イ・イ・カウシング氏はセプーの人で、カーベントー氏の信用厚き良二千石で有る、余等の來るを俟ち先日態々手紙を寄越されたので、八月十日先づ氏に敬意を表すべく、而して序でにダヴァオ町を一見すべく出掛けた、生憎陸は川留だからケンタッキーで海から行く、ダヴァオとタロモの間に小さな出崎が有つて其蔭に鈴木ドクトルの御獵場と

云ふ名所が有る、一時間も銃を構へて木の下に居と鳩の三四十羽は大丈夫だと云ふことで有る、此出崎のところは一寸風景が面白いが浪は中々速い、今朝は九時にタロモを出て、十時にダヴァオの川口に來た、ボートに乗換へて淺瀬を漕ぎ上るに逆潮で中々進まない、其中陸から大聲に魚をやらうかと叫ぶ者が有る、モロかと思れば日本語を使ふ、何やら水中を引摺りながら船に近づき一匹の大鰻を舟の中に投入れた、舟子が錢を取れと言つたら手を揮りながら立去つた、紛れも無い日本の漁夫が斯んな所まで來て稼いで居る函根、日光、輕井澤あたりに避暑中の南進論者等はよも御存知有るまいと思ふと愉快で堪らぬ。

其内にボートはやつと河口を上つてダヴァオ市の一端に着いた、天然の岸から差出たタリセーの木を力に陸に這ひ上げれば色の淺黒い眼のギョロギ



(一キツタンケは船)望遠オアウダ

ヨロした男が白い洋服を着て立つて居る同行の大城君が紹介して是は日本人會長柳原君で有ると言つた、成程好く見れば日本人で有る、實は此柳原君は余と同國豊後の竹田から出た荒削りの氣さく人で、ダヴァオなどには眺向きに出來てる、余が一寸其令兄を知つて居るのも奇縁で有る、其所で柳原君も頗る満足で好く斯んな處まで來て呉たと云ふので、余が爲めに大に周旋せらるゝ、先第一に知事が待つてるからと言ふので早速縣廳に推參する、知事カウシング氏は年齒猶壯身の丈五尺八九寸も有らうと云ふ大兵だが温乎玉の如き性質で春風面を拂ふ如き應接振り其補佐役たる書記官バスクワル氏は俊爽の青年官吏である、福岡縣士族某の子で早稻田大學卒業と云つたやうな風采、是も身の丈の高きことカウシング氏に劣らず、然も打揃ふて英語を好くせらるゝのは何より結構で有る、知事は早速廳内を案内して、余を米人及比島人の諸官吏に紹介し、バスクワル氏は其の主宰するテニスクラブを代表して余に滞在中、テニスクラブの使用權を與へられた、是等は一寸した事だが中々氣の利いた接待で足痛の拙者更に大に痛み入つた次第で有る、それから知事は自宅へ同伴しやうと云ふことで有つたが、請ふて其前に憲兵隊を訪問することにした。

何故憲兵隊を訪ねるかと言ふに話を少し前に戻し、余等がイスラスでマリタに着いた時で

有つた、滅法界腹の大きな米國軍人が一人銃を携へて乗込で來た、マリタを出た後頻りに甲板で銃聲が聞えるから上つて見ると、此軍人先生其五十インチも有うと云ふ腹帯から彈丸を抜き取つては海中の浮流物を射撃する、ヒョイと顔を見ると書に書いたナポレオン其儘で腹の大きいところも好く似て居る、話して見ると愉快な人物で世界到る處足跡を印して居る、聞いて見れば、ダヴァオ憲兵隊の次席で中尉マツコーネルと云ふのださうだが、余は竊にこれをナポレオンと呼んだ、此ナポレオン訪問の約を果さん爲余は知事と共に憲兵屯所に行つて見たのであるが、屯所は假屋住居でニバ茸の家根の破れた下に中尉が配所のナポレオン然と控へて居るのを見た時は思はず吹出した、中尉は記念だと言つて余にモロの楯二枚を呉れたが、其一枚は彈丸貫通の痕ある凄いもので有つた。

それより知事は余と柳原氏とを自宅に誘ふてセブーから來遊中の令弟や來合せたモロの會長に紹介し暫く談話をしたが、余の足を痛めたるを見て所藏のバナナの杖とバゴボ人使用の檳榔子喫用の石灰入二個を贈られた、知事の官邸を辭して市中を通り抜け柳原君の住宅に至り、其處で瀬戸君大城君及鈴木ドクトルと落合ふて愉快なる午食を喫した、柳原氏の家は市的一端にあつて廣い庭に椰子樹が繁つて極めて涼しい處である、愛藏の風蘭が雪白の花を

附けた條枝を抽出し檐先きに

妍を競ふて居る、此處に來れば如何にも熱帶の風光で随分遠く故郷を離れた氣持がする、タヴァオの町は人家二百餘り椰子、マンゴ、仙人掌、カラチヨナなどが茂つて居り

仙人掌は濃紅カラチヨチ（墓

所花）は雪白の花を着けて居る、寺は市の真中に在て可成り大きい、數年前憲兵隊の一部が動亂を企てた時、バチフヒールト大尉、柳原君など其中に籠つて防戦したところださうで白壁に彈痕が残つて居る、食後バチフヒールト大尉を訪ふて、其有名なるビソの農園見物を約束したら大尉も余の足に同情してカマゴンの杖を記念として贈られた、今日はほんの知事に會はん爲めの來遊で有るから人々に伴はれ二本のステッキを突いてタロモに歸つた。

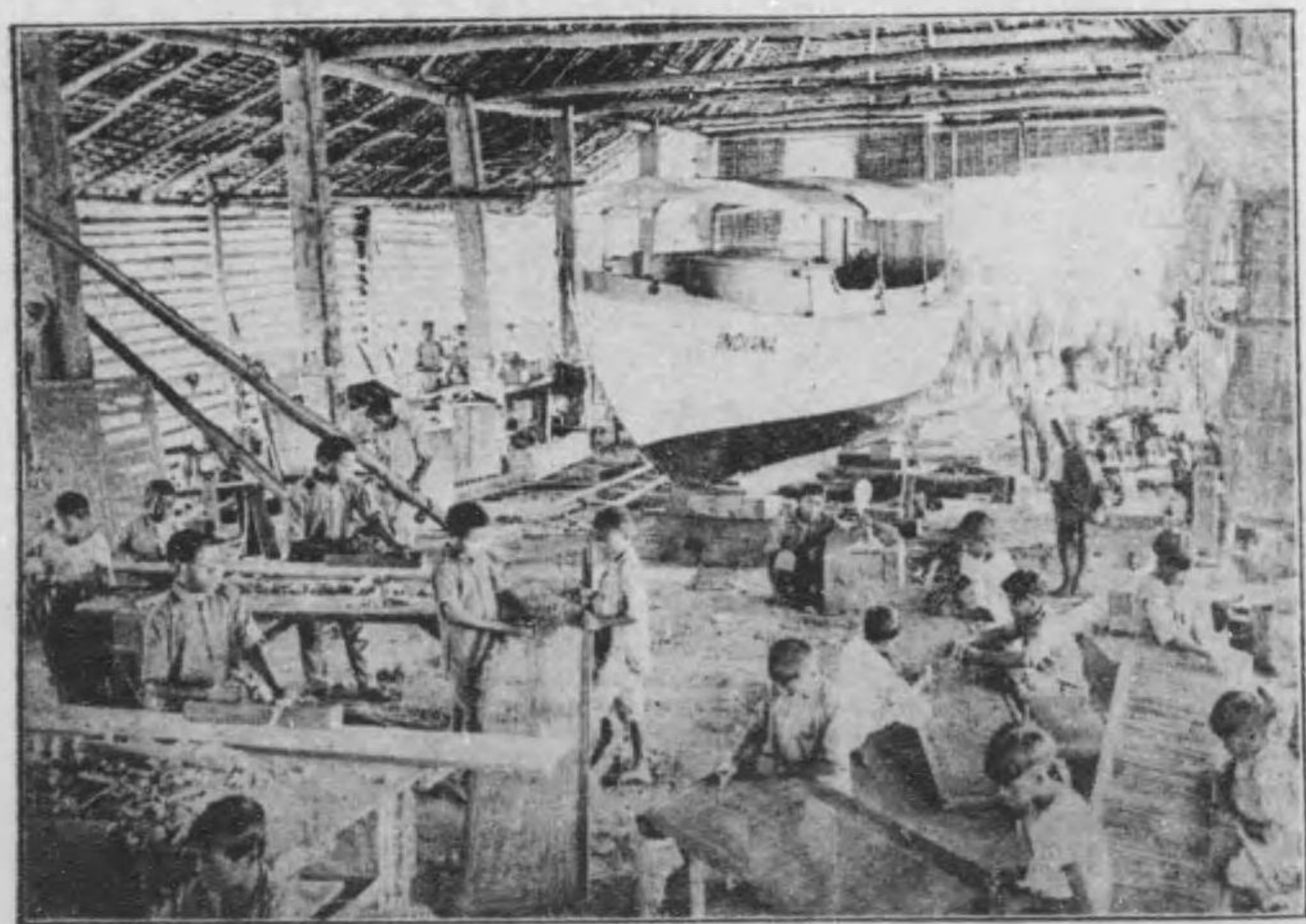


長會舊のオアウダ

ダウアオ再遊

八月十一日夜はイスラス・フィリピナスがサンボアంగాに向けて歸航するので、脇坂君瀬戸君原君は之に乗つて出發する、夜九時此等の諸氏を送つて棧橋に立つて居ると、知事カウシング氏の使が来て、氏が余の爲めに計畫したダウアオ及び灣内一周の日程を贈られた、それに據ると十二日朝七時よりダウアオ各學校見物、十三日より知事同伴タグム、イホ、ピソ等の耕地や學校を見物することになつて居る、其所で即ち翌十八日朝ダウアオから宿り込みの柳原鈴木兩氏及諸隈氏と共にケンタツキーで出發した、所が途中機關に故障が出来て甚しく手間取り、サンタ・アンナの棧橋に着いたときは最早十一時であつた、生憎又其棧橋の傍に一輛の馬車も居らず心のみ頻に急げどもダバオに行くことが出来ぬ、サンタ・アンナにはフェルナンデス會社の麻倉が二軒、支那人の商店が一軒、土人の住居が一軒あるばかりで何様することも出来ない、加之フェルナンデス會社の電話まで壊れて居つて、ダウアオと話も出来ぬ、やつと土人の一人を徵發し馬を飛ばしてダウアオまで行き自働車を呼んで来いと言付けたら直に馬上で飛出したのは好いが、暫くすると自働車の代りに馬車を備ふて来た、一同顔

をしかめながら其馬車に乗つてダウアオに到着したのは將に十二時ならんとする時であつた、幸に途中で知事に行逢つたから遅刻の次第を述べて詫を言つたが不味い事夥しい、然し寛大なる知事は却て一同の苦心を察し學校見物は他日に譲るべしと言ふて直に余を俱樂部に導いた、行つて見れば何ぞ料らん、余の爲の午餐會で出席者は、憲兵中尉マツコーネル、財務部長ヒウイット、視學官クロウ、副視學官スタントン、(以上米人) 醫官ピラビセシオ、當市助役ジョーベン、土木技師フィップ(米人)職工學校教員カーソン(瑞西人)の諸氏と日本人會長柳原君とであつた、此席でカーソン氏の好



ダウアオ徒弟學校

意に依り午後蕃人の兒童を教育する徒弟學校を視ることになつて、一時半に出掛けた。

徒弟學校 其學校は元の兵舎で極く粗末なるニバ葺の小屋であるが、其内は可なり廣く半は土間で半は檳榔樹を編んだ簀の床になつて居る、在學兒童は其數五十人年齢は十二歳から十六歳位までと彼等の自ら造つた籐寢臺に寢起して居る、服装は青色の木綿の筒袖股引で、是も自ら洗濯する、今日は恰度洗濯日で寢臺用のシャツ衣服其他の洗濯物を教員の檢閲に供して居る、此學校の教授科目は小學校三年までの學課と木工、土工、造船、鐵工並に極く簡單なる農業で、其傍ら炊事をも教へ、體操は兵式操練をやる、是は軍人に其教授を委嘱してある、學校の經費は一年凡そ四千圓である、子供は何れも顔色の好い活潑な男兒で我國の兒童に克く似て居る、カーソン氏曰く從來此蕃民間に皮膚病があつて兒童は皆それに冒されて居つたが、本校に兒童を收容した後は生徒間には其皮膚病を一掃することが出来たと、それからカーソン氏の案内で木工鐵工等の器具を一覽の後に後方の庭先に出ると、其處が彼のダザアオ川の支流で造船の練習所になつて居る、恰も其處に一隻の小船が出来上つて居た、其船はモートル船で大き十二噸船材は比律賓のイホといふ堅い木を用ひてある、之を造るに二人の大工と十五人の兒童が三ヶ月を要したとのことである、兒童の勞働は半日づつ、船名はイン



花のソリソリワ

デアナと名づけ既に船側に書かれてある、此教師カーソン氏は瑞西人であつて多藝多能百般の工學に通じて居る、病氣保養の爲めにミンダナオに来て圖らず此學校に聘せられ遂に長く教鞭を執ることになつたものださうで非常の教育熱心家である、従つて兒童の進歩は他の學校に比して著しく速い、蕃人と云へば馬鹿にするが之を教育すれば斯う云ふ立派な成績を顯はす、教育は實に荒蕪地を變じて沃田となすものである。

此學校を觀終つた後知事に伴はれてエバンデリスト教會附屬の病院を一覽した、寢臺の數凡そ三十個上等室が三つ、傳染病室も出來て居る、院長ドクトル・ケース氏が色々説明をして呉れたが、日本人の病人が六人も厄介になつて居た、此地方で病氣の主なるは脚氣、赤痢、窒扶斯、マラリヤださうで吾々の巡視中にも一人の熱性病者が

入院した、知事は患者中の一老人の顔面に繻帯せる者を指し、彼はマンダヤ人で二人で二人の敵と戦ひ味方の一人は殺され自分はアノ通り負傷したにも拘はらず遂に敵二人を殺した勇士であると言つた、病院を出るとバスクワル氏が来て自働車に乗り市外に出で、走ることに五分間ばかり無線電信局の在る所に行つた、ミンダナオにはまだ電線が無い、急要の通信は總て無線電信に依る、サンボアンガと此所との間も電信料は中々高く十語一ペソである、電信局の傍に日本人の墓地があつた、それから市中を巡つてサンタ・アンナの棧橋に行きフェルナンデス會社の倉庫に這入り麻選りの作業を覗又市中に取つて返し、市長リサダ氏を訪ふた、主人の出迎ふるのを見れば足痛で余と同じやうに杖を曳いて居つたのは可笑しかつた、此家は木造の建築で中央に廣い客室がある、其擔先を見ると珍しい風蘭が釣してある、是は土語ワリン・ワリンと云ふ種類であつて花は五瓣、形は恰度蝶が上下から枝端に止つたやうに見える茶と紫の花は珍らしくないが此ワリンワリンの花は上三瓣純白、下二瓣が暗紅色であつた、ワリンワリン又ブンダサンダリアナと稱して土人は非常に珍重する、柳原氏の風蘭は土語サロバンと云ふ物で左程珍種では無い、市長訪問の後今度は縣廳の横手に行つてテニス の仕合を觀た、會長バスクワルの腕前は中々牙へたもので有る、三神大學長も一步を譲るべく

見受けた。

此夜は又マツコーネル中尉の招待に依つて柳原氏と再び俱樂部に行つた、今度は知事カウシング、技師フィリップス、少尉レオナルドなどの諸君が同席で一同胸襟を開いて快談せられ愉快至極暫く身の天南に在るを忘れた、今夜はドクトル鈴木君の宅に泊る、堂々たる氏の宅の前は土人の汚ないニバ家で宇喜多中納言八丈島の閑居も斯くやと思はるゝ有様で有つた。

灣内巡覽

翌くれば八月十三日知事カウシング氏の好意に依り、病院附のギヤソリンボートに知事と同乗し灣内を一週する順序で有る同行者はバスクワル氏、諸隈氏、柳原氏、マコーネル中尉も一所に行つて、柳原



マダンヤ人の武裝

君と射撃の競争をやらうと言ふので柳原君は銃丸五百發を用意し、朝六時に余及び諸隈氏と連立ち川口に行つた、知事とバスクワル氏は同時に來着したが中尉は急に差支が出來て後に残つた、バチフヒールド大尉は製氷工場を持て居るので昨夜特に此一行の爲に大なる氷塊を三個製造して贈られた、知事は早速其持たせた數多のフラスコを中に浸け込んだ、三日間の旅で有るから用意が中々入る、支度いよ／＼出來上つて川口を解纜したのは午前八時朝靄既に晴れて四望廣濶アボの山はマツキンレー、ルーズウエルトを率ゐて遙に一行を見送つて居る、暫して船はサマル島と本土との間の狭い處に來た、陸の方には土人の椰子園サマルの岸にはモロの小なる椰子園がある、海峡にはマングローブの大樹が水中から生へて居る、風景畫の如しとは此邊である、仰で空を見ると比律賓の大鷲が羽を廣げて船上を回翔しつゝある、柳原氏は其ウインチェターを取出して五六發威しの丸を撃放す、實は中つても好いのである、十時四十分に早やタグムの川に來た、川口左岸に熱帯に稀有な枯木の森がある、森は大蝙蝠の巢家、彼等が樹の枝に鈴生りにぶら下るので木が段々に枯死するのである、此邊は住民の極めて少い處で山も川も太古の儘の姿で有る、川の兩岸は樹木が密生し、水際にはマングローブ、ニバ椰子などが其幹根を張つて居る、川の幅は半町ばかり迂曲屈折して趣頗る



(氏兩のルヲクバ、ゲシウカはつ立に後の槍)人ヤダンマのムクダ

深い、暫くして川の右岸に小さな麻島が見える、知事の言に此川筋から輸出せらるゝ麻が一ヶ月凡そ百五十ピクルばかりも有ると云ふ又暫く上ると兩岸共其水際に針を植ゑたやうな七八寸ばかりの葉の無い木が密生して居る、是はカルチョーと云ふて其根がキルクになる又剃刀の刃を磨ぐに適すると云ふ、斯くして上ると一時間餘りやうやく一個の小村に着いた、此島が即ちタグムで家屋が六七軒學校が一軒ある、日本人と支那人の商店が各一つあるのは驚くべしである、難かしい川岸を這上つて學校に行く。

蕃童の競走　學校は例の通りニバ葺で床は檳榔樹の實である、此學校は生徒四十四人、中女子が十一人、年齢は四歳から二十歳まで課程は小學

の一年から三年まで傍ら簡易の農業も教へる、教員は唯一人である此處へ来る兒童は皆モロマンダヤ等の子供で遠方の者は歩いて四時間程のところからやつて来る、故に多くは此村に泊つて居つて土曜日日曜日の休暇の間家へ歸る、即ち金曜日午前の授業が済み次第山に歸つて月曜日の朝又出掛けて来る、此處でも頻に文明的の遊戯を奨励して、兒童に屋内ベイスポールをやらせる、此邊の蕃兒は中々活潑で先頃ダヴァオに催された運動會で優勝者になつたさうだ、此學校で休憩中二人の蠻人が刀を帯び鎗を擔いで來た、是即ちマンダヤ人で此處から五哩ばかり隔てたるトガナイ村から買物に來たのである、其一人は昨日ダヴァオの病院で見た勇士の息男であつた、午後一時學校の農園を觀やうとして出掛くと、土耳其帽を被つた男が跳足で裸馬に乗つて來た、是はモロ人で郡長サレ君と呼ぶ、檳榔子の爲に齒を眞黒にし居る、乃ちサレ君を先に立て、農園に向つたが、途中に二人の老モロが禮服を着けて路傍に立つて知事を迎へて居た、風采頗る上品な老人で未開人とは受取れなかつた、農園のある所はサレ君の住宅の後ろである、郡長の家は矢張りニバ葺であつて二軒になつてゐる、其一是住宅で、一方は商店に貸してある、借家人は矢張り日本人と支那人とである、此家も矢張り床は無く檳榔樹を割つた粗い簀の子下に鶏が飼つてあるのが能く見える、サレ郡長には三人の

正妻がある、第一の夫人頻に周旋し余の爲に敷物を敷きなどし持なしたが其顔は丸で日本人である、店の端に子供を抱いて居つたのが第二か第三の夫人であつたらう、農園に行つて見れば、學校新築の工事中で畑には里芋とバナナップと豆とが植ゑて有た、それから復タグムに引返して兒童のベイスポールと徒歩競争とを見た、競争一回の後余は携へたペンナイフを取出し賞品として寄附したら知事は銀貨を出して二等賞とし再び競争を所望した、兒童はベイスポールと一回の競走に疲れて餘り好まなかつたが父兄達が頻りに促がし五十碼の競走をやらせた、一番速い子供が十五秒ばかりで決勝點に入り余のナイフを得た。

斯んな事で二時間ほどタグムに費やし三時過船に戻つて川を下つたが今度は一時間で川口に達した、此邊は毎日午後風が出るのが習で此時既に浪が大部高まつて居た、イホに行くには波を縦に乘ることになり小舟では危険であるからイホを抜きにし、直に對岸に横斷してタグナナンの農園を訪問するとにした、タグナナンは曩にイヌラスに同船のシモンズ氏の管理するところである、灣を眞直に横斷するに風の強い爲船は屢々潮を被つて一同衣服を濡し六時頃無事タグナナンに到着した。



タグナナンの月見

タグナナンは灣の東岸斜にサマル島の北端に對する一小曲浦で南に小岬北に小島其間に谿流の海に注ぐものが有る、海岸は例の如く珊瑚礁で美しく波打際から椰子の樹が林を爲して居る、海岸に近く倉庫及賣店があつて其後方に住宅と食堂などが軒を異にして建てられて居る、清潔にして愛らしき處である、今日は出し抜けの訪問でシモンズ氏を驚かしたが氣轉の利いた細君は直に吾々の爲に晩食を用意し美味い飯を饗せられた、食後打連れて屋外に出れば今夜は恰ど十五夜で皎々たる満月が椰子樹上に現れ晴光晝の如くで有る、比律賓に來て以來の満月を二度とも椰子林の中で見るのも奇縁で有る、折から聞慣れ

ぬ蟲の聲が聞える、ガラん／＼ギリン／＼カラん／＼コロん／＼と恰も木琴を敲くやうである、知事は説明して是はガンギンと云ふ甲蟲の類で比律賓の童話にガンギンと獅子の戦ふ話がある、カンギンは總ての羽蟲を味方とし、獅子は總ての毛獸を味方として戦つたが終にガンギンが打勝つたと云ふことであると語る、成程其鳴聲は誠に勇ましく獅子も恐れさうである、ガンギンの外に蛙も鳴けば蟋蟀の聲も聞える、芝生の上で天然の音楽は面白い、加之庭中にはサンバギタ、バラダイスなどの花が咲いて居ると見えて其香氣が空中に漂ふて居る、

サンバギタの香る芝生に團居して

月をし見ればガンギンの鳴く

熱帯の月夜は中々風流で有る、今夜知事、バスクワル氏余の三人はシモンズ氏の食堂に寝ね柳原諸隈兩氏は船に歸つて一夜を明した。

ビホコの危険

翌十四日蚤起バスクワル氏と共に汀に出れば水は板の如く静で手を浸せば暖かい、バスクワル氏は衣を脱して飛込み余は海を其儘盟にして顔を洗ふ、遙に船中の兩君を呼べば返事の

代りに柳原君の鐵砲が鳴る、愉快極まる景色で有る、今日は此處の麻園を一覽する筈で有るが馬が一頭しか居らぬ、足痛の余を憫む主人公の厚意辭せずしてヒラリと乗ればこは如何に手綱は細引大の麻繩なり、佐野の源左衛門尉常世がなれる果の如くなれどもよれによれたる脚には優つて居ると獨笑ふ、纏て打出づるに麻園までは二哩ばかり其途上は左右とも灌木の林暫くして天を摩するが如き喬木の數本相並ぶところに來たキルの森と云ふ、初め當園の支配人たりしギル氏開墾の爲喬木を伐倒し又は燒拂つたが此邊の樹木は餘り見事で伐るに忍びぬと云ふて残したものださうな偕々優しい事では有る、此邊にはブヨンと云ふ葉の白い樹がある、熱帯特有の樹で遠く見ると花のやうだ、其他グッタベルチャやビホコが多い、ビホコは籐の事である總じて熱帯の木には多く針があるが籐は滿身針を植ゑ其葉の莖にも亦澤山の逆針が生えて居る、余は其恐ろしい籐が頭上に葉を垂して居るのを知らず繩手綱搔くりて進み行くと何やら麥藁帽を引摺んで宙に吊上るものがある、是は都の羅生門でも無さに綱と間違へるは何奴かとより仰いで見ると蔓の枝だ、此方も強者取られじと帽子に手を掛け二三度引合ふ中にバク／＼と音がして頂邊を剝ぎ取られた、外に代りも無いから其儘それを被つて行くなどは中々氣樂である。

此麻園は新舊二區あり其の間にはコゴン原などがあつて如何にも山中の趣が深い、麻園にも大分草が生えて居る、勞働者が少い爲め十分の手入をすることが出来ないことがわかる、此麻園で見物は麻引機械で有る、麻引機械は中々澤山出來て居るが、未だ嘗て一つも實用に供せられたものはない、此機械は此會社の舊支配人の考案に成り、其趣向は汽船のウキンチのやうな仕掛であつて人力の代りに發動機力を用ふるのである、今朝見たのは發動機一個と機械二臺で、其機械には各二枚の鐵の齒があり、一個の齒に蕃童が二人づゝ付き麻をさし込んで居る、一人一日の工程凡一ピクルで賃銀一圓五十錢を支拂ふとは好い



(藤) コ ホ ビ

仕事である、蕃童はマンサカで長髪黒齒帯刀の姿平家の公達を偲はしめる、其名を聞と一人がカートロド、他の一人がアノロドとは丸で電氣のやうな連中だ。

機械を見終つて歸途に就き途中で新設の小學校を観た、小學校と云ふてもほんの堀立小屋でタッタ一室、生徒の數五十一人、本日出席者二十一人で中に三人の女兒が居た、此學校は前週の火曜日に開校したのであつて土人の教員が英語の初歩を教へて居る。

シモンス氏の支配する會社はモロ改良及商業會社と云ふて千九百七年の創立、株主は多く警察官で資本五萬圓シモンス氏も元はマニラの警察官である。

ピソの椰子園

シモンス氏の厚意を謝してタグナ、ンを十一時に出發し午後二時にピソに着いた、ピソは即ち彼のパチフィールド大尉の農園で椰子の數六萬本規模頗る雄大である、港は一小河口の遠淺で船を近づけることが出来ない、玩具のやうなボートで代る／＼上陸し河口に近い大尉の家を訪ふた、此處は灣内でも一番古い耕地であるから樹木茂り林中に數軒の家屋が散在して居る、大尉の家も亦例の檳榔の床ニバの屋根であるが大きくて寛くりしたものである、余

等の到着した時生憎大尉は牧場巡回中であつた、暫く休息の後二哩あまりを隔てたる牧場に向つて出發した、ダヴァオ灣の東海岸は西海岸と違ひ山が少し遠い、山麓まで直徑凡そ三哩ばかりもあり、其間は普通の平地である但し砂地で水氣が少い、大尉の家の後面は既に椰子林で其樹の中には随分澤山の實が生つて居るものがある、樹齡は最古八年位で新しいものは四年位である、雨餘で道路の悪い所を辛じて二哩ばかり歩み大尉所有の製粉所に達した、此處は馬糧の玉蜀黍を粉にするところである、傍に倉庫がある、折柄天曇つて驟雨サツト降出した、雨を倉庫の軒下に避け柳原氏は例の銃を取り頻に小鳥を射撃して居ると、忽ち背後に叫ぶ者がある「此處に於て銃獵する奴は罰金廿五ペソに處す」と怒鳴る、振返つて見れば老大尉で吾等の來るを待兼ねて牧場より歸り來つたのである、大尉は直に其乗馬から飛下り余を其馬に乗せあとの奴は達者だから歩行けと言ひつゝ先に立つて牧場に案内する、其途中も皆椰子林である、林中牧牛が二三十頭徘徊して居る、暫く行くと新しい椰子園で凡そ八千本ばかり植えてある、其椰子の間にはカモテ(甘藷)が蔓つて居る大尉はところ／＼黄變せる椰子を指しカモテを間植したは大失策、彼奴椰子の肥料を吸取つて此體たらくと舌打した、此椰子林の真中に元の支配人のハーデンチ翁が卒中で仆れた古跡がある、但し古跡と云ふても地



(氏原柳、主園、事知グンシウカ、者著、氏隈諸りよ右)園子椰氏バ

が少し凹んでるばかり、此耕地の起りは右のハー
 デンジ翁がアルマシガ買集の爲めに往來したのが
 始りて段々椰子の會社を起すやうになつたのださ
 うだ、蕃地の事業は總て斯う云ふとから起る。
 牛の牧場は大草原で練兵場のやうだ、其一端に
 牛飼の家と牛小屋がある、此處で暫く牛の歸るの
 を待つて居つたが容易に歸らぬ大尉憤然として余
 の馬を取戻し一鞭あて、雲を霞と何れへか驅去つ
 たが、暫くして駈戻り畜生々々一匹も見えぬ遅く
 なるから歸らうと一同打伴れて歸路に就き日暮れ
 て檳榔軒に到着した、今晚は大尉の御待儲で種々
 の御馳走があつたが殊に老夫人が遙々ダヂアオか
 ら吾々の爲に送り來されたカステラに對しては頂
 邊の無い帽子を取らざるを得無かつた。

翌朝起き出れば非常の冷氣華氏の七十六度になつて居る、熱帯で此温度は意外中の意外で
 有る、食後大尉の倉庫で初めてアルマシガを一見した、矢張り樹脂で新西蘭のカウリゴムの
 やうなものであるが、色は頗る白い但し是は樹幹より取つたので、是が土中に入つて暫くす
 ると飴色に變ずるとの事である、用途はワニスの原料である。

サマル島一周

八月十五日今日は西岸のバゴまで行かうと云ふので午前七時にピンを出てサマル島の南角
 を指した、朝風は常例で海は極めて静である、サマル島から白雲一抹海上に棚引き曇らんと
 して曇らず、水面には海豚群遊び飛魚飛ぶ、柳原氏例の如く海豚に向けて威しの丸を放つ、
 時に誤て中ることもあつた、

海豚行くサマルの浦の朝風に

海面近き雲の一むら

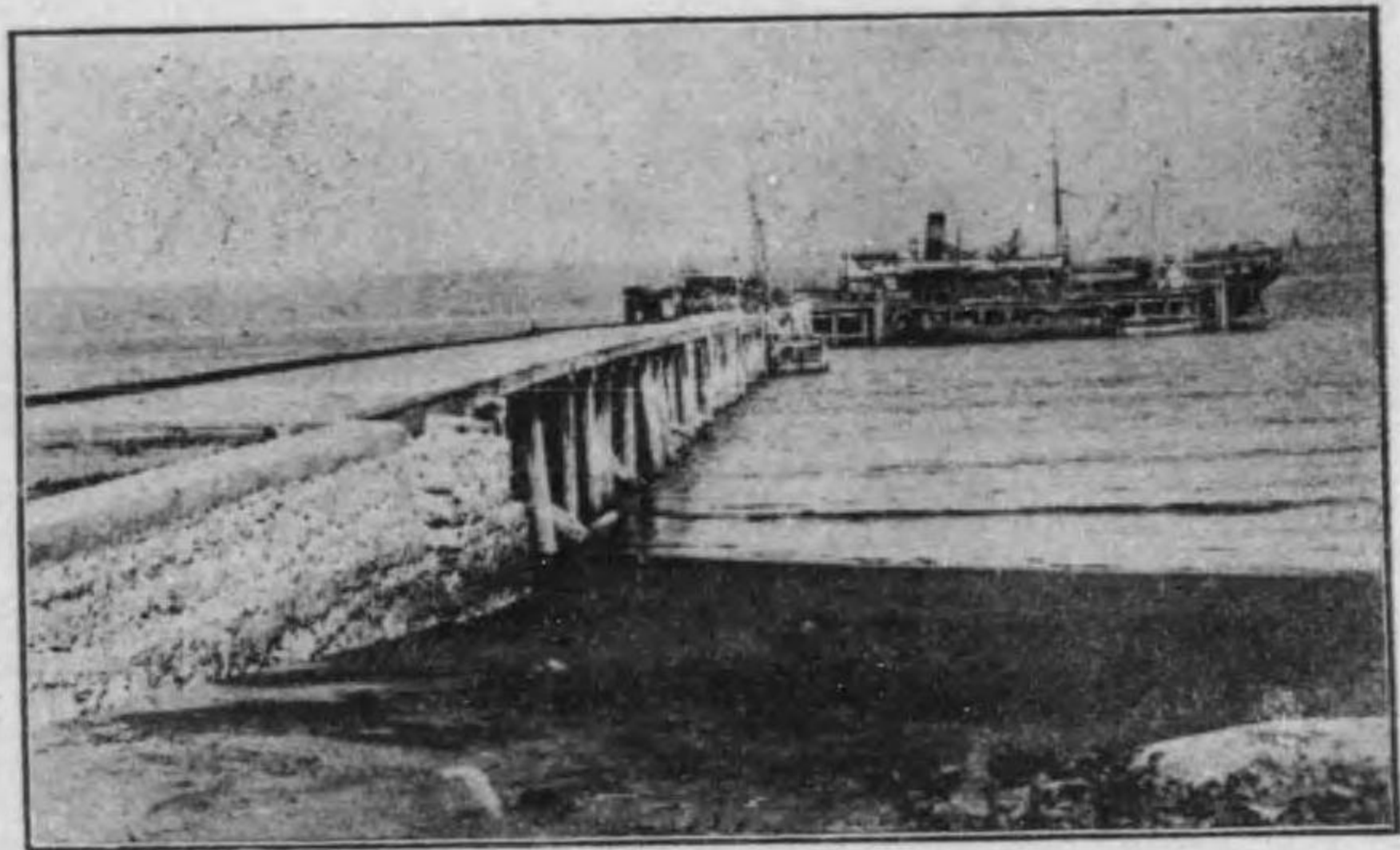
飛魚の飛びたる跡の暫くは

消えぬえやらぬ今朝の海づら

バスクワル氏は船長をしようと云ふて海圖を開き余のコムバスを以て頻に測量して自ら舵を取つて船を走らしたが、此新船長中々航海術に巧みで、其豫定せる如く零時十五分にバゴに着いた、是でとうくサマル島をぐるりと一周したことになる。

イニゴ氏の歓迎

バゴの耕地は珍らしくも土人イニゴ氏の經營で有る、船着より馬上五分ばかりイニゴ氏の宅に達する、屋敷の入口に小川があつて橋の上屋に歓迎と云ふ文字が英語で現してある、能く視れば白い布に麻の葉を張付けたもので面白い意匠である、斯の如く所々で我等一行を優待するのは無論知事同行の爲で有る、知事は毎月二十日間は部内の巡回に費やすので深く縣民の心を得て居る、勉めたりと云ふべしで有る、イニゴ氏の住宅は頗る立派であるが、此村は概して家屋が整ふて居る、此頃は恰も祭禮で氏の親族知己の人々も集つて居る、ダヴァオから土人紳士キピラン君が態々出張つて居て大に我一行を歓迎せられた、此處で比律賓風の晝食を饗せられイニゴ令政にも紹介せられた、食後に一同打連れて同氏の麻園を視た、麻園は大低同一であるから其狀況は略す、其農園の麻引場で、カウシング知事や余は代るく引



サタンアンの棧橋

き方を試みたが素人が引けば三分の一の麻も取れず廢物が澤山出来る其呼吸が機械では出来ないので手引しが矢張り到る處勝を占めてる譯である。

先刻海岸から上陸すると間もなくダヴァオから使が來て官船ミンダナオが御用で來着し、余を乗せて歸るため我一行の歸着を待てる、而して其出帆時刻は午後八時と定めてあると云ふことで有つた、其處で早々にイニゴ氏方を辭して歸途に上りタロモの棧橋に一寸立寄つて諸隈氏に分れ、大城氏其他の人々に忙しく暇乞ひしダヴァオに歸着したのは既に六時で有つた、俱樂部に行て見るとサンボアングからキャメロン氏及氏と同姓の技師キャメロン氏が到着して居つた、船は對岸に行つて未だ歸つて居ない、厚く謝して知事とバスクワル氏に分れ柳原氏に歸つて旅装を脱し一浴して心身復快然となる、十一時過ぎキャメロン氏から自動車を通はされ、直に之に乗

つてサンタアンナの棧橋に行き官船ミンダナオ中の客となつた、柳原氏は此處まで余を見送られた、さぞ草臥た事であつたらう。

サラングニの小悲劇

八月十六日朝船は復びサラングニ灣に入つて此度はグランの棧橋に着いた、此處は便利な處で棧橋に船を着けるのに直に陸地に衝突する程船を進める、棧橋は中々長くて大きい、陸上には家屋が點々と見える、此處もアルマシガ、ビヤオなどの輸出港に過ぎない。

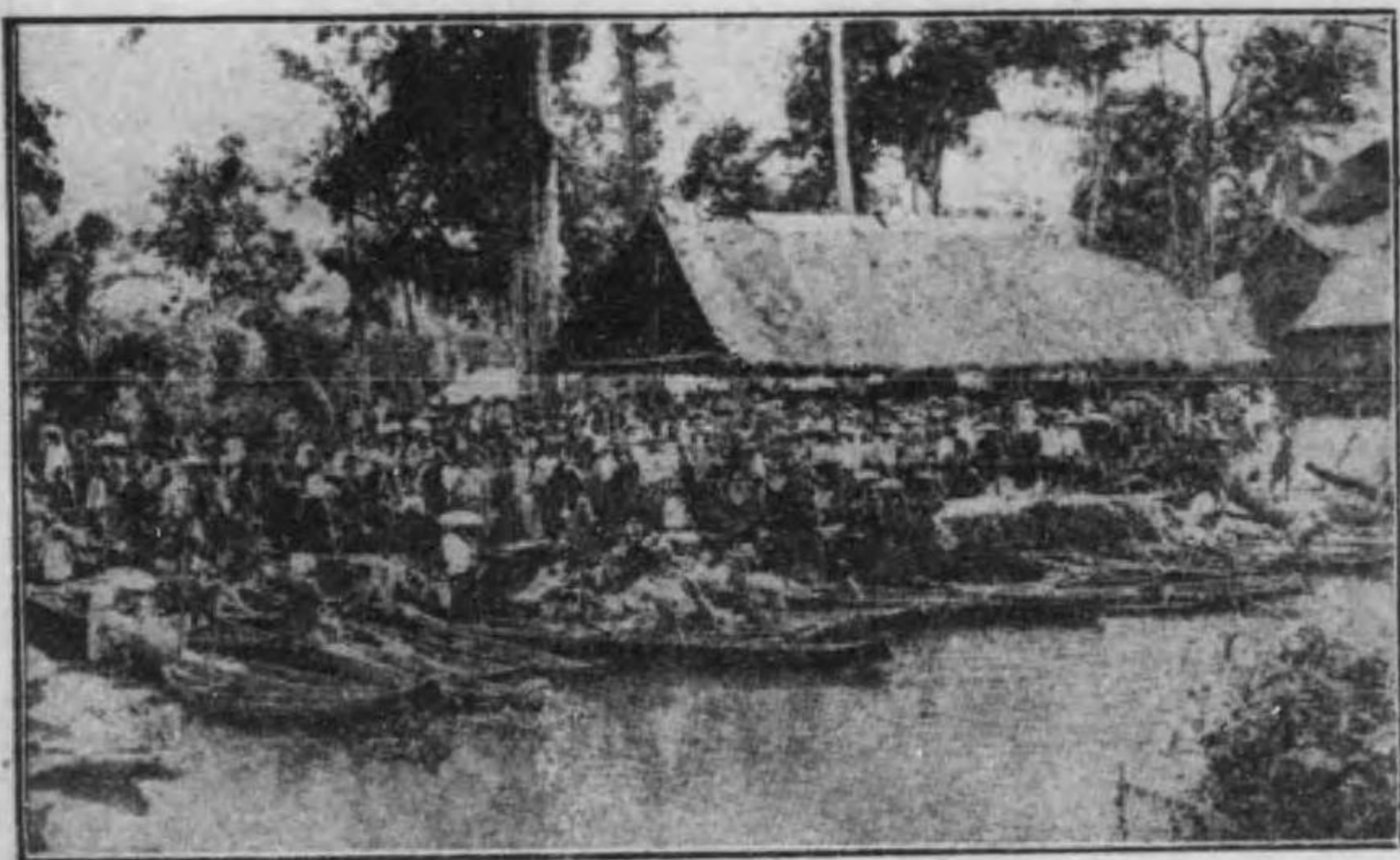
暫くすると一人の上品な土人夫妻が男女三人の兒童を連れて乗船した、後から一人の土人紳士がやつて来て其子供を渡せと云ふ、果は三人の憲兵を連れて来て子供を渡さねば船を出させぬと威嚇しキメロン氏の裁判でとう／＼一人の女の子を連れて揚々立去つたから何事かと聞て見ると、夫妻は官醫ビラール氏及令閨で此處の在勤が濟んで他へ轉任の序で其愛するモロの兒童三人にサンボアングと云ふ都會を見物させてやらうと云ふて連れて來た、ところが學校の教員狭量にも之れを遮ぎり、子供に貸した本を返却せぬから出發させぬと云ふて邪魔したのでさうな、ビラール氏は本は慥に返させたと云ひ教員は受取らぬと云ふ、遂に一人の

子供が引戻されたは、大方教員の顔を立たしたので有らう、其一人の女兒が友達に別れシク／＼泣き乍ら船を去つた時は比律賓島の雨季が一時に余の兩眼に迫つて來たやうな氣がした、嗚

呼サンボアングをさへ花の都のやうに思ふて居る子供も有るので有る、而も我々と同じ人種の中に。

ミンダナオ第一の大河

八月十七日午前七時半船は既にプランギ河の河口に停船して居るカーベンター長官の好意で、余にコタバト地方の概念を獲させん爲態々此處に停船させたもので有る謝せざる可らずで有る、又先日ヘラルド新聞の持主ハックツト君が、是非コタバトへ行つて自分の椰子園を觀て呉れと云ふことであつたが、氏は何でも他の官船で昨日コタバトに來たらしいと云ふことである、兩キヤメロン氏は余を誘てランチに乗りプランギ



モロの市場

河の南口から見物を始める、同行者が此外に一人あるそれはサランガニ灣から乗船した獨逸人でドクトル、ゲルマンと云ふ獨領ニウギニアの農事監督で著名な農學者であるさうだ、英人がニウギニアを占領した時捕虜となるのを免れて瓜哇に渡り、閑に任せて此邊を視察するらしい、余には身分を隠して居つた、ブランギ河は一名リオクランデと云ひミンダナオ第一の大河で有る、其河尻は二派に分れコタバトは北流ハッケット氏の農園タモンタカは南流を溯ること三四哩のところにある、川の兩岸は頗る大なる平野で有る、段々上つて行くと右側に一の市場があつてモロの船が上下より集合し、市場には澤山の人が居て貨物交易最中で有る此處をテニエックと云ひ流末第一の物貨集散地である、それより上ること二十町ばかり目指すタモンタカに到着した、煉瓦で方形に疊んだ船着場から上ると其處に輕装のハッケット君が立つて居る、見ると傍に大きな寺が有り氏の事務所は元の僧院である、此寺近傍の名刹であるが騒亂の際に僧侶が逃出し、近時は唯日曜日にコタバトから寺を開けに来るだけであるさうだ、彼の船着場の煉瓦壁は和尚の游泳場であつたのである、此邊は有名な鰐魚の巢であつて障壁が無いと食はれる恐があるとは一寸氣味が悪い話だ、事務室に入つて窓から四方を見れば古い椰子の樹が澤山生えて居つて大きい實が澤山生つて居る、ハッケット氏の語

る所に依れば、氏の農園は川の兩岸に跨り廣さ千四百四十八町、既に開墾せられたる面積二百町歩で、椰子の数が四千本、最も古い椰子は三十五六年を経たもので、採取し得べき椰子の数が一千本、其實の大きさは二百個のコブラで一ピクル出来ると云ふ、現今は椰子よりも主に米を作る其米は一町歩の收穫が八十乃至九十カバン（一カバンは日本の四斗）其米の中ハイランド・バライと云ふのは三ヶ月で收穫が出来る代り一町歩に五十カバンしか取れないと云ふ、米は小作法を用ひ、其小作法は種子を貸して收穫の後先づ種子を取返し其剩りを地主小作人間に二分分すると云ふことである。

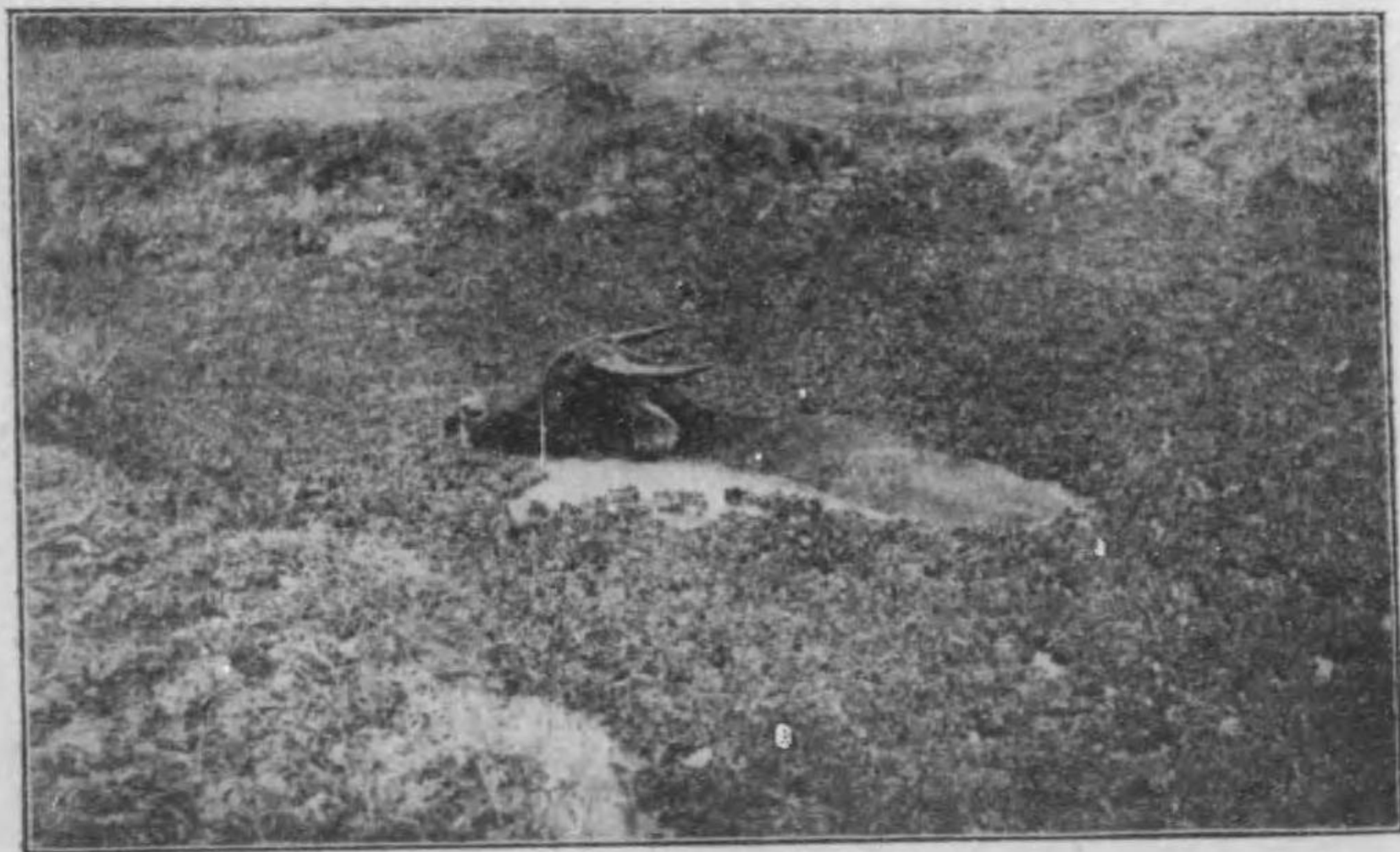
是れからハッケット氏の案内で川を渡り椰子の耕地を視た此地は一端に小丘があつて、灌木やコロンが一面に生えて居る、丘上に攀登つて山下を眺望すれば、地勢平坦樹木が彼處此處に残つて居る、又家屋も其處此處に見える、地勢を大觀した後山を一周してランチに歸り急いでコタバトに向つた。

コタバト町

コタバト町はタモンタカの南方を少し下つた處から横様に天然の溝渠に入り、曲つて北流

に漕ぎ出でた處に在る、其間の水路は兩岸共美しき灌木林で、綠蔭清涼一大公園内を行く如き想を爲さしめる、コタバト市は人口二千ばかりサンボアンガや、ホロの如く一寸市街らしい形をなして居る、知事ブライアント氏の官邸を訪へば、先日別れたヒッチコック君が悠然立現はれ「來たな」と言つて握手した、此處で土木技師ヘーレー氏に紹介され、五人卓を共にして午食を喫した、食後知事が先に立つて官立の精米所及フェンナー氏の石鹼製造所を觀た、此石鹼製造所は椰子の油を用ふるもので近頃開業し、洗濯石鹼を造つて居つた、精米所は可なりの大規模で機械で米を搗き、且之を荷造りする仕掛である、精米所の後面に出で、河中を見ると微塵の如き小動物が無數に蠢動して居る、掬ひ上げて見れば蟹である、河水の溢れる時に限つて下手から上り来るものさうな、折柄我々の前を奇態な船が通航する、水中に有るべきプロペラが船の上で回轉して居り、恰是一個の風舟である、知事の言ふには是はエーロ・スラストと云ふ亞米利加新發明の發動機で水上飛行機の一變したもので有る、此邊の沼の中には水草が多く之を掃除する爲め船を浮かして見るのに、水草に引掛つて運轉が出来ない、そこで此新發明を應用したならば如何だらうと試みに一個買ふて見た、成績が良ければ官用に供する積りであるとの事、中々面白い思付きだ價は七十五弗(機械のみ)ださうだが、其水

上を駛走する工合は至極滑かであつた、總じて比律賓の湖沼にはギヤツボと云ふ水草が茂生する其形蒿苳の頭を剪み切た様で水の中に長き數百本の根を垂れ、何處でも流れて行く、余は假りに之を佛の座と命名した、此島の童話に昔々或處に善惡二人の娘あり、或日汚なき老婆の憐を乞ひに來りしを一人は善遇し、一人は惡遇す、其後善き娘病氣になりしに何處よりか彼の老婆現はれ草の實を與て癒し、介抱を惡き娘に托し暫し他行の間、惡き娘其實を己の髪の中に隠し善き娘に與へず、容體又惡しくなりし時老婆歸り來り神術にて娘の病を治し、鬼に命じて惡き娘を水中に投込ましむ、惡き娘水中にて髪を梳るに彼草の實次第に其中より現はれてギヤツボとなり、梳れども／＼盡さず、



ギヤツボの中の水

悪き娘は永劫水中の梳髮鬼となり遂に浮ぶ瀬無しと云ふ次第である、ブライヤント知事は何處やら故の阿部政務局長に似て居る、打見たる所簡素淡泊な人だか中々沈勇で屢々危険を冒して山地を巡り地方の爲めに盡瘁すること大方ならずと云つて土人から感謝状を呈された、此コタバト・ラナオとホロの三地方はモロ人が强悍で比島人の知事を受け付けぬといふ、ホロのモロなどは比律賓人が獨立するなら我々も獨立だなどを威張るので有る、中々難かしいところだ。

午後三時コタバトを發し長流一鴻半時間にして河口に達し、復官船中の人となり、八月十日の曉サンボアンガに歸着し、瀬戸君、木村君、中村君と手を握る。

鐵庵の茶室

八月十九日から二十二日までサンボアンガに滞在したが、最早新たに見る所もない、十九日に瀬戸君と共に再びメルセデス農場を訪ふて山頭に牧牛を觀、其夜中村清次君の住宅を見舞ひたる外に記すこともない、メルセデスの牧牛は多く印度種で、先日見たパチフィールド大尉の牧牛と同一である、此地の放牧には果して印度種が好いか、將濠洲のクインスランド



メセルステの閑談 瀬戸氏と著者

種などが好いか、尙研究の餘地が有るだらうと思ふ。

中村君の家はサンボアンガの市外二十町ばかりテツアンの小橋を渡つたところにある、市外は一面に水田であるが、今將に米の田植時で收穫は明年一月になる、土人の農夫は草取りせず米と雜草を一度に生やす、收穫の時は稻を刈るので無うて米の穂を摘み取るのである、灌溉さへすれば一年二度は慥であるのに雨季一度しか耕さぬとは惰なる哉である、兎角申す内早や中村君の宅だ、獨逸人が建てただけ中々大きい、兩方の庭に椰子とバナ、が植えてある、其林中に中村君が手造りに茶室を建た、竹の柱ニバの壁鐵釘を用ひず麻で結んだところが面白い、今夜は僕の送別で今日丹後丸

で來着した、東京の高木幸次郎、鈴木庸夫の兩君、瀬戸君、木村君なども皆招かれる、一室ぎりの茶室ににぎり上つて見ると、戸も無く障子も無いバナ、の間から小川の隠見する眺望幽邃で有る、唯不思議なるは編竹を壁とした床の間の中央に一大圓窓の有ること、新來の高木翁一寸首を捻る、實は主人も知らぬ加勢人が月の見えるやうに明けたものだらうとは頗る珍、中村君は彼の藤波の例によつて余に命名を請はる、向ふ河岸のテッアンを取り鐵庵が好からう君の顔色も鐵のやうだなど、戲る、誰か其内七厘を引くり返し、烈火床上に散ばつたが竹の庵は焼けもせず、是はいよ／＼大丈夫の鐵庵と命名即座に極る。

麻で結ふ竹の柱にニバの壁

主人の腕も黒金の庵

黒金の庵の眺めは千萬の

黄金に代へぬ白金の月

鈴木君は年齢五十六七寒い滿洲の製粉事業にも厭いて、今度は暖かいところで一仕事とは近來珍しい茶人、此行の堀出し老爺である、其所で澁いお茶は止めて會席團欒鳥鍋をつゝく、話しが日本滿洲タヴァオジャワまで飛ぶと言ふも鳥に縁あり、主人の健康を祝して散會は風

變りの茶室開きで有つた。

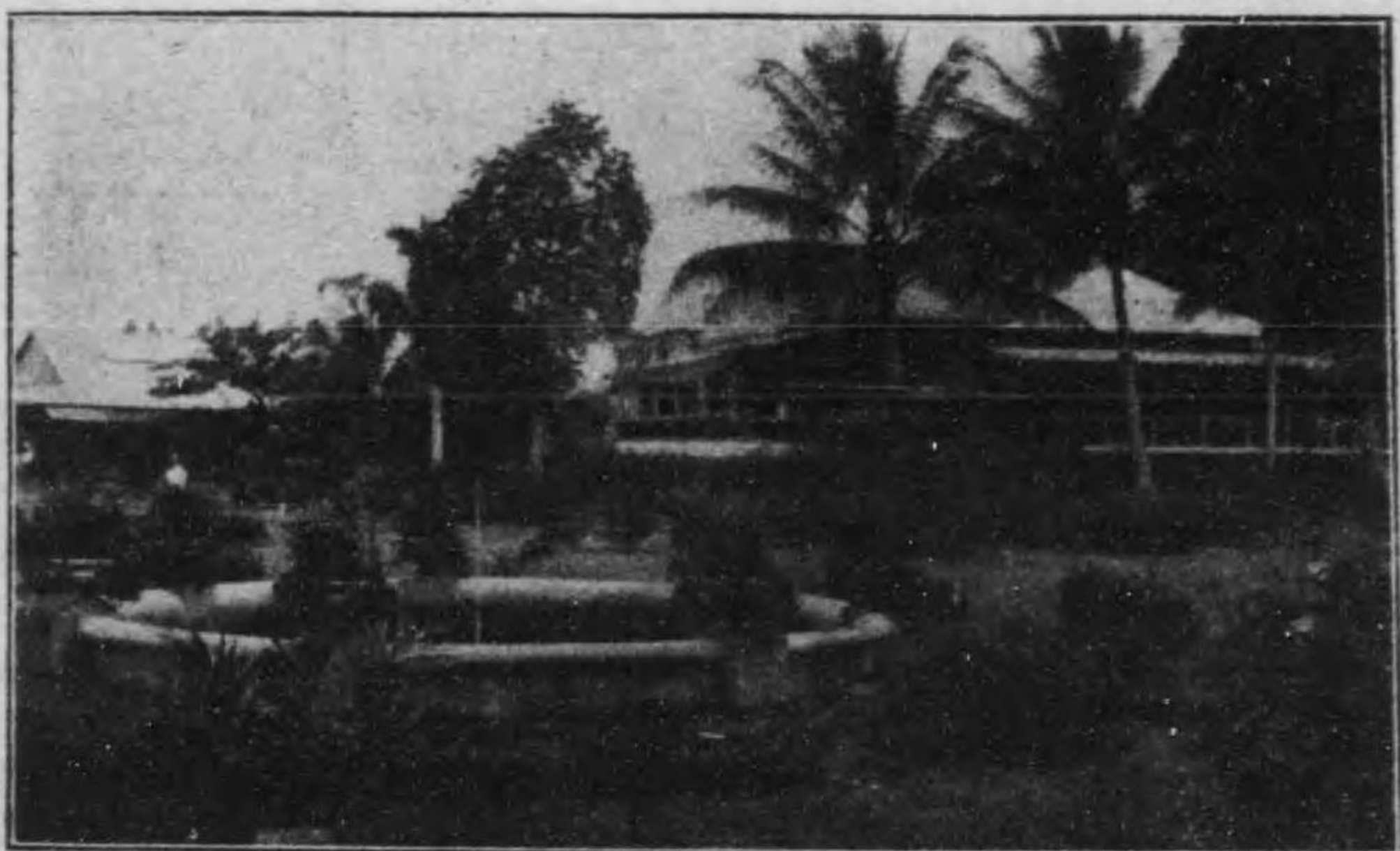
下 篇

再度のセブ、マニラ附比律賓の將來

カルデラ灣よりドマンホツクまで

八月二十二日官船ミンダナオが長官カーペンター氏を載せてマニラへ赴くに便乗し、再びセブ訪問と出掛ける、今度はマクタン島の精油工場マゼラン打死の場所まで十分見物する豫定である。

瀬戸・木村・中村・高木・鈴木の五君に見送られて九時船に至れば、長官の外に米國婦人四人男子一人、セブの衆議院議員ロサダ氏外土人紳士三人皆長官の賓客として乗込み四百噸のミンダナオ甲板頗る賑かである、忽ち見る一隊の若者旗を押立て音楽を奏しつゝ、棧橋の上に来り長官を送る模様、旗にはサンボアング中學と書いて有る、二三日前ジョーンス自治法案米國議會を通過したので今日は市中でお祝の行列をやるところで有る、中學生の後にはカワカワのモロ人までもゾロゾロと従つて来る、人氣は妙なものである、此連中は陸から長官に敬



長官官邸の庭

意を表し余は船から彼の五君に謝意を表して帽を振り暫くの名残りを惜んで愛らしいサンボアングを出帆した、不圖見ると其所に居た二隻の米國水雷驅逐艦の一隻が錨を上げる、是もマニラへ行くかと思つて居ると後から来て進行中のミンダナオを一周して後に跟いた、余の此行幸に連日の好天氣だが今日は一層上天氣で、バシラン、サンボアングの山々が遠く近く船を見送る景色亦無く嬉し

様が好く分つた、成程岸根まで深い。

停船一時間餘りで此所を出た。前の驅逐艦も一寸碇泊して石炭を積み、同時に碇を揚げて又船の廻りを一周し、海豚舟に戯るゝ妙技を示した、今日は何事無く暮れ翌くれば八月二十三日早曉船はネグロス島の海岸に沿うて走つて居る、シリマン學校が手に取るやうに見える、歸途再び訪問することを校長に約束したのに船が寄航しないのは残念である、八時半右舷セブ島の海岸断崖の上に一大寺院が見える、傍に高い石段が有る、サンボアンのヘスイット寺で百六十級の石階を以て有名である、正午船はセブ島の西岸ドマンホックの浦に着いた、此處から山を越えて東岸に出る道が有る米國のお客も下りる、余も此處で下船した、同船のロサダ君は此ドマンホックの人であるので、誘はれて其宅に至り暫時休息する、氏は此邊の財産家で其家は木造の宏壯美麗なる新築で有る、馬車から下りると小さい息子さんや嬢さんが出て来る、召使も大勢出て来る、奥さんの駈け出して來ぬ所など日本式で有り難い、暫くすると一輛の自働車が窓下を通る、ロサダ氏は之を呼び留め余を便乗させて呉れた、乃ちこれに乗つて同所を發し山道をシボンガの海岸まで走らせる、山間の景はのんびりとして頗る好いシボンガまでの同乗者は一僧三俗一女で、不思議にも其男子の一人はカウシング知事の從兄



セブ島の山道

であつた、シボンガの次にカルカル、此處からセブまで鐵道が通じて居る、然し乗り序でに自働車を借切つてセブまで飛ばす、海岸の一本道で田舎の様子が好く見える、セブは前にも言ふ通り、人口稠密な小島で有るから耕地が好く開けて居る、ドマンホックからカルカルまで八里半ばかりカルカルからセブまで十里ばかりの間寸地も鋤犁に就かざるところは無い、其間農家が路の兩側に連なつて日本の松の代りに椰子が植つて居る、時々兒童や婦人等が大な竹を擔いで歩行くのを見る、不思議に思ふて尋ねたら椰子酒(ツバ)と飲料水を運ぶので竹筒は手桶や樽の代りで有つた、椰子酒は椰子の花から取るので酒の外にブランドーや砂糖も出来る、水を運ぶのは井戸の少い

爲めで此島は全然珊瑚礁石灰石の地盤だから良水に乏しい、井戸の有る處には遠方から水を汲みに来る道が遠いから竹筒で擔ぐ趣向は中々考へたものだ、ドマンホックからセブーまで凡そ五時間で到着しセブーホテルに入る。

精油會社の工場

八月二十四日、先づジャックス氏を訪ふてマクタンの精油會社見物のとを依頼する、氏は先日來承知の事で豫て油會社の支配人デース氏、工場長トムソン氏、技師ジャーマン氏などに話して呉れてあつたから、今朝八時半此等諸氏とランチに同乗對岸オボンの工場に行つた、時間にして僅々三十分ばかりの距離で直に到着する、工場はトムソン氏の計畫で、最も新式の方法を用ひて有るさうだ、併し其若干部は秘密で誰にも見せない、マニラの第一工場の如きは堅く觀覽謝絶で有る、トムソン氏に導かれて先づ所要の水を製する處を観る、此島も矢張珊瑚礁石灰岩で良水が無い、已む無く機械で海水から水を製する、一日の製出高百二十噸一噸一圓三十錢當りとは驚く外無い、油の原料は現今コブラ一式で、一日に油凡て百噸を製する、十噸の製油費が僅かに邦貨二錢であるとは是も驚くべく廉い、余の觀た所は最初の搾

油工場で機械が數十臺据つて居る、其間を巡廻する中時々コブラ洋の鐵砲玉を食ふ眼に中ると一寸痛い、工場外には大なる油タンクがあつて現に二萬二千噸を貯藏すると云ふ、油を船に積むには唧筒で以て一噸三分づゝの割合に船艙に注入する、此處で使ふ石炭は日本炭で機械の若干部も日本製である、其用事でトムソン氏は屢々日本に來るとの事、氏は元海軍士官で化學電氣學で、容貌元の大坂電燈支配人、菅沼君に酷似し人物も頗る洒落、一見舊知の如しで有る。



竹筒にて水を運ぶ

機械學に通じ工場設計の技師が本職で一工場の事業が始まれば自由に亦他會社の聘に應じて行く面白い商賣も有るもので有る

マゼラン戦役の古跡

此工場の裏手はマクタン島の本通りで其道を北に行くと二十町ばかり彼の世界の歴史に有名なマゼラン(即ちマガリヤネス)の戦歿地がある、其戦歿地の有様を見、兼て記念碑を一見したいと思つて居たから、トムソン氏に依頼し馬車を備はうとしたら、此村小暖村で一臺のカロマタも無い、待つ事二時間やつと寺の和尚の乗用車を引張つて来た、そこで其車に乗つて先づ工場の後手に出る、此邊は工場通勤者の住居で役員の家もある、其中に舞踏學校と云ふ看板を掛けた建物のあるには尠からず驚かされた、それから細い道を通つて本道に出た、新設の道路だが例の石灰石の地盤だから、所々石骨が露はれて車體を跳らせる、道の兩側には名を知らぬ灌木が美しい小紅花を着けて繁つて居る、尙進んで行くと例の仙人掌の奇種なるソロソロ、黄色の花を付ける一種のアカシャ、夫から玉蜀黍の畝、シザルに似たマゲー(其葉から麻糸を取る)が劍のやうな葉を立て、並んで居る、それを過ぎると椰子林、椰子林の間に少し行くと左右に二三軒のニバ家があつて、突當りにマゼランの記念碑がある、記念碑は高さ凡そ五十尺石と煉瓦とで方塔を建て其上に方柱が聳へて居る、周圍に鐵柵付の石垣が有る、其四方に左の如き文字が書いてある。

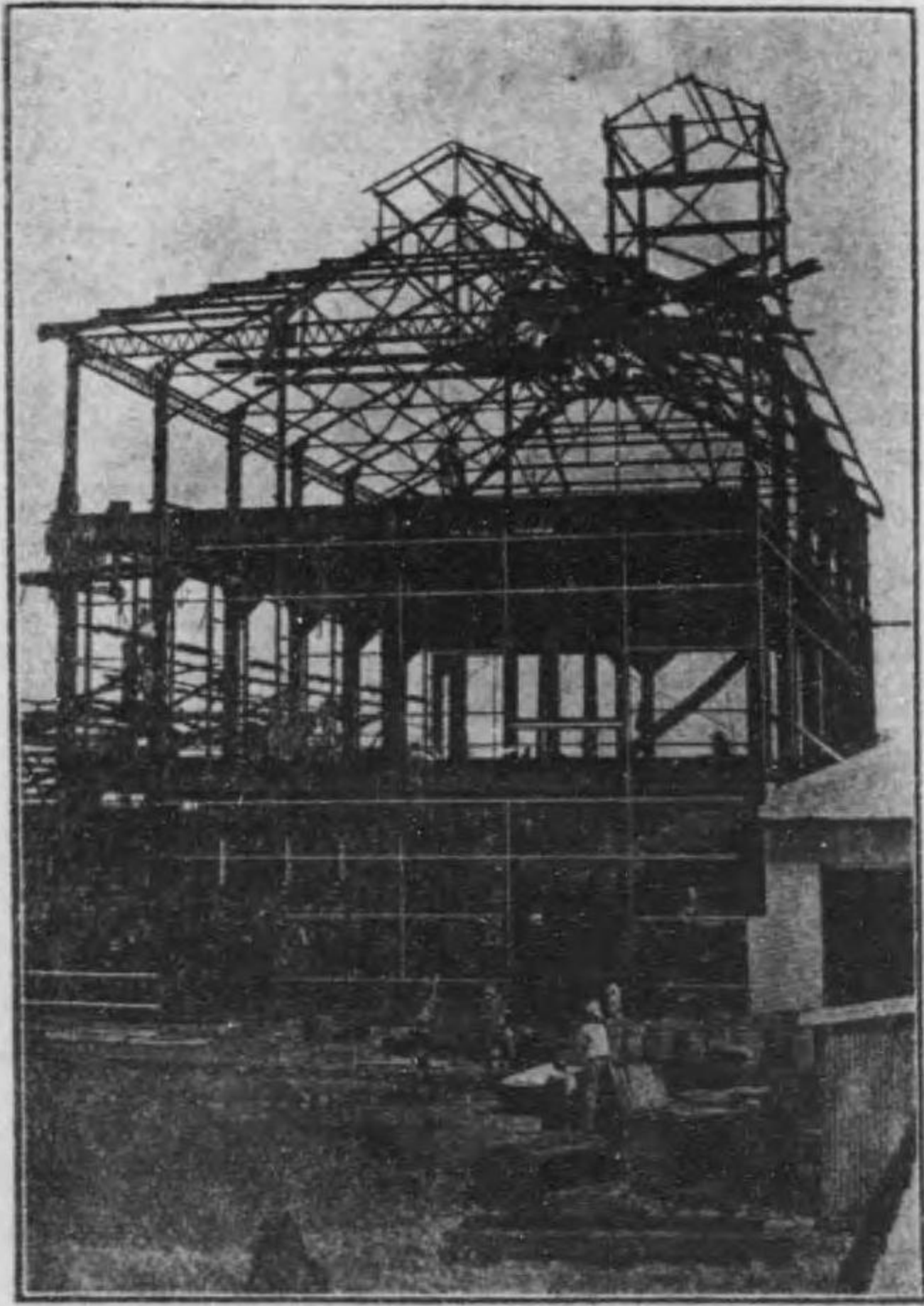
正面 Glorius Hispaniolas.

右 A Hernados de Magallanes.

左 Reinando Ysabel II.

裏 Siendo Governador Don Miguel Creus.

記念碑の圍りは矢張椰子林、碑前にはマゲーの畑が有る、マゲーの間の廣い道を一町ばかり行くと波打際で、土人小舟が一隻沙上に横はる、此汀は小曲浦で北端に灌木林が見える、海上は遠淺で二三町先の干潟に何やら鳥が歩んで居る、千五百二十一年四月二十七日と云ふ日に西班牙の船大將マガリヤネスが此處で土人と戦つて討死したのである、抑もマガリヤネスは元葡萄牙人で、初め比律賓の隣のスバイス島に来て居たが、歸國の後國王に對する不平から葡萄牙を立去り西班牙王に仕へて西方からスバイス島に達する航路發見を進言し、五隻の古船を以て編成せる船隊の指揮權を與へられ、大膽にも大西洋を乗渡り、亞米利加の南端に來た、一隻の船は謀叛し、一隻は國へ逃歸つた、マゼランの旗艦は僅百十噸の小舟で有つたが大に食料の缺乏に苦んだ、マゼランは肉が無ければ船具の革を食つて見せると言つたがマゼラン海峡を過ぎた後とうとう眞實に船具の革まで食ふやうになつた、北上して貿易風に乗つてからは海が靜で波浪の難に遭はず喜んで其海を太平洋と名付けた、遂にラドロロン島に着き



場工社會油製の中築建

を討ち、次に對岸のマクタンを降さんと欲し其島王に向つて三匹の羊、三匹の山羊、三車の米を要求した、マクタンの王は二匹の豚、二匹の

少し休息の後西南に走つて比律賓のレイテ島とミンダナオの間に這入りリマヌワの小島に着した時は、食物缺乏の爲船員一同半死半生で有つた、其所で食料の豊富なセブーに向けてやつて來たのであるが、其頃セブーの港には暹羅の船などが居つて一小貿易地であつた、彼は巧にセブーの島王を籠絡し、耶蘇教を宣傳し暫く滞在する中島王を助けて四方を征服するの考を起し、まづ島内の土匪山羊、二車の米ならば差上げやう、それ以上は腕づくで取れと云ふた、マガリヤネスは外交談判破裂を宣言して六十人の西班牙人を率ひ土人のバラングイ(小舟)に取乗り、マクタン島

に攻入つた、此時マクタンの王はシラブラブと云ふ者で有つたが中々強い、西班牙人の此淺瀬から上る所を待構へて攻撃した、西班牙人の陸に上つた者四十九人、マクタン人は多勢で有るから、取圍んで之を攻める、此時代西班牙人は鐵の鎧を着、鳥銃を持つて居つたが、火繩筒で音ばかり高い、刀と槍は有名なトレド鍛ひだがマクタン人は投槍で遠方から戦ひ、又賢くも西班牙人が上半身だけに鎧を着て居るのを見て、脚元に潜り入つて斬り立てた、西班牙人はとう／＼堪らず潰亂して船の方に逃げかけた、マガリヤネスは退口を掩護せんと二三の勇者と共に踏留つて戦ふうち、二度まで兜を打落され投鎗で胸と片腕を突通されて、波打際に仆るゝところを、兩手遣ひの大太刀カンピランで眞向を斬られ無慘の討死を遂げたのである、マガリヤネスの此戦争はウィスター博士も評してゐる通眞に馬鹿なことであつたが今から言ふても追付かぬ、マガリヤネスと云ひクックと云ひ、世界有数の航海者が陸上で殺されたのは氣の毒な事である。

古のマガリヤネスの亡びにし

跡訪ひ來れば唯椰子の風

名も知らぬ草の花こそ盛なれ

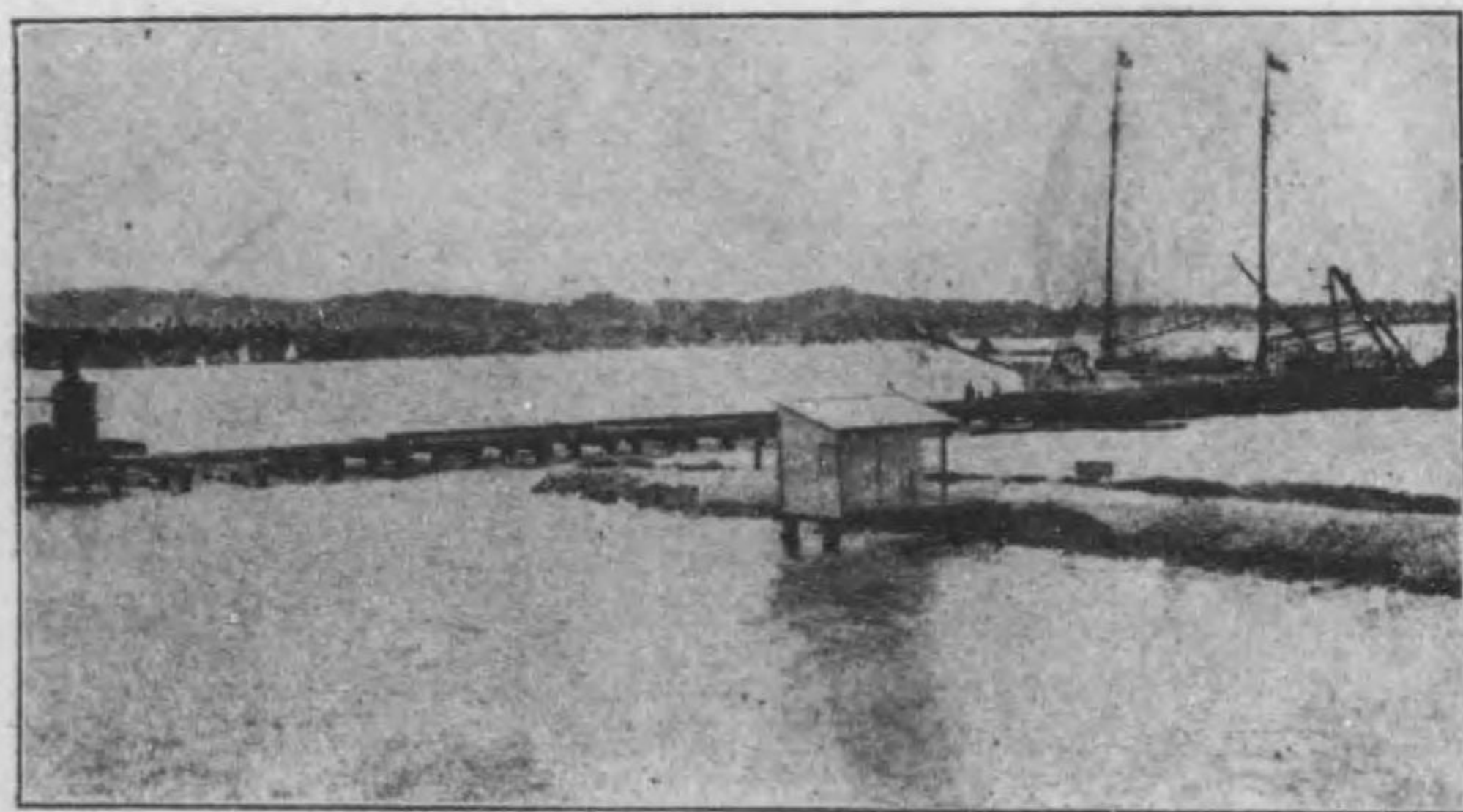
マガリヤネスの亡せし水際に

浅緑茂げるマゲイはマゼランに

手向の花と見るべかりける

マゲイは比律賓重要産物の一つで、其絲は細く美しく、彼のカミサ(女衣)の材料となる、輸出額は年々凡百萬圓に上る、記念碑の周圍マゲイ畑の端に紫の野花が咲いて居る、方々に好く見る草で紐のやうな花序の真中に小さい梅の花のやうな形した花が結び目の如く咲いて居る、釵草とも言はうか、戦場に釵は似合ぬ本名が知りたいものだと思つて、いろ／＼の人に尋ねたが遂に分らなかつた。

記念碑を見終つて歸らうとすると、會社から案内者として従つて來たボーイが其所の農家を指し、私の伯父の家ですから暫く休息して椰子の汁でも召上



マタタの風景

りませと言ふから、面白い椰子を取らせよと命ずると、一人の若者飛で出て高い椰子の樹にスル／＼と登る、其身の軽きこと猿の如しで、瞬く中に天邊まで登つて大な椰子の實を二つ切取る、其一つを口に啣へ一つを手につけて復スル／＼と降りて來た、山刀を借りて其實を打割り汁を吸ふて見る、甘くして甘露の如しと言ひ度かつた、謝金を與へ馬車に乗て精油會社に歸り又同トムソン氏と長時間雑談してセブーに歸つた、眞に愉快な日であつた。

此タジャック氏に誘はれてセブー俱樂部に行つた、此市に二個の俱樂部がある、セブー俱樂部は白人ばかりの俱樂部で毎木曜日に家族を招き茶話音樂會を行ふ、今日は即ち其當日で奥さん方がお茶を下さる、白人の俱樂部で婦人連に會ふのは之を以て嚆矢とする。

ポンド博士の病院

八月二十五日は雨で暑いセブーの空氣は八十四度ばかりになつて居る、昨夜彼のカウシング知事の賜物バナテの杖をホテル食堂の入口に置忘れ何人にか仕てやられた、併し知事の故郷のセブー人に渡したと思へば聊か慰むるところが有る、今日はジャックス氏の紹介で市の衛生局長ポンド博士を訪ひ、其案内に依つて市立病院を觀た、コンクリート二階造りで寢臺

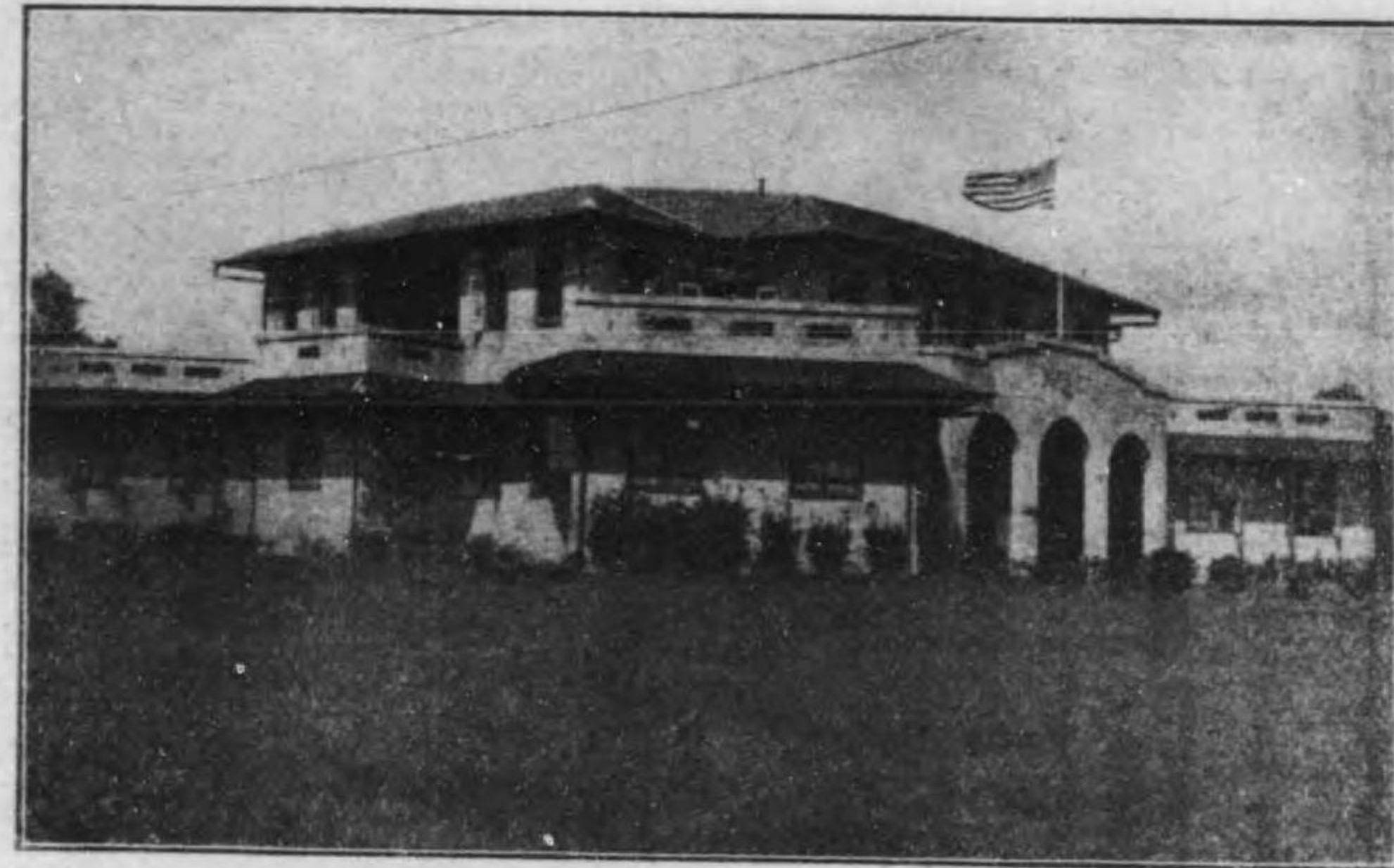


セ プ - 新 市 街

切てる、其だけ又時に比律賓の民度に適せぬ事が企てられるが病院などは至極結構である。

海岸の自働車遠乗

午後知事の秘書官ホーセ・アヴィラ君が来て、カラカラと反対の方角に案内しやうと云ふ、此アヴィラ君頗る日本的の容貌活潑敏捷亦然り、アヴィラは一寸覺え悪いから例の記憶法で雲軒とす、アピラ・ウンケンから思ひついたのである、偕此雲軒子と同乗して、北方海岸に乗出すと道路坦々車行は滑るやうで有る、尤も其筈であると云ふのは地盤は例の石灰石であるところへ荷車の通行が殆ど無い、偶に有つても齒が厚くして有るかから決して壊れぬ、幅は十五呎位で有らうか兩側に



セ プ - の 病 院

七十個、別に木造の傳染病室及び外來患者診察所の設が有る、現今在院の患者が四十四人總て施療である、此病院に附屬して又別に看護婦養成所がある八人の看護婦は常に地方を巡回して衛生講演をなしつゝある、西班牙時代には此邊には醫者などは皆無と云つて好い位のものであつたから、地方税を以て病院を立てるまでには随分長く闘つたものだ、併し今日になれば何様して是迄病院無しで済まして居たらうと人民は皆自から驚いてると博士は語る、天然痘の如きも病院設立と同時に即ち千九百八年から初めて強制的に行ふことになつたのであるさうだ、先日マニラの中央病院も一見したが、それは又東洋に其比を見ざる位な立派な建築である、亞米利加人の仕事は總て大仕掛けで思



セーブ知事アロ氏

青草が生へまことに奇麗で有る、所々村が有る小さな旗など家や装つて居る何かの祭禮で有るやうだ、二時間ばかり走つて海岸の小村に到着した、丘上に一軒の大寺院が有る、先日船の上から見たソーゴッド村たとの事海上に架け

出した家は恰もモロ村の如くで有る、其内子供が大勢集つて来る、我國の漁師町に行つたやうな心持がする、暫時休息の後引返し日暮れて市中に歸着した、雲軒子の私宅に立寄り公園を廻り知事の宅の前まで来ると、其所に知事ロア氏が立つて居る、直に飛乗つてラルコ・ホテルと云ふに誘はれ晩食を饗せられた、食後雲軒子と又街頭を散歩し、日本人坂本某氏の雜貨店を訪ねた、此外に今一つ日本雜貨店が近傍に在る、知事の話では此町の日本人凡そ五十人ばかり嘗て警察の厄介になつたことなく、極めて順良に其業を勵んで居ると云ふ事であつ

た、坂本氏の話に依ると、近來此邊は不景氣で商賣が少いと、昨日俱樂部で或る米人から聞いたのに此邊は利息が最低七分不動産に對する貸金は利率一割二分位になつて居るさうである。

日本觀光を勧める

八月二十六日午前政廳に知事を訪ひ、正午知事とアヴィラ君をホテルに招き食事をしながら、余の申すには「此度の如く比律賓の内地を旅行すると種々の新しい知識を得て大層利益を享ける、而して今回は又親しく比律賓人に接して談話を交へ、寢食を共にし、兩國人の間に日支日韓以上血縁の繋つて居ることを發見し誠に愉快である、願くば比律賓人も續々日本に來遊し日本の短所を棄て、長所を採り共に俱に東洋の文明を推進め、世界の進運に貢獻せんことを望む次第で有る、知事もアヴィラ君もオスメニヤ君も未だ日本に來られたことが無いさうで有る、米國は遠く且つ事物が餘り東洋とは懸隔して居る、我が日本の如く同じ東洋人中今將に國情の變改に努力しつゝある邦國を觀らるゝのは却て比島人の爲大なる利益で有らうと思ふ、旅行團の如きものを拵へて官民共に日本に遊覽を試みられては如何で有るか」

と熱心に陳述した知事ロア氏大に賛成して實は近頃マニラ大學總長ウイラモア氏が日本視察の報告を公にせられたのを一讀し、大に遊意を動かして居る者が多い、旅行團の企て至極面白い、エルイデアール新聞社で實行して貰へば出來ると思ふから、是非ルス主筆に話してくれよと言ふことで有つた、マニラへ歸つて後ルス君に其意見を述べ尙幸に歸航の船中トーマスタックのグリーン君(東洋支局監督)に逢つたから、ルス君を助けて其事を實現させることを勧めて置いた、大正六年五月東京で開かれるオリムピック會を機とし觀光團は頗る面白い、ウイラモア氏はオリムピック中に東洋學生英語演說大會を加へたいと云ふ意見で日本滞在中大隈侯山川總長などに相談せられたと云ふ事、是も至極妙で有る、何でも少し元氣好くやらねば東洋人は萎縮して仕舞ふ、外にも日比親善の名案が有れば承りたいもので有る。

セブーの今昔

扱て此セブーの狀況は前後二回に亘つて大部委しく記したが久しく當地に住する或人の話に依れば、十二三年前までは市街らしき市街もなければ船を繋ぐ岸壁もなく、病院もなく醫者もなく、憲兵もなく巡查もなく、水道もなく電燈は勿論なく不潔極まる市街であつた、然

るに米人と土人と火災との協力殊にオスメニア氏の盡力の爲に、市街は改造せられ、道路は市外南北の立派なものが開通され、文明の諸機關が次第に具備して今日見るが如き美麗なる文明の町となつた、昔は東海岸から西海岸に達するには二日間の時日を要した、さうして山



マニラの記念碑

上にはブラハんと云ふ暴民が居つて平地のピサヤン人種と仲が悪く時々山の下に降りて來て家を焼き人を殺す、山路に有名なるトンド道路と云ふものがあるが、此道路は即ち此亂暴なる土民を征伐せんが爲に造られたものであつた、ブラハんと云ふの

は土語で赤いズボンと云ふ意味、他の島々でも山地には此赤ズボンが居つた、セブーの人は此赤ズボンが來ると云ふと非常に恐れて居つた、千九百二年にはセブーから四五哩先のガタムベいと云ふ處に建てた學校を襲ふて米人を三人殺した、千九百六年にはセブーの南の方の

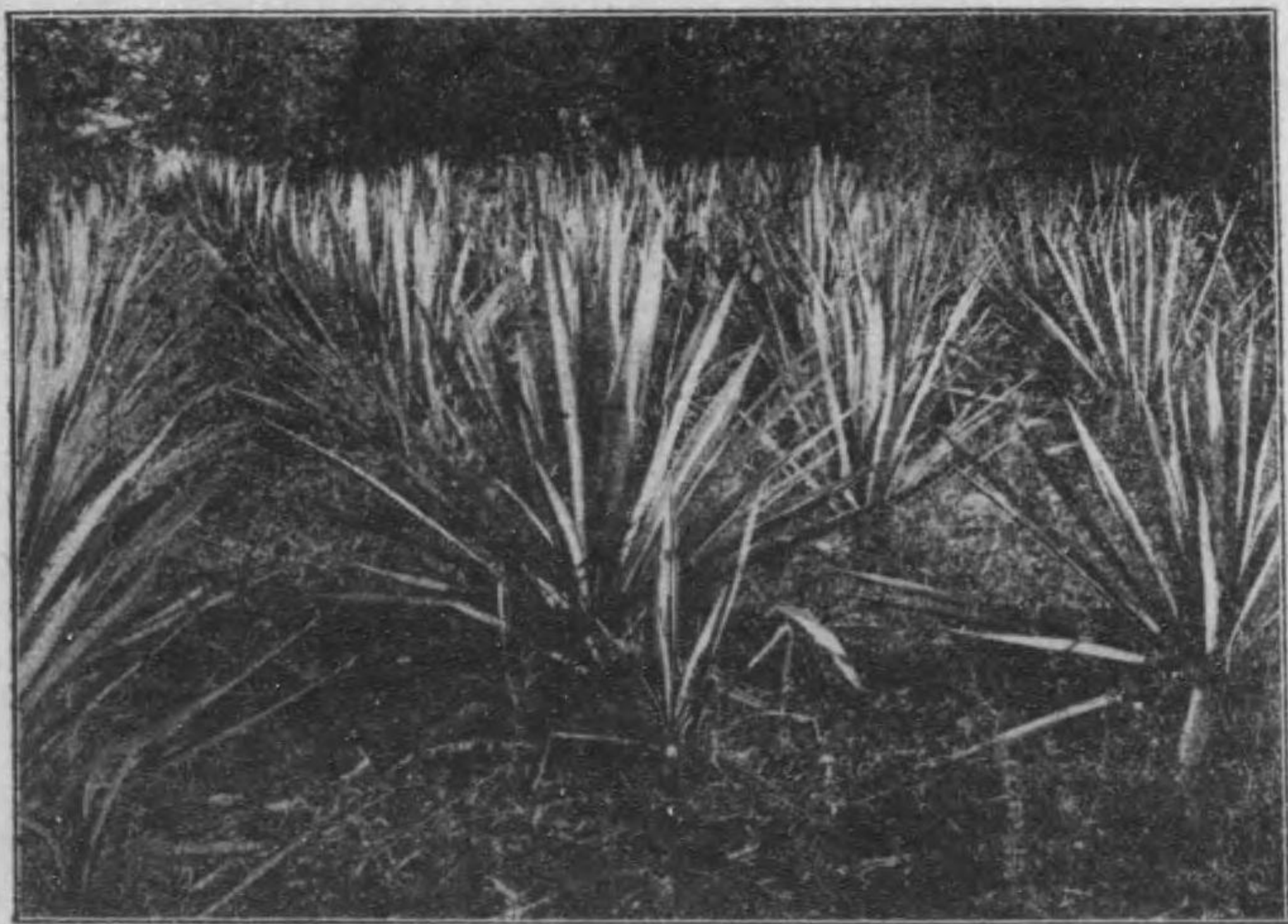
ナガビナンガバン、ストリアスなど云ふ村々に赤ズボンが襲来し、多くの家を焼き村民三百人を殺害したことがある、其頃は田舎へ行くのには必ず護衛を連れて行かなければならぬ位であつた、と云ふ懐舊談を聞いたが、十二年間に今日の體裁まで進歩したのは實に一大奇蹟と云はざるを得ない、之を見ても比島人の決して侮る可らざる事が分かる、此同じ人の談話に、タガログ、ビサヤン兩人種間の感情は今尙却々疎隔して居つて容易に融和しない、近頃一人のタガログ人を料理人に使用した所が、ビサヤン人の爲に虐められるから到底居られぬと言ふて呂宋に逃げて歸つた位であると云つた、地方的感情の容易に去り難いことは世界到るところ同一で有るが比律賓は三百年間人民を各地方に封じ込めて有つたので其弊が殊に甚しいと見える、其所でオスメニア氏などは此小さな地方的感情を打破し總合的比律賓人を作らうと云ふことに盡力して居るもので有らう、其着眼は頗る急所に當つて居る。

前に水や酒を竹筒に入れて擔ぐ奇習を記したが、昨日セプーの町で面白いものを見た、それは生きた豚を持運ぶのに芭蕉の葉で包むことで、一人の田舎女が四足を縛つた豚を蕉葉に裹つんで提げて行くのを見た、支那の昔話に芭蕉の葉で鹿を隠したと云ふとがあるが、芭蕉の葉で豚を包むのは奇想天外と言はねばならぬ、豚に就て一言したいのは、此市では屠畜場

が市中に設けられてある事で、セプーホテルに泊ると豚の殺される聲が夜の九時までも聞えて甚だ不愉快である、ホテルの主人の言ふ所では先年まで終夜屠豚が續き客人は眠を妨げられて大困り外からも苦情の結果九時までと時間を限るやうになつたと云ふのであるが、是は今一ツ早く改良したいことである。

何人の戯文か

此日午後セプーの岸壁からマニラ行の汽船セプーに乗る、大さ一千三百四十噸新式の美麗なる汽船で、之は蘭船で有つたのをマリチマ會社に譲受けたものじやさうな、



(ラ = マ) 知 1 ゲ マ

船が新しければ設備も新しく瀬戸内の紅丸同様ボーイの樂隊や活動寫眞の餘興などがある、船室には電扇もありすべて氣が利いて居る、此美船に乗つて静かな比律賓の内海を航行し公園の如きロンブロン島上の椰子林などを近々と眺めながら、久し振りでマニラへ歸る心持は實に千兩で有る。二十七日は珍らしく船上半日の閑を得獨り甲板の一端に坐しマクタンの遊を回想しマガリマネスの渡來以來三百年間變遷のあらましを心の裏で繰返し、日本のとに引き比べなどしていろ／＼考へて見る、不圖脚下に落散る紙片に眼が著く、何やら文字が書いて有る拾ひ上げて見れば何人の戯かマガリヤネス、レガスビ、リサールの事蹟を謠曲薩摩琵琶、淨瑠璃に作つて有る、これを一讀するに諧謔の中自から一味の感慨があつて棄て難いやうな氣がするから、此に採録して讀者の一樂を博することゝ致す。

まがりやねす (マゼラン) 觀世 撚阿彌作

王へ是はマクタンの王シ・ラブラブとは我事なり。我先祖より此島を領し。威を遠近に振ふところに。此程より向ひなるセブ島の島に。何處よりとも知らず恠しき船人等來り。セブ王を助けて我を辱むるさへあるに。尙ほ慊らず我に迫り。此島を奪はんと企むの由。言語

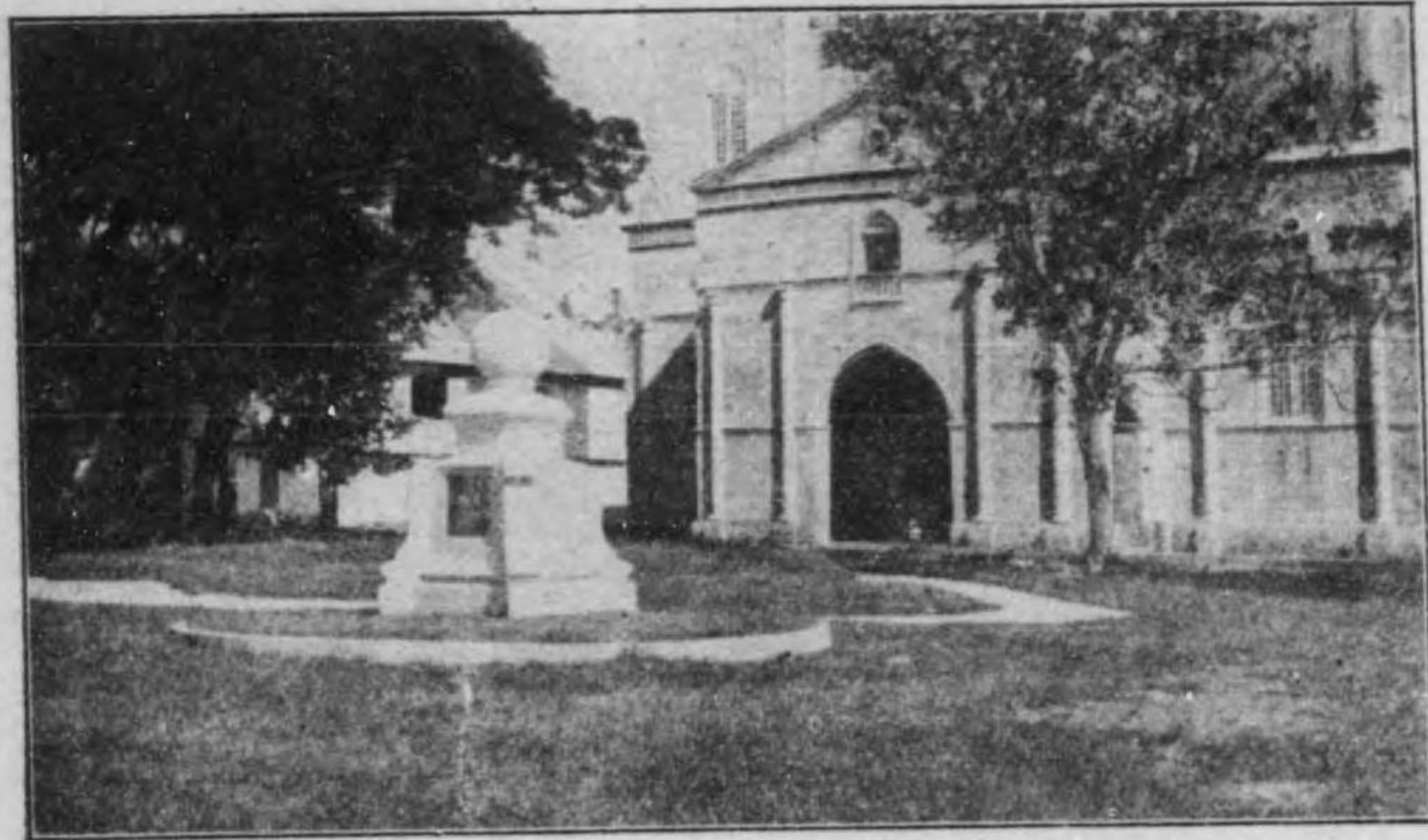
道斷。今にもあれ彼船人の攻來りなば。唯一戦に勝負を決せうするにてあるぞシテハ波より波に入る月の。雲井や船路なるらん。是はマガリヤネスにて候。我仔細ありて生國葡萄牙を



ガレビスの記念碑

見限り。西班牙の船大將となり。モルツカの島へ赴かんと。西大陸の南に。新たな船路を見出し。波靜かなるまゝに漫々たる大海を乗越え。遙々此ところまで來りけるが。義によつてセブ島の島王に頼まれ。不逞なるマクタン王を討たん爲。唯今此汀に打上りて候へ綿積の。水の限りを渡り來て。思はず此所に荒金の。土をも焦がす修羅道の。焔に交る不思議さよ。ヤア／＼それなるはマクタンの酋長なるか。辱くもデウスの御惠厚き西班牙皇帝に仕

へ奉る。マガリヤネスの來れる上は。唯速に貢物を献じ。セプー王の配下に付き候へ玉へ何やらん恠しき鬚男の大音に呼はれども。鳥の囀るに似て解し難し。所詮言語の通ぜざるに問答は無益。唯打取れと下知しつゝ。カンピランの鞘投捨て。真幕に飛て蒐る。心得たりと寄手の勢。火繩の銃を打放し。烟の下より攻上れば。マクタン勢は。生ひ繁る草の葉蔭に待懸けつゝ。鋭さ投箭投着けつゝ。寄手の勢の物の具の。隙間を覗ひ脚元に。潜り入つて斬立つれば。こは敵はじとカステラ勢。磯邊をさして逃出す。マガリヤネスは先程より。群かる敵にかけ合せ。二度まで甲を打落されて。大童になつて有りけるが。めだれ顔なる人々かな。退口こそ大事なるに。此ところを堪えずば。皆殺しに逢ふべきぞ。返せつゝと呼はりつゝ。又敵中に突て入る。スハ大將を打取れと四方より押取込め。篠を亂して投る箭に。二の腕胸元を貫かれて。水際にどうと倒るゝを。得たりや應とマクタン王。跳り蒐つて斬付くる。さしにも剛き船將も。急所の痛手に迷る。血潮と共に引く渚の。水の泡と消えにけり。水の泡と消えて失せにけり後シテへむら草に。草の繩文字備らば。なぞしも花の。さくに咲くらむ。あさなふ繩の真中を。結びし如く咲出る。花の姿の優しさに。ひる木の林マデーの園。さも心地よき浦風の。椰子の葉渡る景色かな。のう旅人夢御覺し候へッキハ南無幽靈出離生死。



碑念記ルーサリのンタビダ

頓生菩提。あゝら鈍ましや我乍ら。マガリヤネスの墳の邊に。何時しかまどろむ夢の中に。正しく見しは昔の。修羅の巷の合戦の有様。マデーの劔椰子の弓。咲出づる野花の紫を。血潮の花に譬ふれば。現にも猶天叫びの。聲を聴くかと疑はる。然るにても。斯る寂しき草中に。芙蓉の如く立給ふ。御身は如何なる人やらんシラハ恥かしや我名をば。問はれても唯口無しの。色に咲くなるアカシヤの。葉末に宿る朝露の。其玉とこそ答ふべきッキハ面白や月影の。手にも取られぬ我も亦。一所不住の沙門なり。諸法幻泡影と觀すれば。修羅の巷の叫喚は今聞く椰子の風の音シテハマデーの劔碎けては。カミサの衣の精し糸。薄紅の染色は。草の血潮に外ならずッキハ仇も恨も夏の雪の。消にし跡に一本の。しるしの塔の

残れるは。猶去り難き執心の。石とやなりしへスウスの。教は何と見るやらんシテハヘスウ
スも。佛も同じ法の道。衆生濟度の誓願に。身を無きものとスプの海。權の雫も波の面に。
落つれば同じ本の水。マガリヤネスもマクタンも。皆すぐはるうろくずの。網には如何で
洩るべきやワキヘ尊き言を聴くもの哉。然かも姿は歌舞の菩薩の。蟬の羽衣翻へし。手向の
舞をまひ給へシテハ元より我はヒリビノの。好ある舞の袖袂和歌へ常夏の。清き林に住む鳥の。
何かは春を。餘所に尋ねむシテハ花に暮れ。花に明け行く日の本の。春の眺めをさながらに。
照る日の雲の朝夕に。空を彩る熱帯の。妙なる色は油畫の。筆にもまさる神の業。其雲色の
錦を分けて。マガリネスの神靈は。高さ御空に天駆り。今は怨も月弓の。光を添へて比律賓
の。國の行衛を守らんと。帆掛る舟に翻へす。舞の袂もかすかなる。マクタンの鳥影おぼろ
になりて。乙女は雲に入りけり。

註に曰くカステラ勢は西班牙兵、ひる木はマングローブ、スプはセブの古名、デウスは天帝

呂宗攻め

眞 蕪 灣 内 作

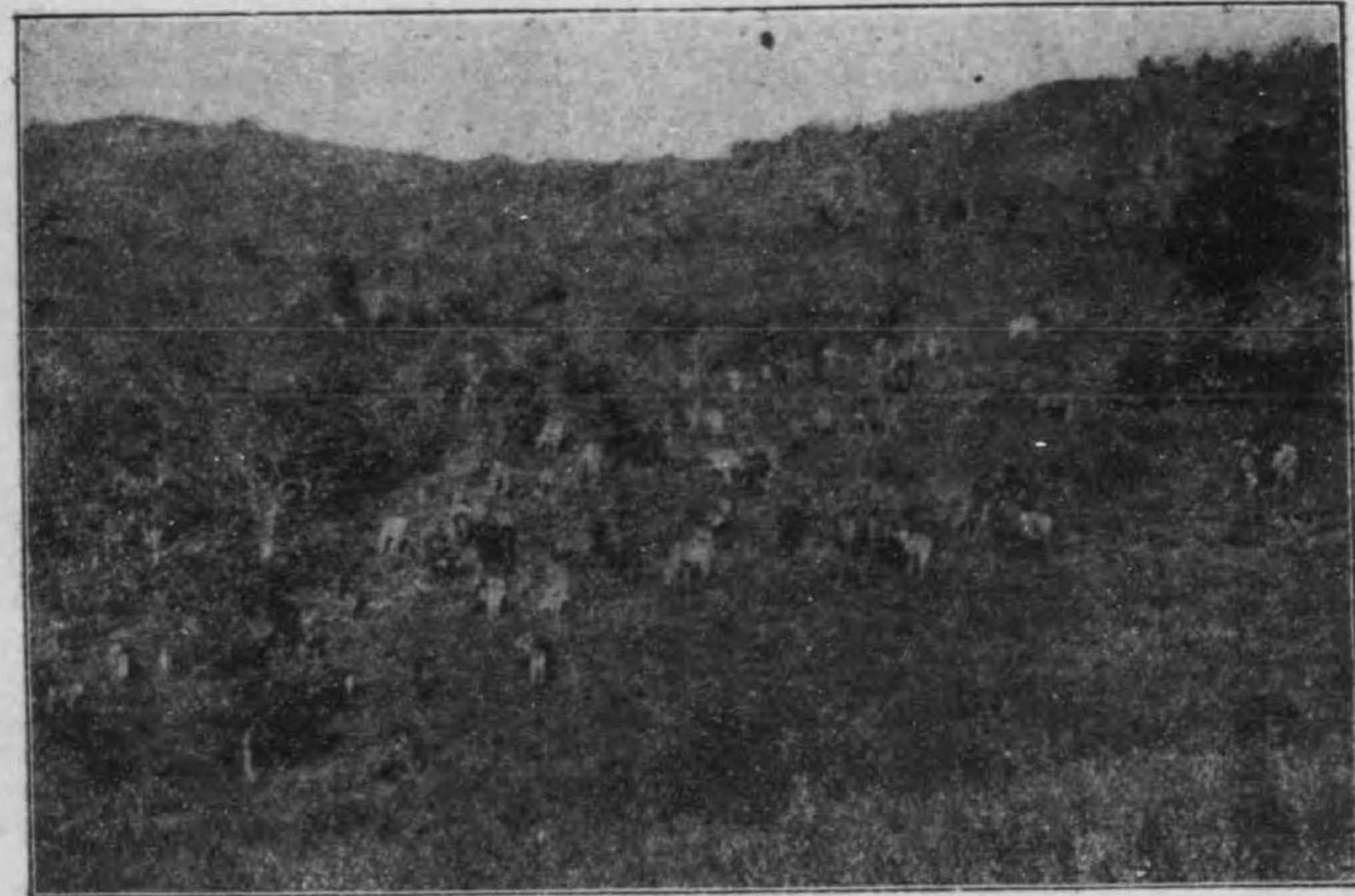
頃は西曆一千五百年代の半過ぎ。西班牙王フィリップ二世は。豫て其國の船大將マガリヤ

ネスの見出せし。太平洋の島々を。悉く經略すべしとて。メヒコの總督に令を傳へ。レガス
ビと云へる老臣に。勇士二百人を差添へて。セブーへこそは遣はさる。レガスビ其時は。早
や鬢髯に霜を置く。六十路餘りの齡なりしが。鏗鏘たる勇士なれば。一期の面目家の譽れと。
謹みて命を拜し。ナビダッドの港に兵船の纜を解き。萬里の波濤に乗出す。心の程こそゆゑ
しけれ。斯くてレカスビは難無く大太平洋を打渡り。セブーの島に上陸し。壘を海濱に取設
け。要害堅固に守りつゝ。手立を以て島人の心を傾け。次第に四方を鎮めしは。智謀拔群の
振舞ひと。感ぜぬ者ぞ無かりける。
されどもレガスビは斯ばかりの功
に慊たらず。北の方呂宋の大島を
攻取ちんと。バナイ島に居を移し。
頃を計りて大將ゴイチに命を含
め。大小數十艘の兵船に兵を載せ。
マニラの城に押寄せて無二無三に
攻蒐る。マニラの城主ソリマンは。



比律賓の大神

音に聞ゆる勇士にて。椰子の木積みて壁となし。銅のランタカを打並べ。敵を間近に引寄せ
て。一度に丸を撃放し。此度を先度と防ぎけり。ゴイチ其日の出立は南蠻鐵の甲冑にトレド
鍛ひの劍を佩き。金色の十字架を胸に掛け。徐々海濱に下り立つて。大音揚げて呼ばるやう。
やをれカステラの若者。新附の土人兵も好く承れ。抑此戦は。猥りに人を殺し城を奪はんが
爲に非ず。辱くも天にまします。ヘスウス・クリストスの御言を畏み。廣大なるデウスの御恵
により。ハラデソへ引招の御教を。四方の國々へ弘めんと。フィリップ王の大願により。
斯くは心を碎くなり。敵城如何に堅くとも。争か我に敵すべき。唯一戦に踏破りて。降るも
のは斬る勿れ。走るものは追ふ勿れ。傷くものは痛はりて。愛を敵人に加ふべし。又汝等は
運拙く。敵の刃に掛るとも。神の御爲の戦なれば。立所に天に上り。無上樂を享くべきぞ。
若し此言葉に詐あらば。我先づ御罰を蒙るべし。戦は斯くせよと。飛來る矢玉を物ともせず。
群がる敵中へ突入れば。宗旨に凝つたるカステラ勢。土人兵も諸共に。おめき叫んで攻鬪ふ。
其中に優れしは。二十餘りの若武者にて緑の髪をふり亂し。大太刀を差翳し。近寄る奴原片
端より。斬り倒し薙ぎ倒し。やあ／＼人々是を見よ。總大將レカビスの嫡孫サルセドこそ。
マニラ城の一番乗りと。壘の中に跳り入る。此勢に僻易し。マニラ勢は忽ちに。城を棄て、



比 律 賓 の 牧 牛

敗走し。さしもに猛きソリマンも。行方知ら
ずなりにけり。大將ゴイチは悠然と。兵を收
めて城に入り。今よりは此島をフィリップ王
の群島と呼び。マニラを首府と定むべしと。
總大將レススビへ迎ひの船を送りけり。レカ
スビは報を得て打喜び。天を拜して恩を謝し。
バナイの陣を引拂ひ。マニラ城に西班牙の。
黄色旗を樹てたるは世にも稀なる手柄なり。
其後星移り物換り。三百餘年の今は早や。西
班牙人の權柄も。過し昔の夢となり。マニラ
ホテルの傍に。淋しく残るレガスビの。陸に
上りし記念碑のみ。昔を語る惻れさは。有爲
轉變の世なりけり。

註に曰くハラデソは極樂、昔の日本耶穌教徒の言葉

なり。

さんちやご城牢屋の段

近松 堀 左 衛 門 作

寺々の鐘かしましく。曉の。夢成り難き牢屋の内。衛りの者の眼を竊み。稿じ果てたる最後の歌。心静に書終り。讀返し見て打點頭さ。石油ころの油壺。是幸いと押し明けて。疊みし紙片そつと隠し。四邊見廻はす程こそあれ。番人を先に先に立て。徐々入来る老法師。見るも汚れと顔を背向け。立んとするを引留め。へこれリサール。氣の毒ながら其方の命。今朝を限りの言渡し。昔なじみの此法師が。暇乞の土産には。神様へ御詫の文。下書きして來ましたぞや。是までは血氣に任せ。恐れ多くも御教に。背さし事の數々を。文に著はし世に弘め。罪なき二親妹まで。苦しめしは皆過り。斯く運命の窮まる上は。御慈悲を垂れ給ひ。せめては後世を助かるやうと。御願申すが肝要じや。そなたを思ふ舊師の親切。徒にせぬやう頼むぞと。懷より取出すを見向きもやらすへホ、ウ折角の御芳志なれど、某は此期に及び。一言半句も言ふこと無し。早や歸られよと。膠なき挨拶。へさりとは片意地な。其心からデウス様に。背さしばかりか。あれ彼處に。其方に逢ひ度いばかりに。途々の舟路を香港か

ら。尋ねて來やつたホセヒナ殿。破門の身には許されぬ。婚姻の儀式済まぬゆへ。今刑場の露と消ゆる。夫にたつた一言の。暇乞さへ協はぬぞや。如何に僻んだ其方でも。無き後までも世の人に。あれあの女こそリサールが。隠し妻じやと後指を。さゝせるが本望か。懺悔の文の文言が。其方の氣に入らぬとなら。ソレ其調法な筆先で、思ふやうに書き改め。晴れて夫婦の名乗をするが。親兄弟に對面の。許しを得たる最期の譽れ。早やく疾くくとと老法師。説教口調の柔かく。眞綿で首の兵法に。此方も然る者。そつと乗りへこれはく親切に。好くぞ言ふて給はつた。如何にもリサール今爰で。是までの御詫を。デウス様へ申上。御恵を仰ぎ奉らんと。ペン取上げて懺悔の文。さらく書終り。墨黒々と名を記し。法師の前に差出せば。恭しく押戴さへ今日唯今神徒リサール。ヘスイット宗に歸參を許さる。ホセヒナ殿は夫婦の固め。いざ此方へと先に立ち。神前に進み行く。後に従ふリサールの姿見るより。驅寄るホセヒナ。老母妹諸共に。右左より取すがり。泣より外に言葉無し。リサールは神を禮し。法師の行ふ假の儀式。嚴かに濟ませて妻の手を取りへ如何にホセヒナ。思ひ出せばダヒタンの。配所の磯の詫住居に。遙々と香港から。尋ね來ませし御身の父上。御眼の病が互の縁。婚姻の約束は致せしが。今刑場の露と消ゆる。此リサールを忘れもせで。夫婦の誓を

爲さん爲。此處まで尋ねて来やうとは。此程の牢屋の中。夜々結ぶ夢にだも。思設けぬ其方の誠心。其誠心にほだされて。書くまじき懺悔の文。言はるゝ儘に書いたるは。其方に報ゆる我が寸志。又妹には片身の一品。朝夕用ひし此こんろ。前つ年佛蘭西で。タペラ殿の奥方より。給はりしを今に離さず。牢屋の中の。獨り世帯。飯を炊き肉を炙り。此上も無き便利の道具。今此中にリサ*るゝ醫博士。多くの人を救はん爲。其身を棄つるは世の稀人。我子と云ふも勿體無し。臨終



月 皎 庵 日 本 室

* ールが。心を籠めしイヤ心を籠めて御身へ形身。大切に頼むぞと。目顔で知らず歌の在所。何かは知らず妹は。心有氣の一言と。泣くく受取る石油燈。消て冷たき姿をば。見るに塞がる我胸を。掻き抱きつゝふし沈む。母は氣丈の聲ふり上げハヤア女々しき振舞ひ見苦しし。ホセ、リサールと呼

の其前に。一目逢ひしは此上なき喜び。眞の神の御恵み。世に盡させずば。此母も。追付け必ず天堂に。上りて對面しますると。言へど流石に打振ふ。聲に堪らずホセヒナは。雪のうなじに散りかゝる。黒髪を掻き拂ひへのう我夫。鹽路遙けきミンダナオ。ダビタンの配所にて御分れ申せし其時は。此様な淺ましい。御姿を見やうとは。夢にも思はず香港の。ビークの雲の行來にも。心をつけて朝夕の。御無事ばかりしを祈りしに。思も寄らぬ謀叛の疑。解くよしも無き濕衣を。神は憫れと見給はぬか。勿體なやわらはの爲。懺悔の文の詫言は。筆の先から流れ出る。インキの色も紫の。血を吐く思ひで御座んしたらう。それを思へばホセヒナも。バダンバヤンの刑場に。枕並べて人の爲。身を棄草の葉末の露。消えて行きたい行きたいと。前後不覺に涙河堤の切れし如くなり。折から大勢番卒ども。劍附銃の篠すしき。率ゆる將校大音に。叛逆人ホセ・リサール。刑場へ早や參れと。呼ばる言葉にリサールは。につこと笑ひて威儀を正しへ罪無くして刑せらるゝ。我心には一點の曇り無きこと明鏡の。匣を出るが如くなり。死生は元是れ晝夜の違ひ。國の爲人の爲。幾年月のかげ巡り。疲れを休むる神のはからひ。一齊射撃の銃音に。此世の夢を醒すも安樂。いざ御案内下さるべしと。悠々と立上る。大悟の言葉に驚く法師。暫しとすがるホセヒナ妹。動ぜぬ老母。取々の。

別れを後にリサールが。最期の庭にひかれ行く。心の内こそ

註に曰くタベラ氏は比島の志士リサールの先輩なり。

此船にウイスター博士の友人ウイルソンと云ふ磊落なる米國紳士が同乗した、氏の話によれば先日余の立寄つたカガヤンの奥三十五哩に農園を經營して居るのはウイスター、ウイルソン兩氏の合同事業で、土人百人を使用し牛二千頭を放牧し穀類、甘藷栽培をもやつて居る、土人の外に白人監督者五人、黒人鍛冶屋一人、日本人大工一人を使用して居る、ところが其日本人が滅法上出来の男で仕事も上手大好評との事目出度い話である、翌くれば八月廿八日拂曉船は科斗のやうな形したるコレヒドル島を過ぎ六時エスコルタの河岸に到着、茲に南方見學を終つて再びサンデー



比律賓名物の刺繡

ハスの三神大學寄宿舎に這入つた。

マニラの美術學校

マニラ歸着の後九月八日出帆までは、見残したるマニラ市内の學校を觀、新聞記者其他の人々に面會して意見を聴き、新たに到着したる書籍を求めなどして忙しく過した、其間に見物したる、二三を記せば第一が比律賓大學の一科たる美術學校でキガルホ區のヒダルゴ町に



比律賓の大木

別設せられ、繪畫、彫刻及彫金を教ゆる、比律賓には是れまでも可なりの美術家が出て居る、余は不幸にして其作品を實見する機會を失つたが、歐羅巴まで名を知れた者が有ると云ふ、其中フアン・ルナが最も著名で其姓名をマニラの町名に遺して居

り、一代の傑作は總督官邸の壁間を飾つて居る、偕美術學校長はラファエル・エンリケと云ふ西班牙人で名からして畫書さらしい、教員中には佛蘭西人其他の歐洲人が居る、一日三神君と共に同所を訪ひエンリケ氏の案内を煩して校内を一覽した、生徒は七百人と云ふことだが冷かしが多數で有る、少數の登校者は、繪畫彫刻彫金とも熱心に勉強して居るのを見た、生徒の描いた油繪にも往々筆力の見るべきものがある、エンリケ氏は其教授の方針寫生を主とし力ある畫を作らしむるに在りと語られた、階上に西班牙の大家ヴェラスケスの畫を



模寫したるものが二枚掲げてあつた、エンリケ氏の作品を一見せんことを望んだが生憎校内には一枚もなかつた、大學總長ヴィラモア氏の日本視察報告書に東京の美術學校を觀たことを記して、日本には日本畫が有るが比島には洋畫の模寫ばかり特有の風景人物を畫い

たものが無い、日本の繪畫は其日本式の意匠を工業上に應用して居るが、比律賓はまだ其程度に至らぬ、今後比律賓人は大に奮發して比律賓の畫を畫かねばならぬと云ふことを論じて居らるゝ、如何にも比律賓には面白い繪畫や、工業美術の材料が澤山ある、之を活用すると否とは比律賓美術家の技倆如何に在る大に勉強を望む次第である。

總督ハリソン氏を訪ふ

マニラ總督ハリソン氏はデモクラット政府最初の總督で、比律賓自治の爲大に盡力しつゝある人である、余は六月着の時香港から同船したのでヴィラモア總長に紹介を乞ふたところ、海が少し波立つた爲總長は船室に引込み上陸まで遂に紹介の機會が無かつた、今や南方の巡遊も終つたから此際お目にかゝらねば遂に御無沙汰のまゝ歸朝することになる、陸上では總長も船室に引込む虞が無いから再びこれを煩はして刺を通じた、八月二日面會と云ふことになつた、其所で當日三神君と共にアუნタミエントに行つて面謁を得た、「好くぞ御來遊到處見物に不自由は無かつたか、何事でも便利を圖るべし遠慮無く申されよ」と誠に丁寧な御挨拶であつた。三神大學入學新聞記者諸君厚志の事やカーペンター長官に去年以來約束のこ

となど陳述して、大抵所要の材料も手に入れた由を答へたら「三神君が附いて居れば大丈夫」と微笑せられ、大學長殿大に面目を施し「ソレ見ろおれの教育はゑらいものだらう」と大氣焔を吐いて余を烟に捲いた、何處までも無邪氣なは此敬長殿である。

商工會と舞踏會

マニラに日本人の救済會があつて之を商工會と名ける、從來は餘り振はなかつたが近來三神君が其會長たることを承諾してより初めて活氣を帯びて來た、會員は大工、漁夫、理髮業者など色々あるが何でも日本人で實業に従事して居る者は皆之に加入し得るもので、當地に來て病氣などに罹つた場合には之を救助する協會である、九月二日其會合を催すと云ふので三神君と共に之に出席して、余は請ひに依つて日本人の注意すべき事柄を談話した、其會合は夜分であつて、是が終る頃マニラ唯一のオペラハウスでセントルークス病院への寄附の手段として大舞踏會が催される、杉村領事の御誘ひで三神君と共に顔を出した、今夜は其會の性質上マニラに在住する總ての主なる米人は皆出席するので、總督ハリソン氏も我々の隣りに着席して居られた、マニラには芝居と云ふものがなく、此オペラハウスがあるばかりであつ

て其建物も極めて粗末である、今夜は電燈を以て美しく裝飾し、見物席の背後には青竹の簾



(息令及堂母)軍將ドルナギア

を作り竹の香りが咽るやうである、踊りは大分長く續くやうであつたから途中で退席したが、涼しいと云ふても熱帶の家の中に黒い禮服を着けて舞踏する米人は矢張寒國の着倒れ人種であると云ふことを深く感じた、外に出れば無数の自動車が並んで電燈の光

晝を欺き一脈の涼風白衣の襟を音づれ來る。

大學農科

農科大學は比律賓大學の誇であるが其所在地がロスバニヨスであるから容易に見られぬ、

八月五日總長ゲイラモア氏と同伴して同校へ行くことになった、マニラから十六里半、自働車道が通じて居る、午前八時サンデーハスを發して二時間にして到着、學長コーブラン氏、教授ベーカー氏に紹介せられ其の案内に依つて學校の講堂、庭園、農園等を一見した、學校の敷地は山脚の緩傾斜地で廣さ三十町歩其間に丘あり、谷あり、小川あり、實習には以て來いである、講堂試験室が其間に散らばつて居つて、生徒の寄宿舎は普通の農家と同一のニバ屋で澤山に建てられてある、但し此寄宿舎は生徒自ら建築するもので其稍大なるものは數人共同の建造に係り、自炊生活だから共同して料理人を雇ふ、目下在學の生徒は四百五十人である、此學校の理科室で彼の椰子の害虫バギバギの正體を見たら小指の先程の白い蝶であつた、其昆蟲の標本は中々豊富で中に一頭五百圓と云ふ此島特有の蝶があつた。

庭園を巡回すると總ての比律賓植物試植せられて居る、農學校兼植物園兼公園である、是れまで各處で見た庭園裝飾用の植物高さ二三尺程の灌木で其葉面に黄斑の澤山有るものを漸く此處で名を知ることを得た、是は拉典語でコデアカム・バリエガタムと云ふもので通稱はクロトン(巴豆の譯語あり果して同物か)と稱する、種類が非常に多くて此處にも四十種ばかり集められてあつた、カンナもいろ／＼有る、其他咖啡、カカオ、バナナ、バラウ等其種類甚

多く、バナ、の如きは凡そ四百

種植えられて居る、彼のビホコ

(籐)の如きも幾種類かあつて、

ダヴァオで余の帽子を引掛た奴

も此處で却て能く正體を見届け

た、生徒は皆農具を持つて實習

をやらされるのであるが、西班

牙時代に専ら精神的の教育を重

じた結果比島人は兎角勞働を卑

んで少し學問をすれば親を馬鹿にし袖手徒食するの風があると、米人の慨嘆話(我國でも近い

頃まで御同様であつた)其所で米人は頻に勞働の神聖を教育上鼓吹して居る、然し低級の農學校

が各所に出来れば今日の不完全なる耕作法を一變し國內の荒地を變じて美田となすことは造

作もないことである、本日の同行者は始審裁判所の裁判官サンタマリア氏であつた、ゲイラ

モア氏の好意に依りロスバナエスの土人ホテルで午食し、食後再び自働車に乗り坐睡の中に何



比律賓の米

時かサンデーハスに歸り着いた。

カーベントー長官に別る

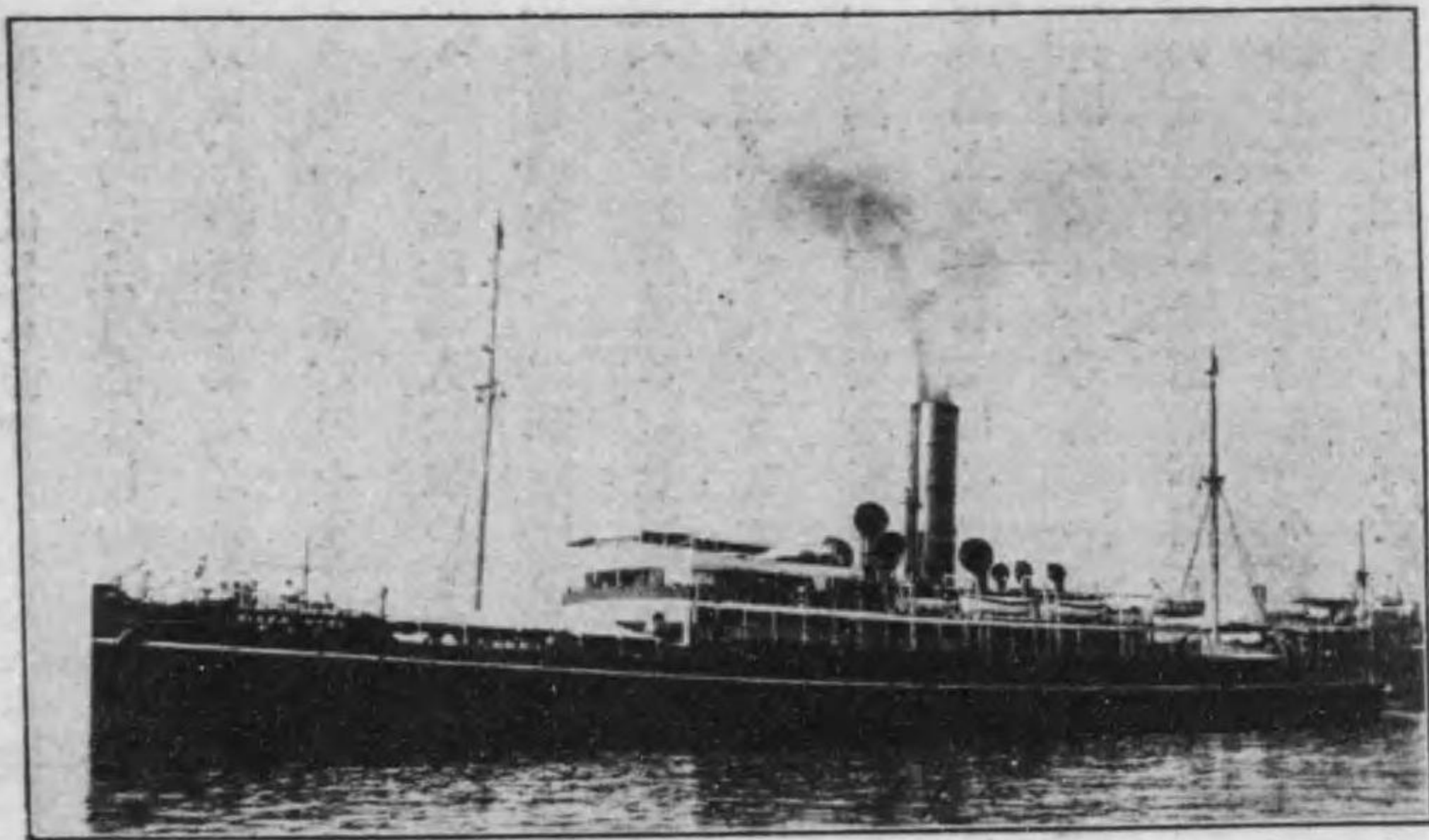
余と共に南方からマニラに來られたカーベントー氏は八月五日に其官船ミンダナオでマニラを退去せられた、ロスバニヨスから歸つた後太田君と共に之を第三の棧橋に見送る、長官は例の如く親切なる態度で余に向ひ尚ほ他に望む所ありやなど、質問し、残り惜氣に手を別れたが、其前長官は其携ふるモロの山刀一本を余に贈られた、モロの特色とする刀は刃の波形をなしたるクリスである、竹越君の南國記に、日本の神代の刀と同形であらうと云ふ珍説を掲げられて居るが、此度ミンダナオで調べて見れば矢張其波の一曲りを一つか(握)と云ふさうである、竹越君の言ふが如く神代の十握の劔などもクリス式で有つたかも知れぬ、珍説即ち新説として敬意を表する、近來モロの武器を押收の爲にクリスは容易に得難く余はダゲアオ、ホロ等で搜したが見當らぬ、漸くサンボアングの一古物店で一本を買求め得た、長官は此事を聞いて然らばポロンを記念して贈呈しやうと言ふて山刀一名首斬り刀を贈られた、此比律賓旅行の記念として余は長く之を坐右に置くこととする、抜いて振回はしては危険だ

から唯坐右に。

アギナルド將軍と語る

米軍マニラ占領の時米軍と協同力戦し、後共和國を建て、米國の比律賓占領に抵抗し勇名を世界に馳せたるアギナルド將軍は、其後故郷カピテの近傍なるカウイットと云ふ處に退いて農業を營んで居る、カピテは馬尼刺より十五哩汽車の便もあれば氏は屢々マニラに出て來られる、九月六日に用事があつてロサリオの三井物産會社に來訪せられたのを機會として面會した、鬢邊には少し白毛を交へて居るが年齢四十七歳の男盛り、猶頗る若々しく見える、舉動は頗る沈着で流石に衆人を率ゐる大事を行ふ器量人と見えた、氏は元カピテの小學校教員であつた、其夫人の父君某氏智勇拔群殊に地方の名家であつて衆人を威服し次第に青年のアギナルド君を引立て、叛徒首領の位地に立たしむるに至つたのであるさうだ、併し米國人もアナギナルド氏の統御力に富むことは苦情なしに承認する、氏は西班牙時代千八百九十六年一回兵を擧げたが資力及武器續かず、西班牙政府も亦之を鎮壓するの力がなく、協議の上其兵を解き政治上數箇條の改革を約束せしめ、千八百九十七年香港に退去したのである(此條約を

ビアクナバトの條約と云ふ)米國の海軍司令官デユウエー將軍マニラに侵撃の時新嘉坡及香港の領事と打合せて、アギナルド將軍を歸國させ兵器彈藥を供給して内地に擾亂を起させ米國陸軍の到着するまで西班牙軍をマニラ城に壓迫包圍するの策を執つたのである、其時に右の人々等が比律賓獨立援助を約束したと云ふのでアギナルド將軍は米國の比律賓領有に反對し、米西講和比島米有に歸するの後、マロロスに共和政府を建て一年以上に亘り米軍に抵抗したのである、其後軍敗れて呂宋東部の山間に逃れたが、米軍に捕へられ米國に降伏し今は平靜な生活を營んで居るが、時々其部下の將軍連と會合して何か圖る所ありとのことで米國人中尙尠からず將軍を恐れて居るものがある、併し今日將軍は再び武力に訴へて獨立を得やうとする様な事は到底無い、唯雌伏して自から其時期の至るを待つて居るものに相違無い、將軍の屬するタガログ人種とオスメニア氏の屬するビサヤン人種とは恰も我薩長と云ふ如きもので其間に勢力の争感情の衝突がある、米國人の一部は將來オスメニア氏比律賓の大統領となるが如きことがあるれば、アギナルド將軍の舊部下は必ず氏を擁して之に抵抗し、或は流血の慘を見るに至ることがあるだらうと云ふ推察を下すが、是れ恐らくは外人の杞憂であらう、氏は議院政治など面倒なる仕事は好まず平時の事はオスメニヤ、ケソンなどの政治家に一任



して自家は手を下さぬ方針を取らるゝであらう、唯比島人の興廢に關する如き大事件が起れば直に推されて其先頭に立つ位の勇氣は今だに持つて居り、亦こう云ふ事が適任である、氏の過去の一大失策は人望のあるルナ(畫伯ルナの兄弟)將軍を殺したことで、是が爲に大にルナの舊部下から恨まれ、又將軍の反對者をして攻撃の口實を得せしめて居る、戦争當時アギナルド將軍の金地院崇傳たりしマビニ一氏が英西兩文で書いた「比律賓革命の真相」中に此事を明記し、アギナルド將軍は其屍を戦場に曝すべかりしものであると云ふて居るのは一大痛棒である、併し人誰か過なからん、アギナルド將軍の心中國家を思ふの念が其自ら利するの念に優つて居れば一個の過失は以て其功績を

打消すには足らぬ。

余は氏に名刺を呈した後近來は如何御暮しなさるかと聞いた所が、唯農業をやるばかりでアバカ、砂糖、米などを作つて居りますと云ふことであつた、そこで比律賓人は農業を嫌ふさうであるが貴君のやうな衆人仰望する人物が卒先して農事に従事せられ、善き手本を示さるゝことは比島人に取つて極めて有難いこと、言はねばならぬ、御承知の日本維新の元勳西郷隆盛の如きも、革政成つた後は郷里に歸り自ら田畑を耕して衆人に自勞自活の尊きことを教へたものである、貴君願くは比島の西郷先生に御成り下されと言つたら、頗る謙遜の態度でさう云ふ譯でも有りませぬと苦笑して居られた、其時三神君が、今度は自治案も通過したから比島人も餘程安心するでありませう、其所で今後は落着いて大に産業の獨立を圖つて政治の獨立の基本にしなければならぬと考へますと言ふた所が、アギナルド氏は獨立問題の事は外國人には一寸真相が分り悪い事で、比律賓人の考は大分外觀と相違して居りますが、其邊のことは一寸御話が出來ませぬと意味深長なやうなことを言はれた、將軍は英語を談らず三神君の西班牙語も内々だが實は頗る怪しいものであるから御互に十分な話が出來ぬ、意味深長を打切りとして將軍と手を握つて別れた、將軍の用事は其知人を紹介の爲めで兵器彈藥

を買求め一旗上げやうと云ふ事ではない、讀者御安心下さい。

圖書館の貴重品

比律賓圖書館は政府の設立に係るもので舊城内に在る、其中別に比律賓部と云ふものがあつて、比律賓に關する書籍や圖畫を藏して居る、彼のリサール博士の用ゐた書籍も悉く此の館に收藏し金網の書棚の中に收めて有る、比律賓部にはアルテガス氏、ボンセ博士兩君が居られ、館長はカラウ氏である、アルテガス氏は歴史に通じ近頃西班牙語で比律賓の歴史を書かれた、余はボンセ博士に用があるから屢々此館を訪ふたが、アギナルド將軍に面會した日の午後三神氏と共に館長カラウ氏(兄君の方)を訪問した、氏は過日の東洋協會晚餐會にも出て居られた人で、吾々の至るを大に喜び此館に藏するリサールの絶筆「臨終の感想」と題する詩の原物を示された、それは大さ四五寸程の薄い西洋紙に細字で裏表一ぱいに書認めたもので(インクで)其文字の美しく整ふたることは如何にリサールが死に至るまで泰然自若として居つたかを證據立てるに足る、それから又同じリサールの有力なる小説ノリ・メ・タン・ヘルの自筆の原稿も此處にあつて、是も其字體の奇麗なること活字を以て印刷したやうで表紙の意

匠も自畫で有る、其畫は一吋日本風に出来てる、表紙は厚紙に太い麻紐が付けてあつて其麻紐で上下を睨と結ぶやうになつて居る、此他將軍マビニの著書「革命の真相」西英兩文共自筆の原稿が此處にある、近頃クレグ博士の出版に係るものは西班牙文から博士が新に英文



岩窟中の聖母

に翻譯したもので有る、其文アギナルド將軍非難のところ穩かならずと云ふので政府より買上げ再版を禁じたさうである、クレグ博士は先日面會余の南遊中辭職歸國せられた、それから又マビニが英文を稽古し

た原稿がある、此マビニと云ふ人は法律を學んだ人だが、餘程奇才で英文にも長じて居た、其稽古の作文に教師の手入れたものを見れば稽古は悉く商用往復文であつた。

勳一等ペトレリ師

マニラには羅馬正教の本山があつて其處に大僧正ハーター師が居らるゝが、此外に又羅馬法王を代表するペトレリ師と云ふ人が居て東洋の諸寺を監督して居る、此人は先頃我が天皇陛下御即位奉賀の爲日本に渡來した事がある、其時勳一等旭日章を贈られた事は世人の記憶するところであらう、杉村領事から著者が比律賓を巡遊することを聞いて是非一度會ひたいと云ふことであつた、此方も御目にかゝりたい、そこで九月の七日に領事と共に招かれて晝食を喫することになつた、極めて非公式に打解けて話をしやうと云ふことで平常の服装で出掛けた、師も亦常のまゝ吾等を迎へ互に心置なく閑談した、例の伊太利名物のマカロニが出たから余は遠慮なく二杯頂戴した、食後ペトレリ師は日本の各地の歓迎文や記念品を示され日本訪問の愉快を語られた、雑談の中余は法師剃頭の習慣につき一問を師に提出し、師と領事とを笑はせた、又雑談中余は「南蠻寺興廢記」を引いて最初のバテレンが京都を廻る時に馬上にて爪より火を出し煙草を吞むと云ふことがあるとを師に話したら、そんな魔法を使ふ筈はない不思議だと驚かれた、實は余も不審だから篤と研究したら當時の葡萄牙人や西班

牙人等は小さな硝子玉を携えて天日を取つて煙草を喫ふた事が判つたと説明したら、そうだらうと大に安心の體であつた。

大盤石の日光丸

余の此行都合好くはジャワまでも脚を延ばさうと思つたが思の外多くの時日を比律賓に費やし、少し旅行に厭いて來た、昨年一月から七月まで濠洲新西蘭を旅行し、本年は比律賓の三個月、随分余も黃帝の脚當りである、其所で九月六日マニラ發の日光丸に乗つて、一先歸國と決心した、唯セブと肩を並ぶるイロイロ市に行かぬのが残念であるが、此頃虎列刺病盛んに流行してイロイロが最も猖獗、防疫委員と地方官憲との間に衝突が出來て、屍體さへも往々抛棄してあると云ふやうな状態で、命の懸換を持たねばイロイロに行かれないやうな有様であつた、そこでイロイロを略して歸船の途に就くこととした、日光丸は昨年濠洲行の時に乗り其サンボアンガ寄港開始祝に參列した因縁もある、之に乗つて歸國するのは頗る首尾を全ふするものである、兎に角日光と極めたところが、今度濠洲で水先がヘマを働さされてマニラにやつて來た、余に取つて却て幸である、然るところ余の著「濠洲新西蘭」に横

揺れを以て有名なる日光丸と書いたが爲に船長武田良太郎君から大に恨まれ、横揺れ丸に何故乗つたと殿しい御叱りである、苦しませられ



(リヨに中の屋上)架字十のンラゼマ

込みである、併し實は門司の石炭會議に招集せられて之に赴くのであつた、所に恰度ミンダ

連れは有り船長は

善し日光の

揺れても末に乗らん

とぞ思ふ

と詠んで僅く罪過を許された、倍此連れと云ふのが大した者で三神大學總長三神敬長其人である。三神君は余に對する比律賓學の教授未だ了らずと云ふので大學を延長して日本まで同行せらるゝとの振

ナオに同船したヒツチコック君も此船に乗つて歸國の途に就き、船上に於て其十五年間の蘊蓄を傾けて大に三神君と共に余を教育すると云ふ騒ぎで有る、さうかと思ふとシドニー領事館の英文書記白濠洲反對論者の親玉フォクソール先生も養生の爲と號して乗込で居り、加之先日マニラまで同船した神戸の辻誠之君が濠洲新西蘭の遊を終つてこれも同船で有つた鑛山師ブール君と共に乗つて居る、シドニー大倉支店長加藤君も乗つて居る何と云ふ賑かい事の有らう、而して今度は船長魔法でも使つたか、日光丸動搖せざること大磐石の如く縮緬を布いたやうな海上を威勢よく駛走し、九月十五日夕驟雨將に來らんとする長崎灣内に其錨をドゥンと投げた。

比律賓の將來

以上記す所に依つて比律賓の状態は略讀者の了解する所となつたであらうと思ふが、比律賓は將來如何に發達すべきか、比律賓と米國との關係は如何なる形式に於て繼續すべきか、比律賓と日本との關係は如何等種々なる疑問は亦必ず讀者の胸中に湧起し來るであらうと思ふ、それに就いて、卑見を述ぶるも烏澁がましいが比律賓旅行者の義務として黙して已む譯にも行くまいから三個月間の見聞を基礎として比律賓の將來に就きて一言し、讀者の御參考に供することゝ致す。

西班牙治下の比律賓

比律賓現在の状態は半ば以上過去三百年間西班牙が同島を領有したる結果から成立つて居る、故に現在の比律賓を觀察する前に先づ過去の比律賓を觀察し、西班牙は如何にして此地人民を失つたかと云ふことを頭に入れる必要がある。

凡そ物の衰微は其繁榮の時に兆し、失ふ事は得る時に於て既に其原因を含むて居る、されば